せ給ひて諸將の軍兵をすゝめげまされんとの故なるべきにやといれけり

○大坂和平破れて後秀頼軍評定の時第一坐に長曾我部次に眞田次に毛利豐前守列坐せり秀頼大野修理を以て各所存を問れけり眞田毛長曾我部に申されよと辭しければ長曾我部聞て眞田殿あらでかゝる闘を申出さるべき人有ともおもはれぞまづ申されよと答へ眞田さらば申て見ん去年の軍は城固く兵粮も又多かりき日數を過ば必西國の内に必をよする人もあるべきか寄手の中に心替も有べしと何れも存寄たる處におもひの外に和平に及で惣堀はうめられぬ今度は守り遂べき道なし只打出て軍する程ならば君御出馬ありて伏見の城を攻落しすぐ上洛し洛外をば燒はらひ宇治勢田の橋を引落し所々の要害をかたく守りまづ洛中の政を御沙汰有べし若御運尽くとも御上洛にて一度天下の主となり洛中の御政務を執行はれんにおいては後代の名聞なりといしに長曾我部を始としてみな同心しけるに修理秀頼公の御旗を出されん事かろ〳〵しきに覩たりとて背ぬ色を見て修理が母を人質に出し置ぬいかなる所存にやと人〳〵疑ひて議決せぞしてやみけりゝ所に修理が母の人質に出し置たるも返し賜はりぬすでに關東の人數伏見に着と聞えしかば秀頼又諸大將を集めて再び軍の評定を長曾我部又最前のごとく眞田にもづりければ眞田駿河大御所の軍だて常にいやりたると承しに少しも違はぞ其故は昨今伏見へ着陣して軍兵の疲をも休めぞはや茶臼山におし寄べきと甲沙汰はやり過たるにあらぞや伏見より大和路をおさべ行程十三里なり雖疲るべし明夜は軍兵いかに存ると雖も胃を枕として一ねふりせぬことあるべき一夜討すべき圖に中りたる左衛門佐能向て一擧に勝負を決すべしとヲければ後藤又兵衛いかにも此謀然るべう存ぞされども眞田殿をもて夜討の大將とし萬にひとつも討死あらん時人々力を失はん今度國々の諸浪人馳集る事偏に眞田殿一人を目あてなり夜討をばかく申す又兵衛能向はんといへば眞田とかくわれ能向ふべしといふ後藤は有無に後日の合戰大事なれば眞田殿殘りとゞまられよと爭論して終に一決せでやみけるとなり

○大坂夏の軍に水野日向守勝成に大和口先陣の大將を命せらる堀丹後守直寄松倉豐後守重政大和口に向ふ五月五日夜ふけて勝成敵よせ來ると見えて松明多く見ゆ懈るべからざるよしを諸將にいひ遣はす丹後守聞て日向守は物になれたると聞しに功者ともおもはれぞ寄來る敵何ぞ松明を多くともさんや敵にはあらじといふ處に日向守又使を以て松明みな消たり敵にはあらじと告知らせたれば丹後守さては敵なり何でゝろもなくて火をともしつれたるが功者ありて消させたるならんといはれしが果して後藤又兵衛ありけり

○松倉豐後守重政後藤又兵衛が陣を切崩す松倉が士山本權兵衛義安十八歳にて鎗を合せ首をとりけるひまに鎗を敵にとられたり其鎗じるし敵の中に見えしかゞ今ゝ是まであり討死せんと云すて、敵の中へ入鎗を取返し其鎗にて又敵を突伏せ首を取て歸りけり

○大坂冬の軍に池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣に行しに村山越中毛利に向ひ我今朝より敵近く居てつかれたり指物を散々鐵炮に打破られぬといふ毛利我五百人の士の中より撰ではろを許されたり汝に誑かされんや汝竹把の外に出ぎと覺ゆ指物の先のみさけたるゝ其證なりといへゞ村山答ふる詞なかりけり

○荒原助右衛門ゝ井伊家の士大將にて軍奉行なり大坂夏の軍に五月六日に道明寺に向て先陣たり井伊家の士大將川手主水成次ゝ去年の冬より直孝をうらむる故有て討死せんと思ひ定めたり出たちける日父子最後の盃したりとかや金の鶴口の指物にて直先にかけ出る山口伊豆守重信

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信二男長次郎弘澄ゝ御勘氣を蒙り蟄居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出たり

遠山甚次郎鷲坂彌五郎滿座七郎右衛門もれとらじとさきがけを木村長門守重成が一陣鎗の

鎗を揃へて待かけたれゞ川手を突伏たり荒原ゝ堤の上に折しきて居たるが川手が倒るゝ時腰にさしたる金の麼のひらめくを見つと立あがりかゝるべしと下知する詞の下より八田金十郎走り出眞先かけたる味方の斬伏られたる屍をふみ越て大音あげ一番鎗と名乘鎗を入けるを敵三十人餘り取巻たるにゐい〳〵と呼ゝり面もふらぜたゝきあひたるが取巻れ廿一ケ所甲冑を突さかれ既に討死ぜへき所に戸塚左大夫を始として冑のしころをかたむけ黑けむりを蹈たて、井伊が軍兵一同にどつと押かゝり木村が陣を切崩す荒原ゝ十文字の鎗をよこたへ進んで木村を目にかけて立向へり木村荒原を二鎗まで突たりしに荒原鎗のしは首を握り珠數を手に懸たるが念佛を唱へて野猪のあれたるが如く木村が鎗の下に走り入て突伏たり安藤長三郎かけ來りて其首給ゝらんやといふ荒原聞て大坂落城日あらじ敵の大將の首とる事易からじあたゆるぞといへゞ安藤木村が首を取荒原はろかけたる武者を討取て其首に毋衣絹添て奉る事軍法なり大御所の實檢にそなへんに母衣絹につゝまるべしとて母衣絹を安藤に與へしかゞ荒原が從者母衣の出しにしたる白熊金のねぢ竹ゝ荒原が許にとゞめけり

一說に陣所に馬盜あるべしとかねて警しに安藤長三郎不敵者にて用心もせぜ馬を盜まれ翌日の軍に井伊家の軍兵木村と戰ける時おくれたり敵敗北に及びて長三郎走り付た

るを助右衛門見てあれに腰掛たるハ能敵なり討取といへべ長三郎動かぜして死人の如くなる者討て功名にあらぜと答ふ港原しゆれば長三郎あゆみより詞をかくれ其只音とれとのみいひて立あがらぜ長三郎則突伏て首を取る是木村重成なり長三郎が賞して五百石あたへらる此軍に千石の賞を與へらるゝ者あり將の首を取たれども其法をしらざる故賞少しと直孝語られしとかや長三郎ハ安藤帶刀の從子也

川手滿座山口ハ軍の場に死去遠山ハ敵の首を取て港原に見せるとて立ながら死す鷲阪ハ小溝の中に倒れしが口の中に暖りありて百姓の家にかき入たりしが息出てたすかりぬみな敵に逢ふ事早かりしかども軍奉行の港原が下知なき以前ゆゑにぬけがけとし八田を一番槍に定められ東照宮御感狀を賜ハりけり

金十郎ハ一番鎗を合せるのみならぜ山口左馬介山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取たりといへり御感狀に黄金御馬を添て下さるともいへり

木村が首を御前に出そに髪にたきしめし奇南香の薫せしかゞ御感あり木村が胄ハ四方白ゑて鍬形の立物打たり港原が子の主税助北る敵を追かけて組討しけるゑ助右衛門はせよりていかに主税こゝろしづかにせよ爰にて見物そるといひけり主税是に力を得脇差を抜て刺通

しよわる所に從者ハしり來り遂に其首を取横地修理西郷伊豫是を見て東照宮に主税が幼年の武功を稱し申けり後に人々子の敵にくみたるに抜けざりしハ如何にと問けるに港原たれも子ハかはゆきものなりとのみ答へけり

直孝木村と軍する時中に堤あり又藤堂高虎も同じく敵に向ふ所に久貝因幡守高安鎖後使をもて敵と味方の中に堤あり是れをとらバ味方勝申べしとく御旗本を進め給ふべしと申す東照宮怒らせ給ひこれ程の事思慮なくて我先陣の大將つとさるべきや敵堤をとらばすて、敵にあたへてこそ勝べけれ高虎とも覺ぬものかなと仰有し處に小栗又市はせ來り直孝只今敵にかゝり堤あり此堤をとらバ勝んといさみ立と申東照宮さぞあらん必分勝なりと仰られけり又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ濱邊渕兵衛敵とせり合し時高虎馬を御旗本に乘羽り御旗を寄られよと申ゐあへぬゑ横田甚右衛門馬上より大音のけ御旗を寄られよとヤハ何者そあれ逃ちらすべしと罵りければ高虎馬を乘歸る是も勝劣の徒なるべし東照宮皇山入港を召て關耳の武者ども軍にあれて物いふ詞のおをしろさと仰有しかバ入港只今の一言横田ならでハと感じ申けり

○五月六日井伊家の士脇五右衛門今日の合戰ハ跡より段々におし詰來れバ大かたの事にて

ハ功名遂がたし若き人々の力かぎりはたらかるべしといふ處に直孝の近習の士三彌といふ若年の士首二ッとりて脇に見する脇もまた二ッとりけり翌七日三彌又首二ッとりて脇に見すれば脇もまた二ッとりたり後に老功の武名の聞ゑ有る人々あつまりたる處にて三彌何れも老功の人とて崇め其身も泰なる体をふるまハる、事ぞかし大坂の軍に事替りたるともあく老功とて崇むるハ何の故ぞやといふを脇聞て此度汝の功名のごとくなる事度かさなりたる者ぞといへば三彌さてハ子細もなし吾功名の如きハいと易き事なりといひけるとぞ

○増田兵大夫ハ長盛の子なり大阪冬の軍に城中よわると聞べ涙を流し斉手の攻あぐみたると人いへべ大によろこびけるを東照宮聞し召誠に長盛が子ありけり豊臣家の恩を忘れざる志尤ありと感じられ夏の軍に御赦を蒙り城中に入り秀頼より賜りたる赤地の錦の羽織を着若江の敗軍の中に獨ふみ止り澤田但馬が従者と引組でくみしきたる處に藤堂高虎の士毋衣の者儀野平三郎はしりよりて討取其首を得たれども名をしらぎ刀を分捕したるが秀吉より長盛に賜ハりしもの故兵大夫とハしられしとぞ

○木村が一陣敗北しける中に青木七左衛門黒毋衣かけ長屋平大夫ハ白毋衣かけて直孝の兵の中にまぎれ入しに井伊家の赤色の物具にたがひたれべうらめ取東照宮の御前に引まゐる

長屋ハ今禍にて一番鎗を合せ青木ハけふ西郡にて一番首を取たりと名乗申す其体あハれ剛の者よと見ゑしかべ二人共たすけられ美濃にておの〳〵五百石の禄賜ハりけり

井伊家のあかき物具ハ直政の時よりはじまれり甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵皆一色に赤かりしを東照宮御覧してこのませ直政に仰られて甲冑をはじめ旗指物鞍鐙鞭にいたるまでみな一色に赤いろなり夫より井伊の家に新に奉公する士あれべ武具奉行軍令を見せて物具みな新に赤色にして百石に二十両具足びつに納め奉行の士受取て城中の庫に入置其價ハ禄の内より返しけり若去て他國にゆく士あれハ奉行の士武具を返しあたへけるとなり井伊家の軍令とて赤いろの武具ハ事しるせる書も今世に傳ハりけり

○藤堂高虎の士大將渡邊勘兵衛了ハ

了ハ若き時阿閉淡路守に奉公し十七歳の時一日に首六ッ取たり阿閉の家にて剛の者といハる、士十幅一丈の鶴の丸と繪こ書たる毋衣をかくる者六七人有しに了に此毋衣を許されけり後中村一氏に奉公せしが小田原の北條を攻らる、時山中の城を俄に攻落そべき様を見て一氏を進めて頓て打破り成合平左衛門に一氏の馬じるしを本丸のそみ矢倉におし

立させ中村式部少輔一番乗と呼ばりけり秀吉錦の羽織を一氏に與へられしかば我けふの功名ハ汝故なりとて羽織を了にあたへられしに固く辭しければ羽織の片袖をあたへんといはれしをそれとも辭しければ遵生院庶毛といふ馬を了にあたへられ後北田長盈に奉公せしが關ヶ原の時ハ大和の郡山の城に有關ヶ原の軍破れて郡山の城を受取んと筒井伊賀守打向ふ城代桶與兵衛藍屋徳順等了と共に城を守るに了ハ三の郭を抱口とす大將なければ盜賊所家に入つて女わらべをなやます了五百計の兵を打遣りて盜を切殺し追ちらす或夜盜賊城外の町家に火をかけんとせしを了出てあまさず討取しかばこれより盜ども敵おし寄ると聞おしかば城外の商家を燒拂ハんといふ了長槍ヶ脇ありはやまりて怠ハ商賈多きてうろたへんも不便なりとて止けり城兵新八を合せて三千餘りなりしに士三十八下部八百計かけ落しけれども了に從ひたる者ハ一人も逃出ず又城中の士百餘人金銀をあたへずば出奔せんといふ了大に怒りて城中の藏に有金銀ハ皆貝の殼なり原の仰なくていかでか出すべき且此城を墓所と思ひ定めたる身の金銀何にかハせん出奔せんとの月意ならん錢一文もわかつべからずかゝる者に兵粮米を費さんよりとく出奔せよと罵りて三の郭より妻子を本丸へ入ければ相卷儀右衛門もつゞいてしかしたり服堂高虎本多正

純郡山におし寄せ此時長盛ハ高野にて殺されしなどいひふらす大阪よりはせ來る士卒を合せて九千餘人ありしを了下知して持口を配り日夜打巡りて怠を戒ひ凡將なくてたゞ籠るものハ各相疑ひてこゝろ〳〵に成こと常なるに了が下知よりしづまりて城に將あるが如し長盛高田遠江山川半兵衛こ書商を持せ城に庫の物を添て目錄をしるし藤堂本多に渡すべしと命せられしかば大手搦手の門の鑰を高田寄手の士にあたふかゝれば奉行をもて門を守らせ本丸までも入んと騒がしかりければ了使をたて城中より守るべき門々を寄手より人を付らるハひが事なりといハせ了下知して手あらく門の鑰を奪ひ返してけり城をわたせし時外郭の柳町より奈良の方大安寺をさしてしづかに兵をくり出よ能了が法令の嚴正なりしによりて一人も騒ぎし者あかりけるとぞ了ハ跡に殘り鑰を取返しける時の寄手の人々に向ひさきのしわざ無禮こ似たれども武士の義理と申物なり若城中の庫の物一ッも失ひなん時ハ増田が士どもハ盜をして出奔したりと申されん事口惜ければかく計ひきといひけれども答ふる人なければ鑰を投出し返して大門を啓かせ殿して城を出大安寺に至りそれよりみな人々分れ去けり長盛高野にて了が下知せし始終の有樣を聞九千の軍兵馬も凡八百匹もあらんによく下知したりとて深く悅び感狀を了にあたへしとなり

新に奉公しけれども世に譽高き者なれば高虎寵せらるゝ事大方ならぬ舊臣ども大に嫉恨み
あへり大阪五月六日の軍に了ハ先陣の中の手なり六日の朝道明寺に軍を進めんやいかにと
評定いまだ決せぬ了矢尾平野の地利を見て來らんとて猩々皮の羽織を着鹿毛なる馬に乘
千塚より五六町もぬけ出けるに朝の物見堺與右衛門に逢いかにと問ハ後藤又兵衛とおぼし
くて軍を出しはや水野日向守と鉄砲を打合ふといふ了聞て堺に士一人添て返しとく旗を寄
られよと云遣し頓て片山まで乘行西の方を見れば八尾より若江まで大阪の軍おしつゝき耳
方の先陣に目をかけ馬の鼻を揃へて進み來る了さてこそと思ひ馬を引返し道明寺をさして
進む味方を押止る藤堂仁右衛門何故そと問了あれを見られよ手に取ほどに近き敵を打招て
道明寺にゆくやうやあると仁右衛門も尤なりと同心しけり高虎何とて進む味方を押止る
やと母衣の者をもて下知せらる了頓て高虎の前に參りしかく也と申せば高虎如何せゞや
と思慮の氣色なり了何の手だてあるべきかゝり來る敵打破るの外道なしといへばさらば仁
右衛門よべとて下知せらる了聞て此處泥にて陣を備ふべき地なし敵あひいまだ四十町もあ
らん横堤ハ是より十町斗も有べし横堤まで細なハての道四筋見ゆ南に向ひたる味方を西向
に押直し横堤にて陣を離へ一軍せん北二筋の道をば下知し給へ南二筋の道を押行味方は勘

兵衛下知して横堤にて押とめ列を正し南北一ッに合せんにハ必定味方の勝なるべしと云て
馬じるしハ四五町ばかり後にひかへさせ細道を乘行て藤堂仁右衛門桑名彌次兵衛等にかく
といへば北より進む藤堂新七同玄蕃等一騎がけに馬を乘出し我先にと西郡萱根をさして進
みゆくを了見てさらば南の味方をれし止ても何の用にかたゝんとくかゝられと云捨て了ハ
山土阿野村に向ひけり高虎の士大將我も〳〵と八尾道を西に地蔵堂を見てかけ行しハ了去
年故有て高虎にいとま給へと云し事の有しに今朝より殿の前に出て勝敗の理已一人して計
りしにくさよ渡邊にまさる武功を立んとて了が詞を耳にも聞入ざるなり長曾我部盛親ハ矢
尾の堤森ある所にすゝむ處に朝霧のまぎれより眩色ハさだかならねども南の方より紺地の
白きもちの紋付たる旗さゝせて敵かゝり來れば堤の上狹ければ旗を後の畔き所へおろして
立るを敵ハ北るといひて仁右衛門先がけして馬に鎧を合してかけ行しかば桑名乘つゞきて
一騎がけハひが事なりといへば仁右衛門ふり顧て渡邊が已一人武勇にはこるが口惜さに討
死までよというて馬を乘はなし槍を横たへ大音あげてかゝりしを盛親が兵鎗の鋭を揃へ堤
におりしきたるが是親間遠なるに一人も立あがるべからぬと下知し近々となりける時一同
に立上りわい〳〵と聲をかけ鎗をならべてたゝきたてければ仁右衛門ろこにて討死しつゞ

いてかゝりける藤堂が軍兵どつと崩れ胃の緒をしめたる士六十三騎歩卒三百餘人討れて一支もなく敗北しけり了ハ山上にて向ふ敵を追崩し南を見れば先陣やぶれて旗を捨我先にと逃る處に横さまにかけ向ひ盛親がみだれ足を追返し仁右衛門等が討れし地をふみしきたり盛親ハ矢尾一町ばかりの西に繞を後にあてゝひかへ居たり了いよ〳〵勇み切てかゝらばやと思へども先に首取たる者どもみな旗本に行て了が左右三十騎計に過ぎかゝる處に母衣の士山岡兵部已下七八騎はせ來りければ了頃て押寄て盛親が陣に切てかゝる山岡兵部矢倉長藏二人ハ南の方にかけはなれおもふはぬ戰ひてはきなる討死をしたりけり了が兵少ければ少し引退て畑の高くひきゝ地を便に兵を集め盛親と互に間近く睨み合てひかへ居たる處に高虎使をもつて何ゆゑに引退ざるやと七度まで下知せらるる了聞も入ぬ此一陣にて强敵を切崩し旗をだに押請れば北る敵を追たて大利なるべしと答ふ高虎また使をたて今朝死すべき所を遁れ面目なくて退かざるやとく引返せと下知せらる了聞もあへぬかゝる廣き軍場にてハ勝も負るも所々にて樣々にわかれ味方のもの主軍の道をしらぬ下知そるわざもなくまばらがけして敵に切崩され多くの味方を捨殺し旗をも棄て敗れしを殿にハ忠と思召哉心得がだしかく申渡邊ハ今朝より敵にくらぶれば五分一又ハ三分一の軍兵にて毎度うち勝

八尾にて味方をたすけ横合に敵を破れり渡邊なくば味方ハ泥に追入れられ一人も殘らぬみな打れるべし淺間しき味方の物ぬしの有樣あり盛親わづかの兵にてひかへ居るを討もらさば殿の弓箭の恥なるべしとく旗本を寄せ給へ盛親をたやすく討取申さんとて彌退く色ハなかりし處に直孝軍に打勝赤旗おし立勇み進んで押來りしかば盛親が旗本色めきけるを了見て時こそよけれとどつと切つてかゝり追たてたり久實寺より城兵も足をみだして敗北するをあまさじと鉄炮を打かけて追つむれば盛親が旗竿も悉くうち折れたり了ハ三百余人の首をとり平野まで進でとりかためけれべ道明寺口より敗北して城中に引き入る敵道をふさがれ詮方なくためらひ居しかど了大に悦び高虎の許に使をたて敗軍の敵數万の歸路を立切たり軍兵をだこ賜ハゞば疲れ果氣おくれしたる敵を殘らず打破り大坂の城をべ藤堂一手の武勇にて攻落こ申べし疾軍勢を寄せ給へ平野をかたく守り敵を打破らん事掌の中にありと云ひけれども高虎更に用ひ玉使をたて何とて引返へさゞるやと怒らるゝのみなりしかど了も力なく平野に火をかけ軍こ返しけりこれも平野の煙にて城中に引き入る敵を妨ぐるの術なり此時高虎兵をすゝめべ眞田も毛利も城中に歸り入る事を得まじきにと世にいひしとぞ直孝高虎の陣所に行かれしかば高虎對面しけふ先陣におくれたる者同姓にて物主あま

た討死し口惜くと語られければ直孝我敵に勝て北るを追ふ時むしろの指物さして軍兵を下知せし士大將ありて强敵を切なびけ軍兵を下知せし有樣あれ大剛の物ぬしなり其人いかにと問れしに高虎物もいはさ其時了肖を脫ぎ進み出むしろの指物差たる男い此遡兵衛にこそ天の冥加よて今日の武功を井伊殿見屆給いりたりと大音ゑ申せば高虎いよ〳〵いかり憎まれしほどに了終に藤堂の家を去て京都におもむき師菴と号し寛永年中までながらへ居たりしとなり

○大坂の軍五月六日に井伊直孝打勝たりしかば東照宮より横田甚右衛門台德院殿よりい佐久間將盟を使に命せられ直孝か陣所に行佐久間先に歸りて直孝今日の軍に打勝たれ其川手主水をはじめとして討死多く明日の先陣如何ならんと申ゑ東照宮聞し召聞ぬ体よておはします所ゑ横田歸りて直孝ゑ利を得て明日ゑ勝たゑ勢に乘て殘る敵をあまさず討取べしと勇み申とゆせば東照宮さぞあらんと悦ばせ給ふ時横田すゝみ寄こゝゑ一つ思慮あるべし直孝が軍兵過半手負死人も多しいかに心はやるとも明日の先陣いくり換られよと申せば東照宮我も左思ひつる事よとて加賀利常本多忠朝を先陣に命せられけり陣中の使者い心得有るべき事にてそ

○片桐丹後守い越前忠直に仕へしが大坂夏の陣に遡氣を蒙る事のありしかば先陣に忍行てひかへ居たるを本多伊豆守見て片桐い必討死すべしあれ赦さるべしと申せば忠直片桐呼べとて使番須田長左衛門先陣に乘行かくといへば片桐忠直の前に參り冑を脫涙を流し謹で居たり忠直其時汝か日比の罪ゆるすぞと詞をかけらる片桐今の時に至りかゝる事こり心得ぬと思ふ色顯れ忠直の方をきつと見て馬引寄せ打乘先陣に向ひて軍始まると冑音を得たり越前の一番首なり

○大坂五月七日の軍に水野隼人正が組の松平助十郎秀信今日の一番い他人に先をかけさすべからぞといふ水野丹宮口廣き事ないひぞ節か汝におとらんと爭ふ助十郎各よく聞れよ今度朋輩に一番の馬い吾馬なり上田吉之丞が弟子にて馭い許日可まできいめたれば誰か先を爭ふ者の有べきといひしが果して一番に乘出し敵に向て討死したりけり

○玄藤彥四郎重能い帶刀の子なり成瀨豐後守が組にて台德院殿の小性組なりしに武士長生して諸方の事にあひ武功多く死ぞして世をおくるいさまで勝れたる勇士とい五郎左只潔く討死せんこそ本意なりと常にいひけるが大坂五月七日に一番首といいゞ彥四郎一番に討死といはゞ彥四郎と思ふべしといひてしなひのさし物を卷て井伊直孝の先陣に行菴原助右

衛門に向て是非かゝれといへども助右衛門同心せを待受たる箭先にいかにしてかゝるべきと云彦四郎其箭先へかゝりてとそ勇士といふべけれといへども同心せを彦四郎さらべかゝりて見せんといふを押止れども少しもためらわを敵の中にかけ入て討死しけり帶刀の從者彦四郎が屍を引のけんとするを見て犬にくわせよといひて乘めぐり北ろ味方を立直せしが軍終りて後大に愁傷の色あらわれしとぞ

○大坂冬の軍に東照宮本多出雲守忠朝に京口に行て川水を見來れと仰らる忠朝歸りて水の勢甚強しと申そ又井伊直孝に見て來れと仰られしに直孝歸りて水淺く渡りやすしと申を聞し召出雲ハ父におとれり川水ハ女童もしる所也出雲に見せしむるに及はを出雲をやりしハこゝろ有ての事なるを知ざりしよと仰られけり是によりて忠朝口をしき仰をも受ぬるかなとおもひて夏の軍に必死を期して我と同じ枕に死んとおもふ者ハ起請文をかけといわれしに加藤忠左衛門大屋作左衛門藤井次左衛門臼杵七兵衛等起請文をかきたりけり小野勘解由ハ士の軍に出んに命をしむ人やあるとてあざ笑ひて打立けりかゝる所に五月七日天王寺口の先陣を忠朝に仰出されければ忠朝大に悦べる、時小野すゝみ出明日一の幸くて討死二にハ一番鎗三にハ高野に入んといふ忠朝打うなづきて居られけり茶磨山下へ進んを毛利豐前守勝永に向ふ時小野かゝる足輕の並居樣ハ忽破るべしといふ忠朝耳にも聞入を小野口ぎハの黄なる殿の何を知り給ふと嘲る時加藤も進み出足輕の並居る有樣ハ軍にハ見を只大多喜にて鹿狩にハよからんあれに見ゆるハ忠左衛門が足輕なり誠に戰に向ふ有樣也と打笑ふ忠朝にくき詞かなとて眉尖刀を提てかゝられしかば小野只今討死して殿に見せ申さんといふまゝに眞しぐらにはせ行加藤ハ眉少刀の鐔にて左ゝかれて是も乘出す忠朝ハ百里と名付たる馬にのり一文字に進む所に小野敵に取まかれ鉾玉にあがりて討るゝを見て本多出雲守ぞつゞけ者共と大音あげて呼ハりけるを毛利に付られし秀頼の物頭雨森傳左衛門以下七八人透間もなくかゝりければ忠朝持鉾にゞかざりしによりて數鉾をおつとり突伏〳〵戰ハれしを紺の羽織着たる足輕二間ばかりに詰寄鉄炮にて打忠朝の脇に中りしかども忠朝ちつともひるまを馬より飛下り其敵を只一太刀に切殺す口とりに兼て持せられし鉄の筋かね入たる鼻ねぢを左に持右に刀を提敵七八人切伏多兵に取まかれ轟々に戰ひ痛手廿餘ケ所おひて討死せられしかば大屋ハ其屍の上に取付て切死にしたり藤井臼杵を始として皆同じく討死す忠朝の首ハ雨森取たり

○大坂裏の軍に東照宮ハ伊見におわしまし井伊直孝ハ宇治の北六地藏より軍を出して大坂

に打向ふ時宇治より伏見にかゝる道にて旗をはり立き直孝般若野宮内を使にして旗奉行孕石備前廣瀬左馬助に何故ぞと問ふ二人承り旗の事ハ此二人にまかせられよと答へておし通る直孝怒りて又使を立是非はり立よと下知すれども聞入き伏見を過て旗をはり立たり此ハ宇治より伏見にゆく道東照宮のおハします所に向ひ奉るが故にかくへしたりし也五月七日直孝御旗本の先陣として天王寺の東北にて大坂七組の敵に向ひて相戰ひ軍危かりしかば孕石廣瀬に向ひて我年七十五又恥をすゝぐべき時なし討死せんと思ふなりとく引退れよといへども廣瀬士の恥ハ同じ事ゝ孕石を捨殺し逃たりといハれん事こそ口惜けれとて二人共に旗竿に手をかけ討死しけり廣瀬をバ青木が組の稻葉伊織討取けり廣瀬ハ美濃が子孕石ハ主水が子にて共に甲斐の武田家の士なり

○廣田圖書ハ水野勝成の士にて大坂五月六日の軍に功有しかバ明日ハ殿の馬前にて相はたらかんといへば勝成悦バる明石掃部が陣を打破る時廣田鉄炮に玉藥をこみ一はなしを思ひて打たるにたち消しけれバ鉄炮をなげ捨て鎗を取築瀬又右衛門といふ敵にわたし合せ突伏られしを勝成はしり寄築瀬を討取れけり後に鉄炮を見しに火ぶたをさらでありしとなり廣田人に語りて事の急なるに臨みてハ思ひの外にあハつるもの也我すでに先がけ殿數多して自負せしかば殿の前にて鎗脇を打んとおもひ設しにかくうろたへぬあつハれすべきと工みたる事のかくの如くなればまして不意の事をや能思慮すべき事ゝとかたりける

○五月七日秀頼ハ櫻門に打出て灑企を緋威にしたる物具着て太閤の時より傳へられし金の切さき二十本茜染の吹貫十本玳瑁の千本鎗を並べたて太平樂と名付たる七寸有し黒の馬引たてられし所に先陣皆敗北しけると聞えけれバ今ハ是までなり敵の中にかけ入討死せんと進まれしを速水時之今打て出さりとも勝利なし疾本丸に入せ給へとて引返すかゝりけれバ士卒ちりゝに成て馬じるしを棄たりしに伊藤式藏守れくれて歸り入しに是を見て朝鮮まで聞え！豐臣家の馬じるしを敵ひろひなば大坂城中にをのこハ一人もなきと日本國中の物笑ひとならんといふまゝに手づからふりかたげて城中千疊敷に歸り入けり

○郡主馬頁利ハ秀吉の臣なり石田權威を恣にせんとはかり人をなつけん爲に公用に金銀を出せ事あれば必其半を包けて密く私にあたゝ郡にもかゝる事有しにあらそふおらば禍にあハんと思ひ辱きよし石田に謝して其金ハ大坂の庫に收め置けりられより病々稱して出仕もせず後に旗奉行ゝとりしかば大坂落城の日千疊敷に歸りて床の上に旗置き丑の冬藤堂高虎天王寺にれし入し時速水時之と謀を合せ夜討すべきを寵臣に妨げられぬ住吉

平野の陣所に忍びを入れ火をかけて不意に一軍せんといひし謀も用ひられぞ遺憾ぬると思へば口惜とて從者に此小腰差ハ黒田長政我に贈られし時用る事有て功を立んといひし詞あるゆゑなりよく長政ゑいひて返されたしと遺言し其子兵藏と。もに自害す行年七十一才どかや秀吉の時より黄色衣もゆるされたり

○大坂落城の日興國公池田利隆朝臣わ城の北に陣し給ふかねて下知なき前に軍を進むべからぞと仰出されしかゞ陣を整へて御下知をまつ所に寄手門々に押寄しと聞ゑしかぞ野村越中に見て來れと仰らる野村馬をはやめて行所に城より煙もゑ上りければ寄手攻入たりと思ひ先陣伊木長門池田山羽が陣に馬をかけよせ疾川を渡して攻入られよ仰ぞといひければ先陣卽攻入て首六百餘を得しハ野村が功なりけり

○長曾我部盛親ハ大坂の城落しかぞ落行て鼓の中に潛り隱れゐて其臣中内惣右衛門飯を持行けるを蜂須賀の士長崎三郎左衛門が足輕もと土佐の人にて中内を見識居しかゞかくと告て遂に二人ともからめられけり盛親とられとなりて後藤堂高虎と軍せしに井伊の赤旗に妨られ高虎が首を見て口をしきとて齒がみしけるとなり此ハ高虎使を直孝の許にやりて援を乞れしに直孝も木村を切崩し追討になりて士卒ちり〳〵なれゞ詮方なく戰ひハ一手きりと答ふ高虎の使木俣清右衛門に逢てけり木俣あれに見ゆるハ伊達政宗にや疾行て援を乞れよと、いひしかば使道遠き所にうろたへ行武士やゐる歸りて軍にあハんとて馬を引返す木俣さらゞとて赤はたをすゝめけり

一說に長曾我部を生捕て縄二筋附て白洲に引居たり台德院殿御側の士を以て數千の大將たる身自害をすべき事なるにさハなかりしハ如何ぞと御尋あり盛親わるびれたる色もなく鬼の軍に打勝たれども後の軍に赤備の軍兵に打合て味方あまた討死し敗北せし事是非なき次第なりとやす又討死するか自害するか二つの志もあかりし事返〳〵も不審なりと再び御尋ありしに長曾我部承り盛親も一方の大將たる身なれゞ葉武者と同じくかる〳〵しく討死すべきにあらぞと再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外にあらハれたりさて其後引出して警固し居たりしに飯をうづ高くもりて長曾我部にそゆる盛親警固の士の中おとなしやかに見ゆる人を呼てむかしより名將もからめ捕るゝ事ためし多けれゞ露ゞかりゐ耶とおもふ事なし然るにかゝるいやしき食物をすゆる所義やあるとう〳〵首を刎てこそよけれと云ける時井伊掃部頭カたへを打過これを見て法もなきふるまひどもかなと大に怒り御厨に下知していさぎよく料理を調へさせ縄をとかせ座敷に長曾我部を招き入

れいと恐こ勞れを休め給へといいれしかば長曾我部是こそ禮義をしりたる武將の道よと
脫ぬて始終少しもひるめるけしきへなかりけるとぞ

○大坂落城の後大野道軒(或作犬)と生捕二條の城の駒奇にくゝり付たるを立ようて見る者
夥し皆いふ道軒へ問しようも大男なりといふを聞てさそがに士たる者とも覺ゑぬ詞かな
かねて我とかくいましめし如く汝達を一々からめんと思ひしに運命尽ぬれバ口をしき事な
りとそこしもひるめる色なかりしとかや

○大坂落城の時渡邊内藏助糺へ矢倉にて二男三男を刺殺し乳母に嫡男を連來るべしといひ
けるに乳母白きかたびらを着せまゐらせやさんといひて其場をのがれ澁帷に包み繩おもて
堀下にさげ落し其身ものがれ得て彼子を市中の厠にかくし置日數經て逃去んとせしを關東
の軍兵にとらへられぬいろ〳〵せめ問たれども渡邊より從へる士水谷清兵衛といふ者の妻よ
て我實子よまぎれなしとて其餘の事をいわずさらバ金二両出さば助くべしといひしかば乳母則舊郷
れども内藏助が子たる事をいわずさらバ金二両出さば助くべしといひしかば乳母則舊郷
渡邊より到り百姓より頼みしよさすが舊好を思ひ且い乳母の忠義を感じ金二両授けしかべ則
彼小兒を乞得て京都に趣き南禪寺の喝食となしぬ十八歳に及ぶ時細川越中守忠興一柳土

佐守末榮などゆかりの方より還俗させられしかば程經て文照元殿甲府においしませし時此
事をなげきて遂に甲府に仕へ渡邊權兵衛として五百石賜りける内藏助い大野より秀頼公の御命
別儀なくおいさんやうをとかり見よ時を待べしとて江州より落行けるが秀頼自害のよしを聞
て立ながら腹を切て死したりけるとぞ

○大阪落城の日興國公の士齋藤織部黒母衣かけて西國道に落ゆく敵に追付そでに討取んと
せしに彼敵ふり顧て落武者の首とられたりとも さべかりの武功ともいふべからぬいかに助
けられんやといふ齋藤從者よさ、せたる相印の腰指をわたへてとく落られよ見とがむる者
あらバ池田が内の齋藤織部といふ士の從者ぞといいれよ教へけれバ忝よし謝して落
行けり歸陣の後齋藤が友來りて大阪にて落武者の内て我ゆかりのものありてすけ給ひて相
じるしまであたへられを故のがれ出密こ參りて斯と申せしといひけり齋藤爰人に語りてわ
れ其時此武者ゝ討んい易しされども落武者の降參そるを斬てうとも母衣かけたる我にいか
ばかりの功名とかすべき今い却て奥深くれぱゆみだりに人敗を殺すのみを武と思へるい大
ならひが事くてこそあれといひしとぞ

○明石掃部頭全登大阪に籠りしが落城の後討死しけるや落行たるや定かならぬ明石が十澤

原孫太郎を生捕て明石が行方を問るゝにしらぬといふさらばとて拷問に及びけれども更にいハぬあまりにきびしく責られて涙を流しければ行方をいふにこそあれとていかにと問ふに澤原いひけるハ關東の兩御所の運つよくおハしますを感じ奉りての事なり士たるほどの者骨をきざまるゝとも主君のゆくへを申べきやは此度大阪軍に勝ば兩御所落行せ給ふべし其時御遊たちをからめて今我をせめらる如くならバ主君の行方をも白狀すべき心なればこそかく我を責らるゝならめとおもひておぼゆる源の流るゝと申ければ人々詞なかりけり東照宮聞し召たぐひなき忠義の士なりよくいたわるべしとて御赦し有けるとぞ今紀川の家ゑ其子孫あり又池田の家にもあり澤原ハ備前邊梨郡の村名なり孫太郎が一族此村より出たりといふ掃部が居城の跡備前和氣郡和氣村の東の山上にあり

○丹羽左平太ハ織田信雄の小姓なりしが後秀賴に仕へ大阪落城の時泉州貝塚まで落行しに野伏道をさへぎり取まきけれバ丹羽我を殺さんとにや又甲冑を脱ひとらんとや着たるものを剥れなば恥なり我既に日本國をみな敵にしたれば世にあらんとも思ハぬ出家せん僧一人呼て給ハれといへバ野伏僧をつれ來る丹羽さらばといふまゝに立よる体にて僧をひしと押へ刀を胸にあて、人質にしければ野伏等もせんかたなくいづくまでも送り申さんといふ夫より紀州和歌山にゆかりの人有けるに告やりて迎の人來て紀州に匿れ居たりしが程なく赦を蒙りてけり

左平太長久手の軍にハ小牧に殘されしが朋輩の石黒八十郎に年幼しとて旗をだに見ざるハ口をし後の咎ハありとも いざといふより馬にのり長久手さしてかけゆく時石黒丹羽に向ひけふの敵ハ池田ぞかし池田の士に叔父の善内といふ母衣の士あり行あふならべいかにせんといふ丹羽人々君の爲とハいへども叔父を討んもいかゞなりなどいひて後にハかけはなれしが軍既に終りて落行武者有しに丹羽追付て馬より突落せしが母衣かけたる敵なれバ名乘れといふに石黒善内と答ふ丹羽聞てしかくのゆゑありとく落られよといふて馬にかきのせたる處に高木筑後守走來り何とて敵を落すぞといふに丹羽子細を答ふ高木幼年のハたらきといひ其志を感し後に東照宮にそのよしゝ申小牧にて信雄の陣所にわたらせ給ひ勝軍の祝て酒宴のありけるに左平太事を問せ給へば只今給事せし小性なりと答ふけふかゝる事ありしと仰られしとかや其後秀賴に仕へて大坂の軍の前關東へ使せしかバこれに乘て奉公せよとて馬ゝ賜りけるとなり

○大坂冬の軍に諸軍に兵糧を給ふ凡三十萬人一日ゑ千五百石也遠國の兵ゑハ一倍と增賜り

けり夏此軍に東照宮松下浄ゑを召れ大坂のまかなひ支度膳米五升干鯛一枚味噌鰹ぶし香物少しゞかり用意せよ其餘に及ばゞとゞ仰られけるされゞ厨の入用只長持一棹にて事足ぬといへり

○大坂夏の軍に起前士大將本多伊豆守害政が一陣に道白七十三騎たりければ我にまされる子數いあらじといふ處に落合美作守我こそ乱りたりといふ伊豆何はゞゞとゞいへゞ樂合閙て本多にい組に付られし士の祿凡七万五千石に及べりかく日美作い一万石の祿にて首四十八取たゝ祿の多少にて士卒の多少ある事いいふにや及ぶといへば東照宮の伽番詰星々右衛門杜によりて居ねぶりしが目をひらき落合の詞尤ことわりなりといひしかばゝ多詞なくてやみぬ

○後藤又兵衛基次秀頼にまねかれて大坂城中にありけるが長の軍計兎に基次國府越くちがり窟に打て出地の利に據て軍する外道なしといへゞ則大和口の先陣して平野に打出し處に東照宮より相國寺の瑤芳堂を使にて關東の味方せゞ播磨國を賜るべしと基次仰誠に忝なけれども御味方仕らん事思ひもよらぬ今大坂の勢ひ弱く關東あやふくい別に存ぜ旨もあるべし今大坂の運かたむきて秀頼亡ん事近きにありそれを見て二心をいだかん事い弓

矢取道にあらぬ此よしを申されよ今日本國に弓取多しといへども基次にまさる者有といい豊臣ぬ其故い主年より基次を頼み思召い高麗まで攻られし豊臣明神の嗣なりまた基次内通せゞ天下勿めの軍たやすく破るべしと仰られしい徳川殿なり天下の勝敗を基次一人が身にかけたるい思出ならぬや死しても冥途の面目なり基次生てあれば一日に破るべき大坂も十日い支へ中すべし基次死したりと聞ゑなゞ百日守るべき大坂も一日の中に破れつらん基次とく討死するを徳川家の恩に報ゆべき志と存る也といなけり

後藤い元黒田長政の士大將なり長政ある時物語の序にいま我にかゝりて軍兵を下知し大功を立べき者我士大將の中に誰ならんといいれしに官政利人々各其器量有と申せ共又兵衛に肩を並ぶべき者なしと答ふ長政あくまで勇將なりしかゞ基次が武略をねたまれし故けしき悪く見ゑけり基次豊前の小熊の城に有て隣國細川忠興と中あしかりけれゞ實い小倉の防なり故有て基次が子隠岐追出されしをよび返し給へと長政に申せども聞入られぬ怨ゑ時基次が二男又市を長政寵せられしが博多の祇園の宮にて猿樂の有し時鼓をうてといいれしかば小熊に行てかくといふ基次怒りて父子ともに出奔しけるを忠興鉄砲二百に士を添て迎へよせられしかゞ長政と倶に軍に及べく成しを江戸より和平せられ基次を

べいづくになりとも送るべしとあるしかば忠興基次を餞して酒宴あり松井佐渡有吉頼母並び居たりしに忠興我黒田の家と不和なれどこれより後の事はかりがたし長政の軍だてよく知たるらんいかにして討勝べきと問れければ基次両方に加勢もなくて軍あらば國の大小と申必定甲斐守打勝なんされども たやすく勝べき計一つあり甲州の人に越たる勇將にていつも先とかけらる鉄砲にすぐれたる七五十人計擇みて鎗の合し時敵五人討取なば其中に必甲州有べしと答へて出しをさべかり長政を恨みて出奔せしと今は政り武勇を嚮あげつるぞかしと感せられけり基次安藝に船をとゝめし時正則福島丹波をもつてまねかれしかば三万石の祿にて仕ふべしといふ正則いや〳〵丹波を始として皆二万石あたへしに基次に三万石過分なりとて聞き丹波今基次に三万石あたへられば基次だに三万石也丹波も他の家に行べ四万石なりと人申す是臣等が武名をあぐるなりといへども正則同心おくて丹波行てかくと傳ふ此より前關ケ原の軍に浮田秀家の兵七八十人亂れ足に成て正則の軍の前を落行しに丹波ひきゝ地に有てしら芒正則の旗本より告知せければ追かけたり此時基次丹波が前に來り引おくれたる敵ありなど追討ざるやといふ處に首數多取來りしかば基次大に嚮て歸りしが丹波い基次に敵へられしと世にいひあへり丹波心に怒りをふくみ居ありしかば此時かたり出し色を替て我に敵へたりと世にいひふれられしやといひけるに基次打笑ひ器量の小き人よ我と足下と武功相同じ我足下の下知を受べきや足下又我に敵へられて功名すべきや人のいへべとて怒られけるこそをかしけれと云ふ丹波詞なくて歸り基次い我に大にまされり及べきにあらぎと嚮たりけり

○古田織部重勝い太閤の家人若き時より茶事をすきて千利休が門人にて此事好む人い重勝を一世の師匠とす元和元年夏両御所京都を打立せ給ふを待て天子を取まゐらせ二條の城を攻取り京中燒拂ふべしと大坂に心を合せし事あらはれて父子とも誅戮せられけり此織部正い古き珍器の全きをべ好まぎされべ書畫やうの物もかしこを切こゝを裁多くそこなひてさて補綴りて用ひしを世に興ある事とおもふ人多くこれに效へり松平伊豆守信綱の父大河内金兵衛元綱人にかたりて此古田い必禍にかゝりて死すべき者なりといひしに果してたがいざりけれべ人々いかでかくい相去けると問に元綱されべ古の寶器と聞ゐし物世の亂に失ひて今殘れる處の物いみな神の護持にてこそあらめりれを已が目を悅べしめんとて一人の身にまかせそこなひやぶる事神明必す惡むべしと思ひしゆゑ其人の身も全うして終る事を得じといひたりきと答へしかべ聞傳へて名言とせしとぞ

○石川嘉右衛門重之字丈山ハ清和源氏にて八幡太郎の第五男石川義時の末なり世々德川家の臣として十六の時東照宮の御旗本に召出さる幼少より豪雄の人なりしかば七歳の時父此男ハ必ず日本第一と世にいハるべきにや若しかゝぞハ日本第一悍惡の人となるべしと語られしとぞ大坂夏の陣に丈山傷寒を煩ひ重かりしに其母本多氏江戸より祢して汝世々御旗本に仕へ奉り此軍に武功なくバ又對面せじとぞはげまされける丈山人によませて是を聞き涙ぐみて物もいハぞ五月五日東照宮既に二條の城を打出させ給ひしを聞其日ハ病殊ゑ重く前後を忘じて有しがしひてたすけおこされかごに搔乘られて東寺を打過ける時に御聽あり怪しませ給ひ田上右京に仰有て問せ給へバ見て歸り石川嘉右衛門なりと申を聞し召し彼ハ病重くて死すべきと聞しにと仰あり丈山八幡に至て水を三酌すくひのみて胸の中の苦を頓にわすれけり其夜ハ東照宮河内の星田に御陣あり丈山を召ていと懇の御詞をかけさせ給ふ六日に大坂に押よせ給ひ扳がけを禁じ給ふ處に七日の曉丈山真先にぬけがけして加賀利常の先陣に至り御使なりと稱して大軍の中を押扳岡山にて敵を討取たれども味方其首を奪んとせしかば打捨て黑門に打入佐々十左衛門と名乘たる敵をうち取又敵一人打取て從者に首を取せ門を出れば馬に乘たる武者に行逢遠藤但馬守が士池田勝兵衛といふ者にて有しが丈山の功名を感じけれバ我ハ石川嘉右衛門なりと名乘りて池田も首一つ得たりと云バ丈山其姓名を刀の鞘に刻み付たり加賀の大軍おしつゞき來れバ又御使なりと呼ハりおし分て利常に行逢討取たる首を見せ申て打過たり其夜本多安房守丈山とゆかり有けれバ筑前守利常を證にせよとす丶むれども我利名の爲にするに非ぞ先祖をハづかしめざる志のみなりといへり此軍に御近習の士首を得たるハ丈山と間宮權左衛門豐島主膳と三人バかりなり丈山御軍令にそむきける故賞に及バぞ是より前丈山駿府に有し時清見寺の僧說心に禪理を聞たりしが出陣の時暇乞とて寺ゑ至り此軍に御近習の士首を取たる人三人有と聞れおバ其一人ハ必ず我なりとしられよといひたるが果してしるり東照宮いまだ御旗を駿河に返されざる中に妙心寺に隱れたり是より學文の志厚く日夜となく書を讀經史に通じ詩を善せり丈山三十三の時とかや其後板倉内膳正重昌丈山の流落をいたみ淺野但馬守長晟にかたりしかバ長晟賓客のもてなしにていと懇にせられしかバ安藝に行老母孝養の爲となり母終りて後寛永十三年五十四ゑて藝州を去て京師にかくれ居しに板倉重宗京都に有て丈山をいたハる事大かたならぞ諸侯貴人の會ゑる時丈山を座上にまねきて此老ハ文武の道ゑ達せる人なりと敬禮せらる其後比叡山の麓一乘寺ゑ隱遯の地を設け詩仙堂を作りて詩人三十六人の像を壁

に書き書籍を友として閑居す後光明帝御即位の時松平伊豆守信綱賀使として京都にまゐられしよ丈山と親戚たるゆゑたびたび閑居を訪れけり承應元年七十歳に及て三州泉の郷へ其故郷たるゆゑ歸るべき志あり板倉重宗よろくといへども許さゞりしかゞ今よりゝ京都へ再び出じさらべ其許へも參らじとて和歌あり（わたらじなせみの小川ゝ淺くとも老のなみそふかげもはづかし）後光明帝丈山が隷書よよきと聞し召高木伊勢守守久勅命を傳へけれゞ八卦の字を書て奉る上皇も又隷書の大字を書しめ酒肉を賜ゝる寛文十二年壬子五月廿三日一乘寺の閑居よ終りたり九十歳となり其詩を羅醬集と名付いま世よ行ゝる

一乘寺の閑居今ハ尼持たる寺よなりぬされども詩仙堂ハ殘れり繪像も廢せず丈山の物具鎗又如意几などもありといへり

○上杉家よ三寶寺何某と云者下部の罪有て誅せしを其一族大よ怒て死したる人を歸し給ハれと直江山城守よ訟へけり其下部の罪死よ及べざる事よや有けん直江白銀二十枚あたへて跡をとへとなだめけれども愈用ひず是非よ歸し給ハれと直江を催促しけり直江さまゞまいへどもとかく聞入ず其時直江云からべ訟の如くせんとて一族三人捕へさせ地獄に行て迎へ來れとて書簡一通封じて使よ往けとて首を刎させたり其書簡にしかゝの子細まて三人迎ひに參らせりとく歸したまハるへし慶長二年二月七日閻魔王冥官披露直江山城守兼續とぞ書たりける

○安藤帶刀の子を飛彈守直治といふ成瀬隼人正正成或時直治に紀州にてきたひたる刀を乞得しが後に成瀬彼刀の事を語りて尾張よて死罪人の有しを試たるがこゝろよく切れざりき能出來たるに殘多し又きたひ直させて給ハれといふ安藤安き事なり紀州にて心よく切れたりきおやしき事よといひしに成瀬打笑ひ紀州にて心よう切れつるに尾州よて然らざるハ尾張の人骨堅き故ぞとたとふれしよ安藤聞もあへぞいや〳〵尾張の士の腕の弱き故なり鉛刀にても紀州よていよくきれつると答へたり

○土屋但馬守數直執政たりし時金座の者ども相はかりて金に銀を入てふきかへられなゞ日本國の金甚多くなるべし金の色の損ぞるのみよて莫大の利なれども但馬守用ひられじ但馬守だに此事を聞入られなゞ事行ハるべしといひけるを數直に申す人あり兎角の答なく打過られしかゞ又人をして問せしに但馬守是ハ邪なるわざなり金を以て天下の寶とするハ純物なるが故なり其寶を惡くせんとや思ひもよらぬ事なりといハれけるとぞ數直大猷院殿の近習に仕へ申されし比ゆゑ有て咎を蒙り引籠りて有しに大猷院殿上京まし〳〵けり數直

密に上京せられしを親族家人相止めけれども聞入ぞ京に着てかたゝらなる所にかくれ居けり或時しか〳〵の事を數直にはからすべしと仰出されしかゞ皆駭きて數直ハ江戸よありいかにとゆけれゞ聞し召尋ねて見よ居ざる事ハあらじと仰られけるほどにこゝかしこさがしけるに東の京にかくれて有しを頓て召出して仰に汝よくこそ來りたれ來らずハよかりなんやとて命せられける事どもあり泰平の時といへども千里の行程たやすからざる事なりと思ひて後の咎を顧ぞ忍びて上京有しに必かくあらんとしろしめされし明智の遠慮君臣水魚の遇季世に有がたきためしなり此數直ハ甲州武田家の士大將土屋宗藏昌恒が孫なり勝頼亡し時宗藏が子の二歳になりしを駿河の富士の裾野の寺に土屋が相知る僧有て隠して育けり東照宮御狩の時彼寺に立よらせ給ひしに御茶をさゝげて出けるを此子がつらたましひ唯者にあらぞ父ハ何者ぞと御尋めり住持の僧氏もなき者とかくしゆけれども再三詰り給へゞ御敵をなしたる者の末にてひそかに育ていと謹でゆけれゞ出家せんよりハ我に得させよと仰ありけれゞ今ハつゝみてあしかりなんと思ひて是ハ武田勝頼が供して天目山に死したりし土屋宗藏が妾腹の子なりと申しけれゞさる義士の子なりけるよ眼ざしのなみ〳〵ならぬと思ひたるに果して違ハざりけりとてめし具せられ後民部少輔忠直といひしハ此人なり數直ハ忠直の次男なり

○塚原卜傳ハ常州塚原の人なり父を新左衛門といへり卜傳劔術を飯篠長意に稽古し伊勢の國司に仕へ劔術を以て名を得光源院殿の師たり其後上野の上泉伊勢守といふ劔術者あり卜傳また上泉より學びたり卜傳が弟子の中に勝れたる者に一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに彼弟子或時道のほとりにつなぎたる馬の後を通りけるに彼馬はぬたりしにひらりと飛のきて身に中らぞ見し人さそがに塚原が弟子の中にも勝れたるよといひしに違ハぞとはめて卜傳に語けるに卜傳大に驚きてさてハ一の太刀さづくべき器にあらぞといひけり諸人此事を不審して試よとて類なきはね馬を道のかたへにつなぎ卜傳を招てかたハらにかくれて見居たりしに卜傳馬の後を除て通りしゆゑ馬はねんとも人々はかりしにたがひけれゞ後にかくと語りさて彼弟子の早わざをほめ給ハぬハ如何といひけれゞ卜傳聞てされゞとよ馬のはぬるに飛のきたるハわざハ利たるに似たれども馬ハはぬるものといふ事をわすれそうかと通りしハおこたりなり飛のきたるハ仕合といふもの也劔術も時により下手にても仕合にて勝事あるべしられハ勝たりとも上手といいふべからぞ只先をわすれぞ機とぬかぬをよしとするなり一の太刀の位に及ばざる事遥なれゞ譬ざりさと答へしとぞ

○東照宮御病氣重きに及て台德院殿もかたゝらにおゝします純帳のきゝに松倉豐後守重正市橋下總守正綱堀丹後守直倚葵山左馬助別所孫三郎を召れ此五人忠ある者なり且大坂大和口にて武功ありよく將軍に仕へ奉れと仰られしかゞ皆涙を流して詞なかりける時又別所ゝ祿少けれども此後も取わけ忠あるべきものなり大和口にてやさしき言をいひたりと仰けれゞ別所泣沈みてけり此ゝ大和口にて城兵引返すを追討ざりし時別所諸大將の前に馬を乘廻し先年鋭紫にて島津が退口を尾藤が慕ゝざりしを太閤怒らおき只今追かくべき圖をはづす事無念なりかくゆす孫三郎ゝ馬一匹ゆゑ齒をかむべかりなりいかに人々かくゝ腰のぬけたるやと大音に呼ゝる此事を聞し召ての事なりけり

○烏丸光廣卿ゝ霜の居間に書物を繙きならべ四枚のふすま二枚ひらき机一脚に硯ありて三本入の扇子箱に筆あり其間に年月經ても人の入事なし故に座したるあとありて其外ゝ塵滿たり公宴參内の時も扇子箱に硯石を入れ手にさげ乘輿に入られけり此卿江戸に召れて三年おゝしけりかくて歸京あるべきよし聞ゆけるに兼て座敷の前に庫有しを留守におかれし雜掌いひけるゝ公久しく江戸におゝして廣き所になれ給ひ歸京の後此庫目前に有てあしかりあんとて壞ちたり庫にゝ數十年諸家より贈りし物を積たるなり其物ゝ書院にならべ詳に書記して家入に分ち與へけりかくて光廣卿歸京有て程經しかども庫の事ゝいひ出されぞ雜掌庭のさまの異なるにやといひしにげにも廣くなりぬ庫ゝいかにしたるやと問れしにしかくしたりと中そ内の寶物ゝいかにしたると有しに皆くゞり興へたりと申すそれゝ誠によかりけり汝ゝ何を得たるやと問れけれゞいや一種もとらぞといへゞ無調法の事かなと打笑ひてとりあへもせられざりしとぞ君臣禪理を好まれし故なりとかや

○大猷院殿の御時中院内府通村公御不審の事ありて江戸南光坊にとゞこもりて三年おゝしましけるが秋月と見て

ゆくかたに身をべさそゝで夜な〳〵の袖の露とふひさしの、月

と詠せられしを僧正慈眼に堪ぞして太猷院殿に申されしかゞ三年の逗留旅情さぞあらん今ゝ歸京あれと仰出されて内府京都に歸られけり

○本多能登守忠義或時近習の人に近ころ世にもてはやす書の事を問れしに平家物語評判の事を申者ありゝれゝ誰が著したるにやと問る由井正雪が作と答ふ忠義凡書籍ゝ賢人君子の著す處なるゆゑにこそ崇む事にゝあれ正雪ゝ大惡逆の賊なりよも正しき事ゝあらじ其書籍聞も穢ゝしく覺ゆ人を以て言をすてぞといふ事のあれども〻か、る凶賊の何條よき言の

あるべき汝等よく心得よといれけり

○蜂須賀阿波守至鎮古戦場の事跡を尋て古き物のすたれしを求められしに八島の軍に義經の士佐藤繼信を葬りける時最愛の大夫黒といふ馬を賺にせられし其鞍志渡の寺に有しを乞得たり其後年久しくなりて庫と司る人くゝしく其事の由をしらぎ他の鞍の中にまじへ置たり程經て上田半平安重とて馭法の上手あり其比たぐひなき惡馬の有しに上田此馬にいよい鞍置て乘たらゞよかりなんといひしかばあまたの鞍を出して見るに上田いとゆるき鞍を取出して是こそとて彼馬におかせけり上田をそねむ者何條鞍に故あるべきいざ見よとてあつまりけるに三浦次郎右衛門といふ鉄炮をあづかりし人年老たるが此を見物に出て久しき名物の判官の鞍を見たるよといひしかゞ其故を問て驚きけり惡馬もとより乘得ければ上田が馭法いよ〳〵名高く成にけり

○加賀利常に仕へし大音主馬助に若き人々あまたいかに大音心ゝたけくても今ゝはしる事叶ふまじ麒麟も老ぬればといふ事思ひ出さるといふ主馬聞て五町十町かけ走りても敵の眞中に只一人かけ出る事なり易き事にあらぎ早く走りたればとてさのみ氣なき事なり先にかけ行人ありて後につゞくをまゐれゞこの老人もつゞくべし鎗あひゝ僅六七間に過ぎ主馬が加き老おとろへたる身も其時心剛ならゞおくれまじ五町十町はしる事ゝ若き人のなし易き事なれども六七間のきはに至りて箭玉はげ去けれゞ若きとて走られぬものなりといひしに皆詞なかりけり

○永田治兵衛ゝ平生多病なりしかば何の用にたつべきと人のいふを以て下部こそゝ健あるがよけれ士ゝ義と勇とにありといふを人々せんかたなくていふ詞なりとまた嘲りけるに泉州樫井にて淡輪六郎兵衛か首取て旗本に行平生多病の男かくふるまひし無病の人達今日功名おきやといふに答る人なかりけり又上田主水ゝ宗古といひしが石田に與して淺野幸長にあづけ置れしが茶の湯をもてあそびける故殿の國こそ大なれ一萬石の茶湯法師を召置れたりと譏りけるに幸長聞て上田に脇差を與へ汝を誹る者ありと聞必大切の時に功名する心得あれかしと詞をかけしかば上田事に臨て刃に血を染事さんといひしをまた鼠の血ならでゝつけ得じといひけるが樫井にて目を驚かを軍して討取たる首を提げ幸長の日出の王子の陣に至りて士ひしと幾らも並居たる處にて茶湯法師におとられし人々よといひけるにとかくいふ人なかりけり

樫井の軍ゝ大坂夏の事にて大野主馬大將にて瑞圓右衛門先陣して和泉に攻入けり岡部大

學塙が武功をそねみ扳がけして阿部野を和泉路にさして進み行四月二十八日夜明て國府の東の山に煙のたつを岡部が士どもすゝや相圖の火の見ゆるといさみ蟻通明神の北より貝塚さして進み行淺野長晟ハ信達に陣せしに大坂より大軍よすると聞樫井に引返そを塙我行て敵の体見て來らんとて唯一騎淡輪六郎兵衛といふ案内者を引具して馳行處に岡部を見つけ塙馬の上よりぬけがけしたりしよな今朝よりの軍を聞んと罵る岡部敵なければ功名もなしといふ互ゝ相罵りけるがあれなる安松を燒拂ひたちばよかりなん又蟻通乃松原に伏兵あらん覺束おきに後陣のつゞくをまたんとて物見を出す長晟の士大將淺野左衛門佐安松に來りて龜田大隅にとく兵をあげられよといへり又塙が物見乘歸りて敵近しといふを岡部聞て冑を取て着馬にもろ鐙を合せてかけ出す塙いかに後陣をまたれよといへども耳にも聞入ぜ塙怒て汝に先を駈させんやといひて是も馬を乘出す龜田ハ嚴して引退く處に透間もなく追懸たり大隅ハ討死ぜでよと思ひ定めて石橋によりて十文字の鎗を横たへ待かけたりしに淺野左衛門見て何とて軍したるくせんといふ事ぞとく引退れよといふ上田主水ハ樫井の家の中よりかくれ居て左衛門をやり過し後に殘り居しに淡輪眞先かけてはせ入る處を永田治兵衛計取たりかくて大坂方はせよする處を上田主水鎗を提て

散々に相たゝかひ山掛三郎左衛門と引くみたり横井平左衛門横關新三郎かけよりて山掛を討とりぬ龜田を始として嚴の者ども而もふらぜおめきさけんで相戰ひしかば大坂勢敗北す塙ハ田子助左衛門が箭に痛手を蒙り十文字の鎗を取のべ田子が弓の弦を突き切る八木新左衛門すかさぜ走り寄しかば塙家の壁にもたれて思ふほど働きて終に討死ぜ大野ハ貝塚にて先陣の戰を聞かけむかへハ樫井の軍散じけり又一説に淺野但馬守長晟紀州を打立五千の兵にて泉州市場に着く大坂より四万にて向ふと聞淺野左衛門敵いづくに向ふとも市場表にて一戰せんといふ龜田大隅後の勝こそ大事なれ四万の敵を五千にて支へん事地利によるべし一里引退て蟻通明神の松原を前にあて、安松に先陣を押出し敵を引付八町ないてをくり引に樫井にて戰ハん此所松原ありて敵に見すかされぜ八町ないてハ双方深田にて一騎打なれバ多兵かゝりがたし然らば一騎合の勝負にて必定味方の勝利なりといふ淺野聞て敵の旗をだに見ぜして北ん事然るべからぜ龜田ハ引れよ我ハ引まじきといふ龜田我此所にて功名を遂ぜハ討死せんと誓言して出陣したれば樫井に於て一番鎗を合するか討死か二ッの中を出ぜまゝにて一戰せられよ必敗軍なるべしといふ淺野怒て物前に不吉の一言なりと罵りけるを淺野左近とりあつかひ所詮但馬守の下知にまかせよと

て前田越前を以て事のよしを申す長晟両人の存る所尤なり龜田ハ度々武功はまれ乃物しあれば先陣五千の下知ハ龜田心のまゝにせよと下知せらる前田歸りて斯といへば龜田涙を流し悦びけり軍兵を安松に引とる處に淺野左近同日向安井喜内田子助左衛門伊藤金左衛門等從ひけり安松の長龍村に陣す市塲に殘る淺野左衛門同大炊仙石因幡三木小左衛門未明に安松まで兵を引取けれども陣すべき所なく樫井に入て半ハ河原に陣しけり大坂の軍ハ瓜生野にて勢揃し先陣塙團右衛門二陣岡部大學なりしが二人不和にて塙真先に進み行四月廿九日泉州貝塚にて兵粮遣ふ大野主馬ハ酒宴して打立ぞ其時塙ハ三百計の兵にて安松にはせ入火をかくる龜田ハ蟻通の北へ物見に出る所に淺野左衛門乘來り汝がはかりし所甚感じ入たりといふ龜田物前の積り論ぜる事ハ珍しからざる事なりといふ旗本の旗色しどろなり直されよといへば左衛門心得たりとて乘戻るかゝる所に上田主水來りて今日の合戰いかにといふ龜田昨日計りし如く樫井にて軍すべしとかく旗本の旗色惡く見ゆるなり乘返りて直されよといふ上田乘歸ると旗色ひし〳〵と直りたり龜田其後上田を感じけるハ此事ふり龜田ハ南の町はづれに左の池の堤に鉄炮五十挺ふせ馬より下り立敵を待處に敵かけ來る龜田思ふほどに引付下知して鉄炮を搏するに生死ハしらぞ騎馬の兵三

十騎ばかりぞ落す敵是にためらふひまに鉄炮に藥こみて一町ばかりも引取たりかくの如く三度くり引くして樫井の町に引取馬を立並べて休み居たりかゝる處に敵味方ハしらぞ東の河原より歩立の弓の者をひきゐたる大將馬にて乘來る龜田河原へ乘出し是ハ大坂にて誰の陣と問ふ岡部大學と名乘て馬上にて鎗たけに成し時大學馬を引返して北に向て引退く龜田きたなし返せと呼ハり一町ばかり追捨て樫井に歸りこゝにて討死までよと獨言して石橋に腰かけ十文字の鎗をとり鉄砲の者をあつむるにちり〳〵にぬり唯三人殘り止りぬ三人龜田が前に來て腰ぬけども足まとひなり落たるこそよけれとて少しもひるまぞ龜田大に賞する處に上田一騎乘來り先に鉄砲の音しけるにはやくも引とられたるよといふ龜田聞て我と御邊と二人討死するならば屍の山をもなすべし但州公ハ琵琶がたけを越させ給ひ自害ありしといふハ誠なりや敵進み來るともまた一時ハあらんといふ處に一騎ハ赤くよろひ一騎ハ二三間おくれたるが黒くよろひたる者かけ來る赤き物具ハ塙黒き出立ハ塙が手の者なり塙ハ龜田に向ひ塙が從者ハ上田に向ふ龜田立上り飛出て鎗組たり敵の鎗龜田が胃を二打三打うつ處を十文字の鎗にて胸板又左の脇を突てつき伏龜田が士菅野兵右衛門來て首をとる敵伏ながら菅野が足を切拂ふ菅野加右衛門助け來り塙が上に

乘かゝり兵右衛門に首を取せぬ上田ハ鎗を打折無手と組たる處に上田が手の者二人たすけ來りて敵をうち取上田ハ痛手おひけり龜田ハ猶進み出十文字の鎗を足にて踏直し居たる處に又敵一騎かけ來り鎗を合す菅野加右衛門鎗にて脇つぼを突須田作兵衛其首をとる差物に谷下吉左衛門と書たり此時敵一人來りて龜田に向ふを突拋ひたり大坂方まばらがけして先陣の大將討れしかば敗北しけり東照宮も龜田が此日の軍を殊にほめさせ給ふといへり龜田ハ父を溝口半左衛門とて柴田勝家に仕ふ大隅若き時ハ半之丞といひて十六の時初陣なりしが柴田伊賀守に屬して越前白鬼戸女河原にて馬上の敵を打取柴田父子感狀を與へらる又越前丸岡の城へ一揆押寄たる時も功名あり志津ケ嶽の軍にもよい首取たり後淺野家に仕へ小田原山中武藏忍岩槻の城攻にも度々功名したりければ秀吉是を賞せらる文祿年中朝鮮蔚山にて敵六騎と馬上にて太刀打し一騎斬て落し其首を取ければ寺長感狀を與へらる慶長五年濃州合渡にても功名し瑞龍寺二の丸に先登し度々武勇聞れ高かりければ京都にて台德院殿御前へ召出され龜田が働たぐひまれなりとて御腰物を賜ハり上田も同じく賜物有て賞せられけり龜田後高野山學侶花王院のもとに隱れ寛永十年八月十三日卒しけるとぞ

○奥平の長臣奥平源八父の讐同姓隼人を討しに相與せる士多し源八幼くして奥平の家を立去しに一味の面々も皆立去て源八が成長ス待居ける其中に一人の士妻ハ稻葉丹後守正通の家の士の女にて有けるが父のもとに預け置しに頓て讐討べきに及びて妻のもとに行て離別するいづ方にても嫁し親の苦勞に成給ハざれといひければ彼妻聞て年久敵隔なかりし餓にかくなるハ定めて故有べし然らずしていとま給ハりてハ親に向ひていかにいふべき詞あるといひければ今ハつゝみがたくして誠ハしかくの子細にて讐をうつに組したれば其聽ハ討死するか又ハ公の咎によりて殺さるゝか二ッの間ゝ有べし御身ハ年若き人の我死後に艱難すべければいたハしくてかくの加くいひつる也と語りければ彼妻もとゆひの際より髮をふつときり讐打すまし給うて相見ゆるまで此髮いろひ申さじと誓言して別れけるとなり其後讐討おほせて彼士も散々に働き助太刀して彼妻のもとに行て對面しけるにもとゆひの間より髮の長く出てもとゆひハ其まゝ有しとぞ

○越前忠直叛志ありと世に聞へし比加賀の前田利常ハ隣國なれハ軍の支度せられしに物具着て乘るべき馬を擇ぶに加賀の領國の中二千疋にあまれる中にて富田越後が馬を擇出す鹿毛にて二寸五歩あくまで駿馬なり大庭に旗數百本立並べふせつたてつくして金鼓を鳴し鉄

砲ちうつに少しも驚かぞ名をば優婆塞とつけられけり今一匹とて擇べれしに似たる馬もあかりけり

凡大將の馬を擇ぶに心得有べきにや甲斐の武田の家にて米澤といひしもの奥州に行て馬を求る時信玄一首の和歌を書て與へらる

上野の中のかんこそ大將の乘べき馬としれやものゝふ

信玄五十疋の馬の中に軍に乘れし馬四足栗毛中段とて只二疋あり甲斐山梨郡とし野といふ所の百姓此四足を養ひ置しを米澤見て又おき馬也と信玄に申て五十貫の地を與へて此馬を信玄に奉りぬ今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく益なき觀の美に黄金を費す事にゝ成ぬるなり是みな上より下にいたるまで軍旅に明かならざる故なり

○池田の長臣森寺秀勝ゝ伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが伊勢の國司に攻落されけり藤左衛門秀勝其比幼かりしを母抱きて落行尾州織田信秀の許にかくれ居たり護國公池田信輝朝臣の母君を養德院といひしが江州より落ぶれて清洲に來しを藤左衛門瀧川一益に頼みて信長の乳母に出せしに信長護國公と同年なれば遊び相手と成て年をれくれり故有て護國公出奔し給ふ時森寺も同じく打つれて赤堀に居れ居る事五年に及べりかくて信長星崎の城を攻らるとき

聞きて森寺商の体にもてなし清洲の城の厨に行て物具を求むべき支度せばやと存ぜれ共金も銀もなしあゝれ少し計給ゝれと護國公の母君に潜に云ければ我も金銀のあらばこそ此なり共とて綾の小袖三ッ出して森寺にあたへらる森寺いとぎ出て銀錢六十に換たり古き物具を買たれども冑なければ茜にて染たる布を鉢巻にして星崎に向ひ給ひしかば信長悦て護國公をもとのごとくつかゝれけり藤左衛門子を政右衛門と云すぐれたるあら者也政右衛門忠勝十八歳の時いづれの所にて有しやしらぞ護國公の前に有し時稲葉伊豫守一鉄のもとより備前の陶とてとくりを贈られけり政右衛門見て是ゝ贋物なりあらぬ物をたばかりて豫州さぞ笑ふべし悪き奴にこそあゝれ伊豫守が目の前にて打碎きたらば快しといふ護國公汝が詞無禮なり豫州が目の前にて碎くべくばくだいて見よとの詞を聞くより座を立てとくりを懐に入伊豫守の方に行たりかゝる事とゝしらぞ對面せらるしに政右衛門とくりを取出し備前にて燒たる物にゝなく贋物なれば返し申すといひもあへぞ柱にあて、打碎きつと走出ければ一鉄それとゞめよと下知せられしにかけのびて歸りけり護國公ゝ政右衛門がつらたましひ一定伊豫守のもとにて打碎くべし危き事なりとて門内に待給ひし處に歸り來りしかくせしゝるしゝ此なりととくりのかげたる口を取出し見せ申て後申しけるゝ凡

君となる身い一言も謹あるべき事なり先に申せし詞い無礼なれどくだくべくいくだいて見よとはりあひをかけられ若き男の骨をきざまるゝともさてやむべきや遁れ得て歸りしい寺なり已後を謹み給へといひけり政右衛門美濃の竹が鼻に居し比木全又藏といふ士ゆかり有て森寺がもとに居たり

又藏が父い五右衛門とて大剛の者なりしが或時野伏一揆しけるに木全山の中にわけ入しかいそれいいかにと問ふ中へんにかまうと答ふはどなく一鑓のうち通りける所を山の上よりどつとおめいて突てかゝりしかば小勢を大軍なりと思ひ一揆さんゞに敗北しければ木全が鎗にて中へんにかまふると世にいいれし人なり

政右衛門又藏に心を合せ同國高木何某を討んと計りけり又藏竹が鼻の竹林にかくれ待しに高木夜中に打過ける處を走り出て唯一鎗に突殺し從者共を追ちらしてけり高木が子二人父の仇報いんと聞えしに政右衛門或年江戸に行時荒井に宿せしに敵道に待と聞て舞坂に行道の程三十間ばかりもへだて、凡八百人計待かけたりしに政右衛門しづ〳〵と乘通りしに敵更にとりあいねば政右衛門從者五六人にて馬を引返し仇の前に乘行是に待たるい高木なりかく申森寺を仇にてうたんとや唯今何とてうたれざるやさらば參りあいんと大音にいへど

も物いふ人なし政右衛門あざ笑ひなど討ぬぞや此後我をうたうといい存もよらぎと罵りて打過江戸に趣きけり高木い訟へて政右衛門を討んと申ければいづくにてもあれ討べしと許されしが又政右衛門にもきびしう防ぎをして仇にうたれざるをもて勝にせよとの事なりければ常に鉄砲五挺に火縄に火をつけ弓十挺に箭を關ひさやはづしたる鎗五本士三十人うち連けり秀吉の時出仕しけるにもかくの如し刀をも殿中ゑ携へよと許さる伏見の城を築かれし後諸大名出仕有しに政右衛門にけふい出仕すべからぎ仇の必覓ふべきといひしかども政右衛門れして出仕す秀吉の居間の次まで刀をいつも携へけれども其日い從者にもたせ置て廣間に仇の有ける中を打通りて事故なく退出しけり後慶長四年四月に參河にて病死したりけり

○國清公池田三左衛門尉參議輝政卿世を下らせ給ふ時伴玄札い寵臣なりしかば必殉死すべき者なりと人もいひけるを興國公武藏守利隆朝臣聞し召よく心を付よと侍臣に仰られけり御柩にをさまらせ給ふ日其次の間なりしふすまをひらきそれに入又閉けるを怪しみ行て見れい脇差をはや腹に突立けるを抱おこし人多く重りておし留置かくと申ければ興國公急ぎ御出有て玄札いかにと仰られしかべ玄札承り御恩深く蒙むれば御供仕りなん志を見附られしい口をし御ゆ

るされをもて快く死出の道に赴き申べしと申上けるを聞し召さもあるべき事なりされども我主の主にハ成がたきを見すて、先代の供したらんにハ人々思ふ樣も玄札ハ先殿の志をも知り寵愛に遇たる身のよく〳〵今の嗣ハ劣り果たる故供して死したるならんといはんにハ今までの士一人も我に心服する者あらじ我ハ獨夫と成はてん事目前なり我を獨夫にしなしてそれを忠とも義とも思ひなんにハとく死して御供申べし強て我おし留むべきや我ハ汝が死するに依て主の主にハ成る事あたはじ只とく死ねよと仰られけれバ玄札涙を流し存よらぬ仰を承り誠に進退究ると申けれバ興國公とく死して我を獨夫にして先代への奉公とせよと再三仰られ玄かば玄札とかくいはで暫ありけるが仰の趣承りぬ主ほどの者が刀を腹に突たてながら止べきならねども只今の御詞によりて恥をしのびて人に後指をさゝるとも ながらへ罷在べしと申けれバさてハ我主の主になる事を得たり汝が忠義比類あるべからぞよくいたハりてと仰られ内にいらせ給ひけり

○池田の家の士大將番大膳景次ハ父を藤左衛門景元といふ尾張智多郡荒尾といふ所の人あり大坂冬の軍尼ヶ崎の城にて片桐が兵ども討れしを援ハざるにより二心ありと東照宮疑ひ思召よし聞ゐしかば其子細を申述んが爲使を參らすべきに誰かよく使せんと各使を擇び其

姓名を書て出すべき旨興國公の仰により數百千の士半を過て大膳が姓名を記して出しけり公自ら書記させ給ふも同じければさらばとて西宮の陣所にて大膳に仰付らる二條の城に參りければ東照宮の御前に召れて子細を糺させ給ふに一々道理明かに申たりしかども猶聞し召入らるべき氣色なかりければ尼ヶ崎の地圖を取出し武藏守露塵ばかりも二心なきよしを申せしかば其時疑ひ思召さるよし仰出されて退出しけり人々再三押返し諍ひ奉りて武藏守罪なきよしを申せし有樣類少き者なりと感じあへりしに東照宮も其後大膳が事をゆゝしき者なり誠に豪傑とは大膳なるべしと仰あり番後祿千石を賜ハりまたのち千石賜ハり芳烈公松平新太郎光政卿の臣の時に至て政を執たり寛永十三年七月六日病で死す

○池田の家にて政を執り四海にはゞかれ高き熊澤次郎八伯繼了介ハ本姓野尻なり加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて外大父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす守久初ハ喜三郎といふ喜三郎父を平三郎とて尾張の人也東照宮に仕へ奉り三形原にて討死しけり守久其後福島正則に仕へ正則信州川中島に流罪の時正則の江戸の屋敷をかこみてもし仰を背かバ忽討滅さんとあり正則の士大かた出奔しけるが士只七人殘りとゞまりし中に半右衛門も留れり正則川中島に赴く時途にて殺さるべしといひふらす守久節をまもりて附從ひ信州に參りけ

れば正則日比寵愛の淺かりし事を悔れぬ後水戸の威公に仕へけり一利ハ後鍋島に仕へて島原の城攻に武功あり延寶八年八月廿三日備前岡山に卒し蕃山に葬りぬ次郎八寛永十一年十六歳にて備前に來り芳烈公に仕ふ十三年島原一揆の亂起りし時公江戸にあり仰を承りて岡山に歸る此時次郎八いまだ元服せざりし故江戸に留置れしが自ら元服してひそかに岡山に歸りたり十五年岡山を去て近江の桐原にかくれ居たり二十四の歳高島郡小川村にゆきて中江惟命を師とし道を問歸りて又高島にゆく此時父野尻氏仕へを求め江戸に赴く次郎八母妹をそへて東近江の八遠き所に殘しとゞめたりしに家甚貧しくて江州の賤しき百姓の食するゆりのこ雜水を飯とし糠を食して魚肉酒茶の味をしらぎやう〳〵帋子を着て寒をふせぐ事五年相しる人母妹のありて餓死せん事をあハれふばかりなり中江玉陽明の書を讀て良智の旨を次郎八に語り示す芳烈公伯繼が王佐の才なる事をしり京極主膳に就て後來り仕へんやと度々問せけれバ正保二年再び備前に參りて仕へけり祿三千石を賜ハり改を執たり和氣郡八塔寺ハ備前美作播磨犬牙の如く入まじりたる地にて次郎八請取口とす和氣郡の中便宜の地に因て田を墾き士數十人を土着とす此時伯繼を助右衛門と稱しけり公の參勤に從ひて江戸にゆく事度々に及べり世に名譽高く其道を慕ふ人多し大猷院殿その人となり

をふかく信じ召て尋ね問るべき處に慶安四年かくれさせ謁見し奉らぎ承應三年備前大よ水出明暦元年飢饉の災あり次郎八日夜國中を巡り撫育に心を尽す伯繼日比儉にして家中婢女寡くいとなむ事少し唯客を愛して組の士朝夕となく來りて相語る伯繼水理を論ぜる事妙を得國中水を通し沼を作り旱魃の防をなすにみな馬上より打詠めて其利害を定め論ぜるに數十年の後其言皆中らざるハなしといへり明暦二年和氣郡木谷の狩に山より倒れ落此より脚を惱めりかくて和氣郡寺口村ハ其祿地なれば蕃山と名を更て世を遯るゝこゝろざしあり

つくば山葉山しげ山しげゝれど思ひ入にハさハらざりけり

といふ和歌の心にて名付しといへり病により明暦三年祿を辭し京に赴く其道を慕てあまた伯繼を師とし貴べり此時所司代牧野佐渡守親成人の讒言を信じて伯繼を憎む又其才を妬む者あるによりて世にさまゝゝいひふらす專共ありて寛文七年四十九にて大和の芳野に匿れ又山城の鹿背山に引こもり又播磨の赤石に移り居延宝七年六十一歳にして大和の矢田山にかくれけり赤石ハ松平日向守信之の領地たるが日向守領地を大和の郡山に移す故あり貞享四年八月常憲院殿の仰により下総の古河にゆく日向守領地を古河に移す故なり日向守深く伯繼を尊信せられたり同年の冬封事を江戸に奉り政事を更正すべき旨を申すにより大に旨

に忤ふ事ありて永くとぢめ置べきよし仰出されけり此後人の來て物語するにもし國政の事に及べばかたいらなる笙をとり吹て一事もいふ事なし元祿四年八月十七日古河の城賴政郭に病死し城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ歳七十三なり伯繼の學朱子王子によらぬ別に一種の學をなすといへども文學に短にして政事の才其長せる處なり

○會津中將保科正之の台德院殿第九男にてれもせしが殊に豪氣あり近習の人に向ひて八々のたのしむ所を尋ねられしに小櫃與五右衛門といへる若臣が樂む事二ッ有其一ッの家貧しくて奢といふ事をしらず天より命せられし貧をたのしむ其一ッの憚る所ありと云ぞしひて問れしかべ謹で申けるやう大名に生れざるを天の冥加と存じたのしむ處なりと答へけれべその子細を問るゝに大名の天性かしこくおはしても臣下之を馬鹿ゑとりなす祿少き身の其師や朋友あしき事を戒む故に其身を省て馬鹿にならざれども大名のさわなく臣たる者とかく怠らひて の身の爲よからじと存じて其主の善事あれべ山の如くにはめいっとなく恣になりぬいかに聰明にても學問もなく歌といふ事をしらぬ善事を弁へ給ふべきやうなきゆゑ馬鹿になりはつる の口をしき事にこそ臣大名に生れざるを樂と存 此子細と申せべ中將つくゞと聞召てよくもいひたるかな尤至極せり今より馬鹿に成ざる思慮すべきよとてそれより山崎嘉右衛門を尊信し學問を嗜れ後神公と諡せしい此中將なり

○水戸中納言光國卿い賴房卿の第三の子東照宮の御孫也寛永十年威公の嗣いまだ定まらざりしかべ嚴有院殿の仰にて中山備前守信吉水戸に至り光國卿三ッに成給ひしを見てかくと申上て嗣に定まりぬ正保二年史記の伯夷傳を續て深く感ぜる處あり是嗣い兄の賴重立給ん事なるゑかく定まりつれべ長子の方に家を讓るべき志此よりして起れり是より文學問を好み給ふの志篤し明歷三年より大日本史を撰び始めらる神功皇后を帝紀を黜けて后ゑ列し大友皇子を天子と定め南朝を正統と立らる皆此君の義列なり寛文三年賴房卿卒去あり葬禮僧家の法を用ひず瑞龍山に葬り威公と諡し廟を水戸の城中に立られ祭祀の儀式を定め給ふ殉死すべき士ありしに自ら其家に至りて止めらるゝに其理正しき故に殉死をとゞまりしかべ此事聞えて殉死天下一統停止の旨仰出されしい此君のゆゑなり又兄の賴重卿の子松千代綱方をしひて養嗣とせられん事を乞て若聞入られぎい世を遯るべき志なりしかべ賴重卿許諾あり松千代の弟采女綱條をも引とり養ひ給へり明朝の遺民朱之瑜といひし文學ある者滯朝の粟を食せじとて日本に渡りしを筑後柳川の文學安東省菴其俸祿の半を分て養ひ置しを召て師とせり綱方病によりて卒去有しかども弟綱條を養ひ置れし故卽世嗣になし給ひぬ

延寶元年孔子の堂を水戸に立んゝ爲江戸駒込の屋敷にかりの設をなす日本古よりの假字の文章を編て三十卷となしたるを天聽に達し後西院の帝名を扶桑拾葉と賜ハり即献じ奉る天和二年朝鮮の使臣江戸に來り三使進物の目錄禮義を失せる故三條の疑問有しに答ふる詞なかりしとゝ後西院の帝の勅命により鳳足といへる御硯に銘を作られしかゝ宸筆を下し給ハりて賞美せさせ給ふ其御詞の中に備武兼文絶代名士といへる句有しを印に彫せられしとなり元祿三年領國を綱條卿にゆづり櫂中納言に任じ給ひしが程なく辭表を奉うて歌に

位山のぼるもくるし老の身ハふもとの里ぞ住よかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り山莊の有さま莅をもて葺門垣にハ蔦はひかゝり只竹がき一重にて池に蓮を植西山のほとりに桃數百株あれバ川の流の橋を桃源橋と名づけ鹿をはなち鶴をかはせ給ふによくなつきけり瑞龍山に壽藏を設け衣冠を埋み碑陰の銘を自ら作り給へり久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂をたて賴義義家の神主を置せらる又攝州湊川に楠正成の墓を修し碑を立て碑面に嗚呼忠臣楠子墓と自筆し陰にハ舜水の撰し讃をはらせられ又舜水の碑を瑞龍山に建られ其文集を輯して門人源光國と稱し給へり彰考館を作りて和漢の群書をあつめられしに遠國他郷に學士を遣ハし半紙一行の反故をも見るに隨ひ

拾收め給ひけるほどに色々の書ども編集有けり中にも禮典類聚五百卷ハ日本古來よりの寶典と稱すべしとゝへり寛文五年領國中の淫祠三千八百こぼちすて新地の寺院九百九十七除かれ多珂郡にて廣野ありしに馬を放ち牧となし地の利を尽す術に心を盡され海參白魚昆布とゝ沼が浦にまき海に蛤をはなち是より海物多く出づ山にハ漆楮多く植させけり元祿十三年西山に逝去あり義公と諡せしとなり

○渡邊數馬弟源太夫が仇河合又五郎を討けるハ寛永十一年十一月七日の事なりもと數馬ハ松平宮内少輔忠雄に仕て忠雄備前岡山におハしける比寛永七年七月廿一日城の大手にてをゝろ易かりしかゝ源太夫と物語しけるがいかなる故にや主從四人にて源太夫を切殺し又五郎ハ脇差の鞘を落して行方しれぬ成ぬ折節をゝり見んとて群集しけるに數馬が下部岩佐作兵衛煩ひ居しが外のさわぎを聞出けるに路次の内より刀を提たる者に出あひ何者なれバ士の家に刀を振て入しやと詞をかけたる所に徒目付の遠山才兵衛も來り合せ彼者を切とめけり源太夫ハ深手負て又五郎相手なるよしいひて死しぬ豐後が方に告けれバ數馬も豐後も又五郎が父半左衛門方に行對面すべしといへども門を固く鎖して入得ざりける中に長臣荒尾

志摩忠雄の近習加藤主膳かけ來りて半左衛門に二人して受取ぬ忠雄半左衛門をば管樞之介に預られけり半左衛門初め安藤對馬守重信に奉公せしが故有て忠雄懇にせらるしに半左衛門口論して相手を斬出奔して渡邊數馬がもとに來りしを潛にかくして祿をあたへられし身なれば又五郎を出して腹切すべきものと忠雄思はれしに半左衛門に更に其志に非ずして又五郎江戸に行けるを安藤治右衛門かくし置れけり久世三四郎阿部四郎五郎兩人忠雄のもとに年久しく來れる人なれば治右衛門にかくといはれけるに治右衛門申けるに半左衛門を渡されなば其まゝ又五郎を出すべしとの事にて此旨を兩人忠雄に告れども尚も覺束なき体なれば兩人たしかに又五郎を請取出すべきとの起請文を忠雄に出すさらばとて半左衛門を江戸に召下してとりかふべしとの事に及て治右衛門朋輩ども申旨あり仲間を除くべき故是非に及ばぬと忠雄に申す忠雄其欺く事を怒りて忠雄一族の人々心を合せおしよせて奪ひとらんと支度あり

伊達政宗に論ぜるまでもなし蹈潰して奪ひとるより外あしといれしとなり

三家の御方和平の取計ひ有けれどもいまだ事遂ぜず半左衛門に池田備中守長幸のもとにありかゝる處に忠雄痘瘡を病て卒去あり弟の松平石見守廻澄同右近太夫廻興三家の御方に訴へ

申旨ありけるに長幸も卒去ありて半左衛門に松平阿波守忠英請取て阿州に赴く道にて死す安藤を始め咎を蒙り閉門仰付られけり寛永九年七月備前因幡國替を仰出さる此時數馬立退て備前の兒島にあり又五郎が行へを尋れども知れぜ數馬が姉聟荒木又右衛門大和の郡山に在けるが又五郎が伯父河合甚左衛門も同じく郡山に有て暇を申て奈良に出けるゆゑ又五郎が行方を聞んが爲に數馬又右衛門方にゆきしに又右衛門數馬一人して之危し助太刀せんとて明る年の三月まで荒木がもとに止め置三月又右衛門暇を乞得て郡山を出にけり是に甚左衛門が惡口しけるによれりとも云へうさて數馬又右衛門に攝州丹生の山田に妻子をあづけ置四月に江戸に赴き所々搜りけれども行方をしらぜ甚左衛門をば時々見かけしかども誠の仇にあらざれば打過けるを甚左衛門に嘲りけるとかやかくて又丹生の山田に歸り明る寛文十一年大歡院殿御上京により京都に赴き方々尋ねけれども行あはぜまた丹生の山田に歸り其後又五郎有馬に行と聞有馬にゆけども行あはぜ奈良に行て潛にきくに甚左衛門が方に又五郎かくれ居て十一月六日江戸に赴くよしなれば其夜おし寄べきとせしが奈良に商家の事なり途中にて討べしとて數馬又右衛門主從四人甚左衛門がほとりに立明しけり六日の朝先に甚左衛門中に又五郎うの跡に櫻井半兵衛是に又

五郎が妹聟なり弓鉄炮ゝ上下二十八なり七八町計もつゞきて行に又五郎其日ハ伊賀の崎が原といふ所に宿す四人見知られてハと裏の道もなき所をふみ破りて三町計も行過宿をからんとそれゝ怪しみて島が原へ心得られざる人こそ四人宿をかりつれと告遣ハすその由を又五郎が旅宿へしらせたり敷馬も又右衛門も敵ゝさとられじと夜深く出て山でもりして伊賀の上野小田町にしゝの宿をかり城期の酒もりして待かけたり着ハなしやといへゝ是をなりとゝもとて鰯を三ツ出す皆頭なし敷馬日出度といひて主人に酒の價をとて金子二十両ばかり投出し興ふれゝ驚きたり是を限なれゝ何のためにせんといふ處に主人の女房かつをぶしを出す敷馬心の付たるよとていたゞきけり又右衛門着たる羽折を脱て主人に與へ庭ゑ飛出てをどり上り〳〵したる有樣すくやかなる男のけふを限りと思ふけしきあらはれて只鬼などもかくあらんと見ゑしと人後に語りけり七日の朝又五郎島が原を出て上野にかゝる又五郎ハ思ふ仇なれゝ敷馬討とむべし甚左衛門ハ又右衛門立向ふべし半兵衛ハ又右衛門が若黨武右衛門敷馬が若黨孫右衛門両人かゝり合べしと相定め間近くおりければ又右衛門眞先なる甚左衛門に詞をかけ飛かゝり馬より切て落す甚左衛門刀半抽かけしを二の太刀にて穿ち留たり半兵衛ハ鎗の上手と聞ゑしかば鎗をとらせゞ馬より下んとする處を武右衛門一太刀切たりけれどもあさ手にており立たり從者鎗おつとり半弓をも射かけ透間なく切てかゝりしかゝ二人爰を最後と相働きける所に又右衛門かけ來りて多勢を切まくり半兵衛に渡り合終に切伏たり此時又右衛門刀を打折けり其刀伊賀守金道が作なりけるとぞ敷馬又五郎と切合ける處に又右衛門ハ從者と追ちらしかけ寄て敷馬よくせよ助太刀ハすまじきぞかなひがたくばかゝらんと詞をかけゝれゝ敷馬飛込で又五郎を討とめたりかゝる處に藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野に在けるが敷馬が親類ありしかゝかけ來る其外上野の士また集り敷馬又右衛門主從とも嘉兵衛方に引とりぬ又五郎甚左衛門ハ其場に死し半兵衛ハ息かゝり居けるを引取たれゝ程なく死す敷馬十三所手負武右衛門痛手にて其夜半ゑ死す孫右衛門手十所おひたりかくと藤堂家に聞ゑて三人ハ嘉兵衛方にしゝらく有しが藤堂式部がもとに年月を送る式部死して藤堂出雲に預けらる寛永十五年六月江戸より仰下さる〻旨ありて敷馬又右衛門も藤堂家に下し賜ハりけりかくて江戸の彦坂平六郎敷馬が一族たりしがゆゑ藤堂家に申乞て松平勝五郎光仲のもとにゐらひ賜ハりたり因幡に赴くにより同年八月七日上野を出る藤堂玄蕃弓五挺組の騎士二十八玄蕃が騎士五人藤堂出雲外に母衣の者組の騎士四十人彦坂嘉兵衛鉄炮頭三人鉄炮九十挺弓頭二人弓四十挺田中源兵衛歩行の士二十八引續て伏見因幡の

屋敷におくられしかべうけとりのために因幡の士横川治太夫父子鉄炮二十挺渡邊越中鉄炮二十挺伊吹源太兵衛父子鉄炮三十挺宮脇平太左衛門弓十挺伊賀の者五人片上彌二兵衛父子鉄炮二十挺松尾惣左衛門父子伊賀の者六人福田樞兵衛歩行の士二十人宮脇德兵衛田中六郎右衛門其外弓の者二十人出逢て因州に赴く伏見より川舟にて下り海上の船ハ備前芳烈公のもとより出し松平新澄の方よりも船を出し大小三十艘播州坂越より陸路を經地主より馳走の士出迎ひて草深き所をからせ道筋山々遠見を出し夜ハ篝をたかせ鳥取の城まで三とまりにて引とらせられけり仇討ける時數馬二十七又右衛門三十河合武右衛門四十岩本孫右衛門三十八歳とぞ

○京極若狭守忠高雲州松江に有し時其士に箕浦備後内藤兵庫多賀孫左衛門といへる者あり備後が末子與四郎といひしハ容貌美麗にて兵庫が子八左衛門と情交淺からぬ孫左衛門が子孫兵衛斯とも志らで與四郎に心をかけたりしに曾て無二にいひかはしたる者ありと答ふそれまでにてはうハの空なる名を聞てやみなんとかさねていひしかば名を問べもし其人に害やせんと密に八左衛門に告て孫兵衛備後が宅に時々來ることを幸なれとて或夜與四郎が部屋に呼入れ懇にもてなし酣の後八左衛門出逢て孫兵衛をさし殺し屍を城下の鹽津川にそてたり夜中しる人なし鹽津川の下に屍の流れ寄たるを見て誰がしわざともしられざれども自然に箕浦内藤に指さす人も有けれバ孫左衛門聞て證據なしといへどもかゝる類ハ天命にて虛説なき物なり僉議を遂られよ沙汰に及ばぬバ備後兵庫を相手なりと訟に及ぶ忠高目付を以て密に聞バ果して實なり多賀が訟理なきば楽置がたけれども内藤箕浦両人忠ある舊臣なるゆゑ立退けとひそかに知せて箕浦父子内藤八左衛門雲州を出奔しけり孫兵衛に両人の弟あり此時十三歳に十一歳なり兄ハ後父の名をもて孫左衛門といひ弟ハ忠太夫といへり忠高卒去刑部少輔忠知に六万石賜はり播州立野へ所替あり多賀其比京極の家を出て兄の仇を討んとすれども幼かりしときの事故内藤を見知らぬ父孫左衛門が介抱し置たる浪人間市太夫恩を報せん事此時なりとて附從ふ孫兵衛が妹の子三田右衛門八も相加はれり備後ハ土井大炊頭に奉公しけるが年老て死す與四郎ハ二十にて病死せ八左衛門は小笠原信濃守忠修に奉公し祿五百石與へられ仇あるゆゑ他所へ遣されぬ勤勞もなく只あらん事快からぬ人なみの奉公を許されぬハ永く暇を給ハれといふにより江戸の供の列に入られたり若仇に討れなばとて小笠原家高天神にて走廻りよかりしもの〻子其外徒の者六人内藤に自然の事あらバ助けよとて附置れぬ或時内藤土井大炊頭のもとへ使者にゆく多賀聞て歸るさに途中に出迎

ひたり八左衛門八數多く引つれ馬上にて來るを問あれこそ内藤よとをしふ若打損じたらんに馬上にて馳ぬけんも計りがたしとて孫左衛門市太夫前より忠太夫右衛門八後よりかゝり其間近くなりて孫左衛門編笠を脫覺へなきか八左衛門と詞をかけ頭を額へかけて切る忠太夫二尺七寸の刀をもて飛かゝり切るさられてそりさまにふみ出したる鐙忠太夫か拳に當りて指の骨白く出たりとなんさて内藤落る處を孫左衛門たゝみかけて切忠太夫馬の下をくゞりて切とめたり孫左衛門始向ふより太刀付しかゞ内藤が從者幾刀となく切けれどもさのみ深手ならねば散々に切合たるを内藤が從者薙刀をもて右の肩より腕かけて切しかば左の手に刀を取直したる處を薙刀にて袖口を左右へさし貫く孫左衛門が刀間近くなりしかば薙刀を捨たり薙刀へかせにおりぬ數ケ所の疵へ蒙りつ遂に倒れて立あがらぜ忠太夫右衛門八市太夫内藤が從者あまた切伏せ追拂ひ忠太夫かけ寄て孫左衛門が頭を抱さいかにと問けれゞ思ふ仇討おほせぬれば思ひおく事なしとて息絶たり内藤を始として其場に七人一二町逃て倒れ死する者二人多賀兄弟三田間四人が手に掛て都て九人を切殺しけり忠太夫疵三ケ所三田間も手負ぬれども三人とも死ぜ孫左衛門が面に編笠をかけ息つぎ居たるにあたりの人出合奉行所へ連て行き御法の帳面に記して尉ざる趣を尋らる忠太夫もとより承り及びたる事なから萬一それゆゑに事もれて討もらさんも計りがたし本望遂なゞ何の身命のをしかるべき御法に背きたりとて刑罰にあふとも附屆に及ぶべからぜと少しも屈せぜ申述る又三田へ近き親しみなり間が助太刀へいかゞと問る間承り涙人なりしを多賀が恩を以て年月を送りぬ孫兵衛殺されし時兩人の弟幼少にて仇を見知ぬゆえ手引して討せり多賀が多年の恩を報いつれべいかに御咎ゝ蒙るとも いとひ申さぬ 志なりとゞ述る何れも申す處 尤 至極せりとて歸されけり孫左衛門卅三歳忠太夫卅一歳右衛門八十八歳市太夫孫兵衛死後廿一年の後寛永十八年辛巳江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるゝ是なり其比土井大炊頭の邸に近きを以て一橋を大炊殿橋といひけるとなり

○入久保長門守敎寛の内所に奉公せし女中老ある時心得過ちし事有しを女の年齡大に怒り打擲に及びぬ中老親にもたゝかれし事へなきものをと獨言して部屋に歸り文書て下女にもたせ親のもとにやりぬ二人の女房一人へ殘りなんといふを大事の文なりとておして二人とも出しぬ道にてあやしき事ゝ常に二人一度に出されし事も覺ゑぜ顏色も只ならぜ有しとて文を披き見るにしかくの子細にて自害そるなりと書のせたりさてこそとて一人のはしたものにへとくゆかれよ我へ歸りておしとゝむべしとて急ぎ歸りて見るにはや自害して有

しかゞ夜の物打かけ小脇差の血を拭ひ我懷にさしてさあらぬ体にて年寄の部屋に行かたり申度事あり只今部屋に來られよといひしに程なく行べしといひければ歸りていまた行數度に及びしかば年寄來りて夜の物をあくれゞあけに染て中老ハ死してあり其時女房これハ今日の事にてかくハ自害に及びたる也主の仇よといひもあへぞ小脇差を拔て刺殺しけり兩人を殺したるならんとてとらへて糺出問るゝにふところより文をとり出し證故ハこれなりと始終を詳にいひ述て主の仇をゞ討留つ思ひおく事なしとてさわぐ色もなし長門守女中を殘らず並べて彼中老の下女の事を尋ねらるゝに忠義といひ氣なげなる事といひ驚き入たるよし口をそろへていひけれゞ此度の次第はむるに詞もなしといふべきなり年寄乃死して事もかげぬれゞ則年寄に取立て然るべからんとてよび出して賞せられけるとぞ

○松平筑前守忠之の士に林田左文といへるハ戸田流劍術の妙を得たり足輕の卒二十八預り居たりしに或時足輕六人々を殺して出奔す左文ハ折節馬を乘て有しが告來るを聞則馬に乘て追付たり足輕これを見て立向ひ追つかれたりとハ他國に參りて申そまじこれよりかへられて然るべからんといふ六人敵對せばたやすく切勝べし今日まで頭たる者なれゞ切るまじいとの心なるべし林田部に馬より下り六人同じく人を殺したれども必其罪の中輕重あるべし我こゝに來るハ其是非を糺し明かにせんとなりとて歩みよる處を一人たべかられじといゑて刀を抽てかゝる林田刀の柄に手をもかけぞ足をも動さぞ卒爾なりあやまちすなといひて間近くなる時無分別者かあといひ〳〵刀を抽やひなや手の下に斬倒し皆部りて能きけ敵せし故斬たるぞ敵せぞハ何とて切んやといふを又一人斬てかゝれゞ愚なる者ども哉死狂ひをするかとてわざとあとしざりにしざる隙込ぞ處を飛ちがへ一太刀に斬伏たり皆氣をゆるめ一度に斬かゝらせじが爲にかくして三人斬倒しつ殘る三人ばかりハ屑かハと思ひて又一人斬伏せ一人ハ手負せ一人ハ蹴倒し手負せたる者と蹴倒したる者とハ其帶を以て縛り馬に打乘せ先にたて、歸りたり是ほどの者なれば筑前一國の士多く林田が劍術の門人なり馬爪源五右衛門ハ鉄炮百發百中の妙を究めたる者にて武藝を好みしかども林田が劍術を學ばぞ其故を問へども打笑ひて答へぞ林田後咎ありて死罪に行ハれけり馬爪親しき友に林田ハ姦邪なり何事を仕出さんも討りぞたしと思ひたりき劍術を學べん事ハ我も好み望む處なりといへ共已に師弟となりて後難に臨て坐ながら見てハ有べからぞ其姦邪にくみせば士の道にそむくべしかねてより交を結ばざるにしかじと思ひたりしが愚者も千慮の一得なりとぞ語りける

○青山因幡守宗俊の士に石井宇右衛門政春といふ者あり因幡守大坂御城代の時宇右衛門も從へり赤堀游閑といふ醫ありて其從子源五右衛門を養子にしたるが石井にゆかり有て頼みたりしかべ天滿のかたはらなる寺に置て常に宇右衛門ごもとに來り親しくしたりしに年經て赤堀鎗を弟子に敎へてかなたこなたせしに源五右衛門が鎗いまだ精練ならぎ人に敎へん事覺束なしと石井いひけるを赤堀用ひざるのみならぎ石井に立あれよといふ石井汝がためにこそいへ老たる身の立あいんも無益よといへども赤堀怒りて止らざればいざとて立合けるに手もなく石井勝たり赤堀口をしき事に思ひ延寶元年十一月十八日の夜宇右衛門が出たる隙に忍びて來りうくれ居てかけたる鎗を盗み出し宇右衛門が歸るを待て戸の内に入らんとせしを突通され十文字の横手にかゝり深手にて倒れ死す從者を一太刀斬て逃去けり石井が嫡子三之丞い番にて有合ぎ次男彦七郎い臥居たるが出んとすれども部屋の戸を源五右衛門かけ置たれべ踏破て出けれども源五右衛門行方しらぎなりぬ三之丞暇を申て彦七と共に源五右衛門が行方を尋れども更に何方にありとも聞えざりしかば源五右衛門が父遊閑も同意にてやあらん此者を討ば源五右衛門隱れ居じとて江州大津にて遊閑を切殺しそれより京五條の橋伏見の京橋大津の町に札を建恩人を殺し逃走りたるい士の法に非る故父遊閑を

殺せり汝が爲にも仇なれべ逃めぐらん事を止よ首を刎べし赤堀源五右衛門へとて石井兄弟が姓名をしるしけりされども源五右衛門出あいねば所々を尋ねめぐれども見出さず美濃宝原村の犬飼瀬兵衛が妻い三之丞彦七がをばなり是を便にして爰に有しに彦七い犬飼が一族にむつまじからぎつひに我一人仇をうたんとて宇原村を出にけり延寶八年の冬瀬兵衛が妻死して其翌年正月三之丞彦者孫助を安藝へ使にやりて唯一人犬飼ごの家に有て湯あみしける處に源五右衛門忍び來り其戸の側に隱れ居て一刀に三之丞に深手を負せけり頃い天和元年正月廿八日の夜の事にてくらさいくらし二の太刀に三之丞が刀持たゝ右の腕を打落す三之丞ながら脇差を拔て左の手にて赤堀が股を突さそこにて死しけり座敷に犬飼が甥の茂七といふ者來り居たるに赤堀飛かゝりて一太刀斬たり犬飼聞付て十文字の鎗をとり赤堀に突てかゝる赤堀わきなる塀によりそひて刀をさげ後の塀を破らんとするを犬飼見て鎗をとり直し後に廻らんとせし透間に飛出て犬飼が眉間を切る犬飼年老たれべ重手にて倒れしかべ赤堀と討もらせり一族相集り松明を燈し追かくれども行方を知ぎ犬飼い赤堀が大坂にて宇右衛門を闇打にしける時十文字の鎗よて突殺せしかば其鎗にて突殺さんと思ひけれども所狹くてものよさへぎられ討洩せりと悔みける從者孫助その明る日飯りて此を聞齒がみし

て自害せんといひしをさまざまにいひなだめけり彦七も此由を聞愈怒りもだえしが伊豫の親類の方に行とて海上にて風にあひ溺死しけり赤堀へそれより尾張に行伊勢の龜山板倉隱岐守の士青木安右衛門へ親類なれば忍びて行たりしに頓て板倉に告て祿百五十石あたへて赤堀をねらふ者あるべしと其用心甚嚴なり他國より來る者へ一夜の宿をも禁制し見しらざる者をば城門の内に入れず赤堀名を改て水之助と稱す宇右衛門が三男源藏友時四男半藏吉政とて両人皆幼少にて安藝の松平安藝守の士田中左近右衛門石井九大夫迎へとり丹羽三大夫が許にて養育す三大夫が妻へ石井家より嫁せし故あり我男の身ならべ赤堀をさがし出し首を刎此鬱胸をはらすべきに女の身年老て志を遂ざる事いふべき詞なし二人悲なく人となりてとく父の仇を討て黄泉の怨を散せよと日夜にかたり聞せしかば二人遊び戯るゝに心あくひたすら仇を討べき志一筋なり從者孫助へ石井家の恩を請し身なれば赤堀龜山にありしと聞てさまざまに身をやつし魚を賣り或へ鏡とぎとなりて龜山に行けれども宿とるべきやうなく城中に入がたければ時々隙際にたゝずみけるを人あやしみ赤堀が用心彌嚴なり天和二年源藏龜山の有樣を傳へ聞我既に十五に及べり龜山に行て父の仇を報ぜべしいたづらに遠方に有て月日を過さん事の口をしきとて一族さまざまにおし止れども聞入ぜしの

びて廣島を出る時思ふやう龜山の士いかばかりかあらん殿の仰にて赤堀よ心を合すべし天運つよく父の讐へ討たりともいかでかのがれ得ん萬死の中に一生もなき身なれば幼少より育へれし伯母へ母の恩よりも深し人に知せぜして最後の盃せばやとて物語の序に近比身も壯になり酒も嗜めども思ひ立志のある身へ少しものむ事もなしけふ幸に外より來れる酒少したまへらんやといへば盃をいだすおしいたゞきて覺ゑず涙の落けるをあさふる袂にかくして遺書をば婢女に授け置舟に乘て備前岡山に至り田上某かもとよしばし居て天和三年大坂に赴く半藏へ十歳なりしかば廣島に有けりかくて源藏それより旅人の体をして龜山に行又京に歸りて或へ關坂の下に赴きて二年が間龜山に入べき謀をたくみけれども中々思ひもよらざりしかば江戸に赴き隱岐守の屋敷の下部に奉公せんとすれども此も屋敷の法嚴にて力及へず又龜山よ行又常州上総下総までも其便を求めて奔走す其艱難誠にいふに詞もなかるべしとかくして廣島を出て七年過しぬ始へ甚行路に行なやみけるが天の護にや有けん程經て後へ寒暑をも能堪へ雨露にたち濡れ風氣に冒されども藥をも服せず其身愈〳〵健なり或へ野山に打伏或へ飢渴に及べども志したる一事へ膽を大にしてちつともひるまず半藏へ今しばし成長して一族おし止るをも顧ぜず元祿元年廣島を出て兄と一所に

なり龜山に入んの謀をなすかくて板倉隱岐守卒去有てければ江戸の屋敷より取いらん手立せんとて半藏江戸に赴きも備となりて屋敷に時々行けれども其便を得ぞ源藏江戸に赴きて半藏が手だてよ心を合せ又上方よ歸り兄弟往還誠に織が如し或時ハ僅の商となり又或ハ近江の茶うりとなり或ハ伊賀の山家の者といつハり詞づかひ身のふるまひそれ〳〵に似習ハんとこゝろぐけたりけりかくて元祿九年半藏板倉の士平井才右衛門がもとに下部となりて奉公する便を得て龜山に平井歸りしかバ半藏も供して龜山に入事を得たり源藏ハ上方に赴き伊勢に行通ひて人目を忍び半藏に逢て仇の有樣を傳へ聞平井病て死す平井と赤堀と親しみあれバ其吊ひに來る道にて討んとはかりしにいかにか有けん赤堀來らで其手だても空しく成ぬ其明の春半藏に暇をやりしかば又龜山の辻四郎兵衛がもとに奉公す辻江戸におもむく半藏江戸に供せんハ志にあらぞといへども龜山に居んにハ所の人請人に頼むべき人なけれども辻が供して又江戸に赴く源藏目を病て久しく療養に日を過せしうちに半藏江戸より又龜山に歸り忍び出逢て仇をうかゞへども便を得ぞ半藏又江戸に赴きしかバ源藏も又江戸に行て町奉行川口攝津守のもとに參りて仇うつべき願の書を出す是元祿十一年十一月十六日なり半藏ハ何とて來らざるやと問るゝに弟ハ所々立めぐる中に煩ひ出し旨を申す仇

討んとの志ハ年久しく成ぬいかに今までハ申出ざるやと問るゝに源藏聞て兄弟とも幼少にて敵の有家を存ぜぞ近頃承り出したる也又承り出さゞる前に申出んにハ外へ泄聞ゑて仇の彌かくれん事を恐れての事にといへば尤なりとて帳に記して聞届られぬ江戸御城の下馬のもとにても見付たらバ討とめよと許されしかバ辱き由一禮して又松前伊豆守の許に至りてけれバ攝津守よりいひ送られし故帳に記してとく首尾よく仇討れよと色代すそれより源藏ハ龜山よ歸り奉公せんと便りを求めけれども其たとへ金銀を惜まぞ賄賂すとも他國より來る人の奉公すべき請にたつべき人ハ思ひもよらぞ況や一金の貯へなければ源藏もいかんともすべきやうなし元祿十三年源藏又江戸に赴きける處に周防守のもとに夏目八兵衛といふ者ありもと上總の人なり下部を召置んとせしかば半藏たよりありて夏目に告て駿河の者にて候が伊勢の太神宮に參りたき志あり給金ハ給ハらでも奉公せんとたバかりければ夏目さらばとて源藏を下部にしたりけり半藏此時ハ下村一學といふ者に奉公し兄弟共に龜山に赴く是より兄弟日夜よかくれ忍びて心を合せ仇を伺ひけるが其後に石黑仁右衛門が下部に至て實儀なる者あり源藏が心まめやかなるを見て甚心安かりしかバ請人を頼みて事よくなりぬかくて鈴木柴右衛門といふ者に奉公しければ夏目此人ハ勝れたる

者也と詞をそへたり半藏も下村に仕ふる事なみ〳〵ならねば主人いたはる事大方ならぞ其父に祿增れしかば半藏を若黨にして刀に衣服を添て與へたり兄弟今ハ龜山にありて時を待處に赤堀が當番の飯路を討べしと定めて元祿十四年五月にも成ぬ八日ハ赤堀が番なれば午の刻に代りて飯る處を討んとせしにとく飯りて志を空しくすさまじ其明る朝の飯路をとて各用意したり源藏ハ殊に下部のすべき事多く更にいとまあし宵に少の間暇を乞得て町に出それより龜山の八幡宮ハ道のはとりなれば立寄て心しづかに着込を着神前に向ひ今日必父の仇うたせ給へと伏拜み宮を出れば夜ハ明たりしかば二の丸に行空眠のみして半藏を待居たり半藏ハ出んとせし時主人の用ありておそく成たる處に友達の來りければ着込着る間もなく主人より嚇ひたる刀ハかけ置のくし置たる刀をとり飛出て二の丸にゆけば兄ハ半藏を遲しと待居たるに來りければこゝろの中に勇みけりかくて赤堀其日ハ唯一人廣間より出て飯りしかば兄弟打つれて二の丸ゝ外なる石坂門を打過ける時赤堀が後よりかけぬけて前に立ふさがり石井宇右衛門が子源藏半藏なりと詞をかけ源藏拔うちに赤堀が眉間を切赤堀我刀の柄にて請とめたれども二の太刀すがさぞ切付たる處に半藏かけ來り赤堀が頭にふかく〳〵と切付たふる、處をたゝみかけて切たりしかハ立もあがらぞ死したりけり源藏乘かゝ

り刺貫てとゝめをさし從者をハ追はらひつ兄弟ハ初赤堀が父を打たりしより仇を報ゆる次第しるし置たるを常に各一通帶の中へ入たりしを取出し赤堀が袴にはさみけり所ハ長臣板倉杢右衛門が宅のあたりなり我も〳〵と馳あつまるべし年頃日頃思ひ暮せし赤堀をハ討とめたり今ハ世に心にかゝる事なし刀の目釘のつゞかんほど切あひて尸の山をなし年久しく赤堀を警固せられし恨をはらさんと兄弟いひかハし追くる人を待ども更に來る人なし半藏其時爰にて切死せんより城外に出て追手をまち死狂せんさらハ京都にも聞ゑ旅人の往來に聞ゑて安樂の一族たちにも兄弟本意を遂し事を知るべ死なれば城門をたばかりて通れんといふより早く半藏先にたち驅出るを源藏うしろより詞をかけ汝が用の事急ぐと主人のいれしぞとくいそがれよといひ〳〵打連て城門を出れば番人も聞咎め來黑門をのがれ出て京口に至り龜山の西のんこの茶屋に至りけれども追來る人なければさてハ通れ得ん事も難からじされども馬に乘て追來らんに兄弟走て息切たらんにハ思ふほど切合れじと靜に關川をわたり山に登りて見わたせども追來る人なければ龜山　西南一里半ばかり行て小家ゑ立より草鞋を買もとめ洋の城にゆく者なりとて道を問ひわらハを案内者にして十町余りも過て椋本の松原見ゑしかば畫をかへし又道を引たがへて北なる野ゑかゝりて食物をしたゝめ

てゆく〳〵小川を渡りしかべ口嗽て太神宮に向ひて幼少より思ひ入たる仇を撃たる事の
忝さよ廣島を出しよりながらふべしとゝゆめ〳〵存じもよらざるに爰までのがれ出たる
ゝ神の護と伏拜み併賀の上野に出それより山城の笠置の道を問伏見に趣き京より諸國の
一族のもとに龜山より仇打たるよし書しるしいひおくり岐曾路より江戸へ趣き五月廿六日
町奉行保田越前守のもとに行て仇討たる由を申せべ尋問る、事ども有て越前守自出て兄
弟に始終詳に聞いたゝらる、事大かたならぬ饗膳給ゝりてそれより松前伊豆守のもとに
至りしに過にし年逢たりし人々出て悦びあへり青山の藝州の屋敷へ往て石井清大夫がもと
にあり青山下野守の嫡子筑後守此由を聞即使を以て兄弟を引とられけり其後下野守の領
地其比濱松なりしかば遠州に至り兄弟ともに寵せられ源藏後重き職を命ぜられけり

○譯州丸龜京極備中守高豐の弓足輕尼崎幸右衛門といふ者あり同じ弓足輕岩淵傳内といへ
る者幸右衛門が妻に心をかけ幸右衛門があらざる時さまゞ〳〵いひたりしに中々受ひくけ
しきもなく恥かしめけるが又或夜來りしに肯ハぜして有し處へ幸右衛門外より歸りて此よ
しを見傳内無禮者と怒りしかべ叶ハじと思ひ刀をぬきて幸右衛門を一刀切て逃る女房ハ小
女をいだき居しがそこに棄たる夫の脇差をぬいて傳内が逃るを追かけしかども逃のびしか

べ脇差を投つけたりしに傳内が右の肩に少し疵付ぬ冬の末夜にて雪ハふりぬ終に行方を知
らず女房立歸り見れば幸右衛門深手にて死したりしかべなげき悲しむ事大かたならぬ傳内
ハ重罪の者とて尋られしかども行へをしらず幸右衛門妻ハ妹の夫なる關根元右衛門といふ
者のかたに月日をおくれり只朝夕に夫の最後の有樣口をしく思ひつゝ歎きのあまりに病づ
き翌年二月に死しけり三歳よりなりける女ハおばの養育にて十三歳になりて名をりやといふ
元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに或時こまやかに父母の事ども語り聞せ汝が母
ハ我爲に姉なるがせめて此子が男なりせべ仇を討つ事も有べきに口をしやと明くれなげき
て空しくなりぬと語りけるにりや大に感き今まで夢にもしらざる事ども也御いたハりによ
りかやうに人となりぬる事の忝きよしいひてさめ〳〵となくより外の事なしさて十六歳
になりける時両人に向ひ江戸に參りて奉公仕らん父母のために諸國の觀音にも參詣せべや
と存る也萬に一ッも仇うつべきあハれみをも神佛に祈らべやといふ兩人いろ〳〵止れども
中々とまるべきにあらざれべ京極家の侍村瀬藤馬といへるが江戸に赴くにたのみてさしそ
へ遣ハそりやハ江戸に赴き番町の永井源介といへる御旗本のもとに奉公へ出る源介ハ劍術
の弟子あまた日毎に來るりやが勤る有樣殊外心をつけて奉公するに誠に珍しく思ひいかな

る者の子にやと尋らるゝにりや詳に事の子細を語り父の仇を報はん志のよし涙を流し答へければ源介つく〳〵と聞て女ありともなどか父の仇を討ざるべきまづ我劍術の弟子となれとて敎へ試るに才氣有て思ひ入たる志なれば劍術もはどなく遂みけり二年に及て主人いへるゝ爰にのみ居たらんより主人をあまた取換て仇を尋ねよかしとさま〳〵に心を附たりしかばそれよりこゝかしこ奉公せしに既に十二年を過て主人七十八に及べり其後本庄なる坂部安兵衛といひし御旗本の家に奉公せしに小泉文内とて五十餘なる男の有けるが平生酒のみにて壯年の事とも何くれと語り出し大言せしが若氣にて人の女房に心をかけたりし事により其夫を切て棄たりと物語せしをりや聞ていか樣にも似たる事もあるよとおもひたしかゝ聞屆ん物をと心の中ゝ思ひてそれゝ嘘なるべしといへばいかでか僞をいふべき今まで人にいひつる事ゝなけれども年月ゝ過つ國ゝ隔りぬ委き事いざ語るべし我ゝ元讃州丸龜にて京極家の者なりとて有つる次第をいひて幸右衛門の子女なりと覺ゆたればおそるゝ事もなしとて肌をぬけばりやが冊の投つけたりしと聞し脇差痕のも見えつりやゝ只今爰にて討なんと立あがらんとせしがもし討そこなひたらばいかゞすべきと思ひ返して何となく其坐を立其明の日永井のもとにゆきてかく〳〵と語りければ源介大ゝ悅びて則りやを打連

て京極家の村瀨が方ゝ行告しらせたりければ則備中守に申て公に訴へたり坂部のもとゝ公より紀さるゝに彌紛るゝ事なかりければ文内を京極家にわたし給ゝりぬまづ文内を獄に入置鳥越の下屋敷に虎落をゆひ日を定め文内を獄より出して勝負の場に出されたり村瀨りやを連來りぬ肌にゝ鎖の着込を着白ちりめんの鉢卷して一尺あまりの小脇指に二尺三寸の刀さし虎落の中に入村瀨りやに用意せよといふ其時りやいかに文内汝が手に懸たりし尼崎幸右衛門が女なり今更出合たる事天道の冥加也と詞をかくれば文内おのれにふるき事をあかしたるゝ無念なれども此刀にて父も子も手にかけんとて三尺ばかりの刀を抽て切合けるが横に拂ふ刀にあばらを切れ二の太刀面にあたりひるむ處をりやふみ込で乳の下まで切さげおしふせて靜に首を切二十餘年の間志したる仇只今討て父母に手向くと撿使にいひたりしを感せざる者なし備中守も悅びて俸米かろき身の娘なれども孝行氣あげさばかりの士にもいかでか劣らんとて息女に付られけるとぞ

○伊丹播磨守康勝ゝ寛永年中御測定頭三人を置れし時其第一に撰ばれ農をつとめ商を通じ民と俱に利を同くしけるはまれ高し其比商人の運上金を公儀にさゝげ奉り甲斐國より出るはな帋を一人してあきなふ者ありけり然るに又富る商人ありて内々告て今までの人の奉る

處の金に一千兩まして運上を奉るべし某一人に帝商ふ事をゆるし給ふべきよしを申す此事尤然るべしと議定ありしに播磨守一人其心を得ずして聞入ず執政の大臣たちにも此由を告て乞ふ事止ぬ三年の後執政の人々播磨守にしかくの事請ふ者あり同職の人もゆるすべしといへども猶用ひられぬときくに誠にや天下の富を以て見る時に千兩の金に少き也といへども是を以て國用を足すに資ずしとかいふべからぬいかにとありしに播磨守承り今より盜賊のおこらぬ道ありつらんにいかにもせるし申べしと答ふ人々いかなる子細ぞと問るに播磨守日本のもろこしよりまさりたる物に紙なり中よりはな紙と申ものに貴賤一同より一日もなくて叶ぬ物なり其價の賤しければこそ世のたすけとなりぬ今まで商人の奉りしより千兩の金をましなん事此千兩はいづくより出すべき此紙を商ふに價を增てあきなふを又それを買てあきなふ人いくらもあらんにこれらも同じく利を得て商はんとせんにいとに加へりかしこに增て後よりの價甚貴くなりなん凡一帖の紙價一二錢をましたらんにいと富る人の愛とするにも足ぬ貧賤の人一日よ得る所の利賦よすくなし僅よ一二錢を累ねて妻子をも養ふかくあさましき者とても今日までにはな紙やうの物を常に用ひ來れり價忽にましたればとて更に何物を以てか此に換べき然らば是らも又おのれくがあきなふ物にて

もあれ其價をまして其得る所の利を以てはな紙を買より外の事なし凡一物の價增す時に万物の價同じく貴くなる事皆定れる事なり價貴くなるに至て求んとしても得ざれば或に飢或に寒ゆるよも及ぶべし飢寒せまれば必死す死をれども守る所を失ぬに士より上つかたの事なり下ざまの人に飢て死し寒ゑて死を盜しても死す死に一定なり同じく死る命いかにもして一日も世にあらまほしく思ふに賤しきがならひなりさてこそ盜賊に起る事にてこそくれに只農と商との事のやうあれども士の召仕ふ奴婢等も物の價貴くして求得ねば盜む事同じかく盜の世に盛に成なん時よ至りてはいかなる政事をもてこれをとゞめ給ばんやこれらの盜に貧より起る事よりてそれよりも又民よゆるして利を爭はしめ其利上に歸するやうにし給はんには天下其風に靡き從ひてよき人々共に利を爭ひ各其欲する所を得んと思はんこれらは盜せぬ盜人にて其禍盜するより增りてこそ天下をたもたせ給へば天下の寶ことゞく御寶なり且上の費をだに省せなば一年の中よ積所の御寶幾千万兩のことなるべしそれよ僅千兩の金をまさんとして盜賊起り世の風みだりに成らん事身の肉を切て飢を救ふに腹よ滿る時身終るといへるに同じかるべし大署物の價の貴くなりゆく事に國郡に運上の多きが致す處なり某既に年老ぬ願て死し申べし相構へてこの後もかゝる事申す者あり

とも人々よくこゝろゐられよといひければ人々感じあへりけるとなり

○佐藤五郎左衛門直方ハ學問よて世に聞ゑけり酒井忠清賓客のもてあしに禮せられて終りけり井伊掃部頭のもとにまねかれていまだ掃部頭の前に出ざる中長臣と物語せし時直方が云大事ハ論なし聊のわざも傳授ならひと申事あり師に就て學び稽古し思慮をも盡して後こそ得るものなるに日本の人々ハ大事のことに學ぶといふことなく傳授稽古といふ事もなく自己の料簡にて事を濟しぬるとあり各たちハ御承知にやと問ふ皆々いかゞと問ければされば國家の政にこそ萬民の命にかゝり一言にても國の安危なり至極の大事ゆゑ聖人の教へおかれたる萬世の鏡ありといへども今の大名君臣ともこれに心つかぞ只自己の思慮にて思ふまゝに政をなすハ危き事の至極なりと語りけり直方が論まことに格言といふべし予筆をこゝにとゞむるハ慾あきにあらぞ後の此書を讀む人これを察せられよとなり

常山紀談大尾

常山紀談拾遺

備藩　湯淺元禎　述

同男　明善　校

○家康公被仰ハ小身の武士着料の具足を成さるとき胴籠手具外ハ麁相よいたさすとも胃を背ば念を入る心得がよきぞ子細ハ討死をとげたるとき胃ハ首と一所に敵の手にわたるものなり然るときハ死後の爲にては無かとの仰有しとなり右の上意に付上田主水入道宗古物がたり致せし士ハ討死を遂け首に成たるときの義を心に掛たるがよきなり去に依てさかやき抔の後さがりなるは佗言つらになり見苦しき間若き衆中必後高に刺給へ明日ハ必一戦と知れたる前日ハ首を奇麗にいたす心得第一の由かたられし

○小幡景憲の物がたりに大阪陣のとき堀殊のほかふかくして攻がたきとき本多佐渡守とかく金堀を入て堀ぬき可然と家康公へ申上られければ尤なり然るべしとて仰付られける土佐或ハ伯耆佐渡より呼上せよと詮義のとき佐渡守いわく右の國のもの不功たらんたゞ甲州の信玄金堀度々勝利ありとて甲州より金堀とよび己にほらせんとす城内に此由を聞て甲州より金堀來て此城を堀くだくとて躁きけるなり其内に和談に成けり何か五年や十年の内にて

七十間など有堀をはりがたからん是にて敵の氣を奪ふ道理なり遠州高天神の城に小原與八郎と申人籠城しけるゆへ早速金堀にて矢倉をはり落したるゆへ城をあけわたす敵城へ堀はめの矢倉の下まで堀付るなり是にてくづるゝ又くづれざるときハ鉄炮の藥を百貫目にても横切火繩にて付るあり我籠城へ敵はらばそのときハ必その堀方にハ伏かまり番あるなりまたはりくる方へ此方よりも或ハ三筋にても四筋にても堀かくるなり是にて大方通りなれば金堀妙に覺るなり又ハやき物をもて候くる方ちん〳〵と云なり両方よりはりあふときは互に分るなり是とき味方歸り此方より多くこゑを流す也

○野間左馬之進物がたりに田螺を折しきの片隅に三ッ又かた隅に三ッよせて両方へわけて一夜置くとき其合戰勝負のまけの方を追こみかちの方ハ進み出るとあり大阪陣の城中秀頼木村大野と稱して盈の一方に三ッまた一方に關東方家康公井伊藤堂と稱して三ッたにしを置て一夜置くにかならす關東方の三ッの田にし内方の三ッのたにし追込たると也勝負の吉凶を兆ふと是よりよきハなしとなり武備志にも此兆を出したり考ふべし

○家康公駿府に於て御伽衆の中より大阪御陣以後去る五月七日若江村におゐて井伊掃部頭家來三人にて敵一人を討とり三人相討と有之に付掃部頭委細に吟味相遂て相討に極り今一人の申口相違に付掃部頭不思被致仕の由と申付けたる山中上られば其義にハとかくの仰もなく何も聞へし惣じて物事に余計と云となく切つめたる如くなるハ宜しからぬ就中武邊などの義ハ余計の有候が能なり子細ハ織田信長いまだ小身のせつ佐々成政と前田利長と両人にて敵一人をつき倒し成政利長に向ひその方敵を追つき倒されたる義なれべ首上られ候へとなり利長我らハ敵を突倒したるといふ迄にて鎗合の義ハ御自分なれば首をその方揚られよと互に辭退仕る所へ柴田權六も馳つき左やうに両人辭退の首ならば中にて我申請べしと て首を上げ我ら高名の證據のため両人にも來り被申よとて三人同道にて信長の前へ出て櫛六申す樣ハこの両人にて敵を突倒し首をとれ取まじきとて吟味合仕る所へ參りかゝり首を某とりてけること申せハ信長公御聞なされ三人とも大に賞美いたされたり右二人ともに武邊に余計あるゆへなりと仰られけり

○紀伊大納言頼宣卿ハ文武の賢將にて其行跡も凡人にあらぬ大坂御陣に二條の城にて大坂表御手遣の御備定あり頼宣卿十三歳になり給ふが進出給ひ御先手を我らに仰付られたしと御のぞみあり家康公御感にて城強くして先手せめあぐみなばその方仰付らるべしとて御機嫌あり五月七日大坂落城のとき御旗本後備にて尾張大納言義直卿と紀伊大納言殿も御着陣

以前合戰終り大坂落城なり茶臼山より家康公御前に賴宣卿御出有て今日御先手にて無之ゆへ手に合不申無念至極なりと頻に御落涙なされ松平右衛門大夫正久申にハ今日御手に御あひなされをとも御せきなされまじ御一代にハかよふのを幾度も御座あるべくと諫まいらする賴宣卿聞し召され右衛門をはつたと御にらみありて我ら十三歳の時が又有べきかと御申あり家康公聞しめされ御涙を御浮へ御感悅にたへぞ常陸殿その言が金言なりとの御稱美なされけるとぞ石川榮入ものがたり也

○高麗都南大門合戰大明李如松三十万騎にてきたる小早川隆景一組二万との合戰なり初め李如松ハ吳惟忠張世爵等十万余り山海關を出鴨綠江をわたり朝鮮に入小西攝津守行長大將にて大村新八松浦刑部卿法印宗對馬守等二万八千にて稍籠る平壤城をせめ破り小西を追て朝鮮の都さして推來り朝鮮の人馳加りて三十万騎なり大友義統も峒山城にありしが聞逃して落る小早川隆景ハ開城府にあり都より五里を阻てその間に大河あり其とき黑田長政久留米秀包にも白川と襄陽にあり小西大友もこの城にとゞまる隆景ハ開城府に蹈止り大明勢三十万を引受一戰して相果べく猶止り給ひけるを惣大將備前中納言秀家卿石田治部少輔三成增田右衛門尉長盛大谷刑部少輔吉隆より飛脚をもつて早々都へ引とらるべく大河間に

阻り難義仕と故此表へ一所につぱみ然るべしと申越されれども隆景ハ我日本より渡海の初めより再び日本歸朝の心なし本朝大半納り國家無事なれば疊の上にて病死せんかと是のみ心にかゝりしに幸に此陣出來何よりもつて滿足なり隆景年五十八死しても惜からぞ大明の三十万にかゝり合切先より火花をちらして合戰し討死を遂んと老後の思ひ出これに過ぞ我たとひ討れたりとも日本の御弱にも成べからぞ大明三十万を此所にて待受べしとて少も動じ給ハざりけれバ大谷刑部少輔只一騎開城府へ來たり隆景對面し貴殿の御心底古の名將勇士も此上過べからぞ但し貴殿二万バかりにて三十万の圍を受て徒に討死せられんと本意あきなり速かに王城にかへり惣軍を立備御身惣軍を先手にて快く合戰し死を善道に守り玉はゝ迚も死せん命忠義とも に全からん早く都へ引入玉ハるべきむね諫けるに隆景心ふくし左すれば何時にても先手ハ隆景一組請ヲ間他の望許容有べからぞと刑部被請合て王城へ引とり申すべく大谷そのをんハ我ら請入に立たるよし申されて白川に有し黑田長政へ此旨申遣し早々開城府へ引入申べしと告遣しけれバ長政も久留米秀包も小西行長大友義統同道にて文錄二年正月十五日に開城府迄引とり申さるゝに付隆景大谷黑田久留米小西大友同道よて川を渡て王城へ引入隆景ハ右の所存んゆへ都へ入ぞ南大門の外碧蹄館に陣と

り居られ同月廿六日大明廿万騎夜の内に河をわたり都表へ推詰たり其夜の廻り番ハ隆景相備立花左近宗茂なり家老十時傳右衛門五百余にて曉打廻口に出るに大明李如松が大軍と闘紛にはたと行あひ立花が勢駈ちらして引取しを大明勢追かけしかば十時傳右衛門返し合せ五百余散々に相たゝかひ殘らず討死する雜兵四五人走かへりて此旨告る立花左近宗茂則隆景幷に毛利七郎兵衛元康久留米秀包高橋筑紫へ告知す隆景則王城へ注進備前中納言秀家卿三奉行何れも追々に南大門口へ馳來る夜はや明ゆるに遙に見わたる大明李如松が爰去と一里バかり備を段々に立て只今掛らん氣色なりその勢淵江の潮の源來るがとし先手二里余に廣がり勢子並を立跡も先もみな旗にて夥しき其中々なり秀家卿三奉行に大敵と野合の合戰いかゞなれバ都へ引籠り防然るべしとありしと立花左近眼をいからし太刀に手をかけ大音上げかやうの大軍に籠城して叶べからぎとも角もあれ野合戰よきわめ然るべしと申されける依レ之合戰にきハまりたり諸大將先陣をのぞまるに隆景眼に角を立我先陣たると最前よりの約束なり他の出あるべからぎとて隆景そなへを配られける先陣粟屋四郎兵衛大將ゑ、て村上彈正野島掃部等三千なり二の先ハ井上五郎兵衛大將にて佐世石見守吉見大藏大輔等三千あり三番ハ隆景旗本一万にて備立花左近久留米秀包毛利元康六千ハ奇兵とし

て隆景の右の方三町ばかりに引退てそあへたり其日の合戰火花をちらし粟屋井上押立られ候を立花左近横鎗を入れ大將李如松が旗本を突崩せしかば隆景も正面より切かけられ候に付大明廿万惣敗軍になり首數三万八千余隆景一組へ討とりたり隆景立花手柄申も中々疎なり此とき立花左近ハ甲付の首二ッ直取の高名にて鞍の壇手に付大刀鍔本五六寸のつて鞘へ不レ入を帶巳も馬も朱よなりて先手よりしづ〳〵と參られけるに粟屋四郎兵衛備の前を打過とて備の組頭村上彈正野島掃部を呼かけ立花申けるハ今日ハ立ふれまじき所を推立られたりとありけるを大將粟屋四郎兵衛聞もあへぜ立らるゝとも立られ返すとも返したり我備へハ今日の合戰の花になりたると返答する聞もの粟屋を嘲ざるハおし扨立花左近ハ隆景の旗本へ參られけるに立花自身の高名二ッまで鞍に付られたるを見て隆景取あへぜ立花見とゝなりと嘲られたれバ左近聞給ひ毎事仕まするとの返答也よき自讃の言ばなりと其場にて聞人かたられける此とき合戰未始らざる時分黑田長政只一騎歩侍七八人にて隆景旗本へ見廻らる隆景見て長政ハ幸の所へ御こしなり粟屋四郎兵衛井上五郎兵衛を先手に申付物馴ぬ者どもにて心元なく存ぜ貴殿先手へ越され毎事御指圖下されよと申されし長政喜悦の色見へ畏りたりとて先手へ越さる頃ハ正月廿六日辰刻なり朝鮮ハ寒國にて寒事不レ斜長

政ハ大綿帽子を着し甲ハ郎等に持せられしが隆景の先手へ出るとて綿帽子を脱甲を取て着られしに隠なき例の水牛の甲なり水牛の角本を鞣皮にて結び付られたり扨甲の緒をしめ先手へ出られけれバ隆景旗本數千の士卒とも長政先手へ御こしのうへハ今日の軍に勝たりと惣軍勢勇みたるとなり長政の年を問へばそのとき廿五歳なりそのよわひにて如レ此人に慥に思ハれしハ中々凡人にてはあるまじきなり長政常に宣ひしハ立物指物は海老ハ子にして差たる斗にてハ働時が馬にのり立行ときにぬけて落るものなり立物に穴をあけ受子にも穴をあけ革にて結付べしとなり自分大水牛の立ものもふすべ革にてゆひ付られたるを其とき見たる人かたりき

○津田長門入道々慶物語りに日根野織部が唐冠の甲の立もの鐘馗耳二尺五寸脇立なり但右の耳の立物ハ半分より折掛たるやうにする太刀打に搆ゆへなり

○福島左衛門大夫正則の内伊藤伊右衛門武田勝頼を討奉りし士なり伊右衛門が咄として津田幸菴かたられけるハ甲州滅亡のとき勝頼御父子のしれぞ瀧川左近一益先手にて國中を尋ぬる田野の奥天目山の麓に落人の男女五六十人隠れこれあるよしにて押寄たるに皆々兵粮をかつへ働事不自由なり何の手もなく討取然所へ瀧川旗本より早飛脚有之勝頼公信州高の毛血まじりとり付有レ之田野より鹽手にくゝり付道にてすれしに付如レ此と申上る御覧あり貫も栗毛の馬の毛付たりその時城介殿御意にハ汝ハ冥加に叶たり勝頼の首をとりたりと被レ仰となり近年の書物どもを見るに事々しく働て討死し給ふ樣ゑ書たるもあれども我其ときハ小平治とて瀧川方に居て伊藤伊右衛門とハ傍輩なればまのあたり見たるに左樣にてなし勝頼ハ鎖帷に腰をかけ太刀ゑて防たゝかひ給へども飢疲給ひ何の働もなく伊右衛門が討奉ると板倉周防守重宗宅にて津田幸菴物がたりなり

○天正十五年四月一日筑前岩出城熊谷備中を秀吉公一時責に仰付らる御先手蒲生氏郷前田利家なりその二番備ハ羽柴三河少將秀康佐々陸奥守水野忠重なり山半分御上りのとき落城の間御上りなること御無用利家氏郷より申し來る秀康御年十四歳なり手に御逢無之レとて無念に思召落涙なされたる佐々成政深く感じさすが家康の御子おり今日手に御逢なしとて御せきなされて落涙なされバ我にも樣々諫申よし家康公に似申すと譽申たりときに秀吉公仰にハ左やうにてなし秀康ハ我養子なれば武勇の心入ハ皆々秀吉ゑ似たるゆへありと仰られしとあり

○越後涙人大井田監物ハ後越前黄門秀康公に御使番にて奉公仕るその仁の筆記に曰越後國

遠へとりこめられたり早々その本より罷歸べしと告るゆへ是まで來たる證據よ首ともを馬に付歸るべし府中へ歸たれば勝頼高遠へ籠たるも風説にて沙汰なし田野よて取あゐる首ともいみな溝堀へ捨る然る所よ地下の夫ども其溝の前にて皆頭巾をとり頭を地に付一禮して通るみな〳〵見て已らい溝堀へ何とていんぎんにするやと笑ふ百姓ども申けるいあの堀中に屋形勝頼公御父子の御首のこれあるなり數十代の御主と存禮拜仕るとてなく皆々驚て其首どもを取上勝頼公御首と云を城介殿御座の間の床かんなかけにのせ置殘の首どもい庭におき城介殿宣ひけるい勝頼の首を瀧川内にていい誰かとりつらん同くい一益が甥瀧川義太夫が取たるならば其聞へも可レ然と仰られまづ瀧川義太夫をめし奥の口へ召され勝頼の首を御見せ是い汝がとりたる首かと御尋義太夫よく見て是い抽者がとりし首よていい無レ之と申則庭へ召され四十計の首を御見せこれあればその内首一ッ義太夫とり出し是い私のとりし首とて取り出そ則土屋惣藏が首なり義太夫を御戻しなされ伊藤伊右衛門を召庭の首どもを御見せ此内に汝が取し首い有かと御たづね伊右衛門則殘らず見て申上るい此内には私とりし首い無レ之と申上る御座の間へ召勝頼の首を御見せこれあれば伊右衛門見て私とりしは此首と申城介殿汝がとりたる證據いいかにと御尋首の切口に私のりし馬栗毛粕毛

い代々上杉家領たりし處に永正十年六月廿日上杉顯定と家老長尾爲景と妻有庄長森原にて一戰ありし時顯定討死し爲景則上杉庶流上條の上杉定實を壻にとり我子長尾六郎を定實の養子分にして顯定の跡に立上杉を繼する爲景八男猿王長尾景虎後號謙信その性尋常に替り利根聰明にして大膽なるゆへ爲景氣に違ひ出家にせんとて下越後椽原淨安寺へ遣す後見金津新兵衛供して下越後へれもむく米山越あり米山い上り四里下り四里なり猿王繦に八歳あれば歩侍の背よ負れて山を上る米山れ峠に草葺堂あり米山寺といふその堂の樣に休て破籠とり出し猿王よも參せ供の侍ども中食る乳母夫の本條美作守も供なり猿王幼なれば堂の樣に廻り遊び居られし米山い大山よて峠の藥師城よりい頸城府内を目の下よ見をろす所なり猿王い故郷府内の方をながめ涙ぐみて繼母の讒言にて涙八すると無念なり成人して本望を遂べ此筋にて一戰すべし殊に此山い府内を目の下に見おろし能陣場なりと宜ふ本庄美作守金津新兵衛舌をふるひ感涙を流しその言を忘れ給ふなと悦と限りなし是則天文六年五月猿王八歳のときなり九年の間猿王淨安寺にて學問せられけれども出家の心なし天文十四年四月長尾爲景宇佐美駿河守定行兩旗にて越中へとりかゝられ松翁城主唐人庫山下左馬介こもり居しを宇佐美駿河守三千にてとりつめ責落し山下左馬介その外二百余人討果し松

倉城をのり取直にその城に罷ありし爲景ハ八千余にて放生津の城へとりかゝるこの城にハ德大寺大納言實規卿その外公家衆九人籠られ居たりその子細ハそのころ京都大亂にて諸公家衆みな摸寄々々に國々へ落らるゝ德大寺殿ハ越中國畠山尾張守尙慶の外孫ゆへ其便にて越中へ御越あり四月九日爲景ハ城をせめ落し德大寺實規を始公家九人上下七百余打果し城をのつとりし所へ畠山留主居推名神保遊佐郡須等加州の一揆どもをかたらひ後巻に出て加州ハ一向宗一揆あり僞て降參仕と申道を作りおとし穴をかまへ引入れ爲景加州へ押寄せし時爲景の人數一揆のおとし穴へかゝり大方打れ爲景も討死惣敗軍にて士卒散々になり越後へ引退く宇佐美駿河守定行ハ十一日ふみ止り敗軍を集め堅固に板倉をひき拂ひ越後へ歸陣する越中勢あとを付んと存ぜれども宇佐美が武勇におそれて一人もつかす爲景討死なれどもその子上杉六郎國を治て別條なし此年猿王ハ十六歳なり爲景討死と聞忌中の追善怨に沙汰し三年過ハ義兵を上越後を打平べきと工夫をめぐらし宇佐美駿河守をかたらひたるに駿河守も猿王の器量只者になきを見うけ一味仕りしに天文十六年猿王十八歳元服して長尾平三景虎と名のり同四月九日三年忌を吊ひ終て義兵を上樣尾城にたて籠る宇佐美駿河守本條美作守馳加ハり兄上杉六郎これを聞て妹聟長尾越前守政宗に七千余付て樣尾の城へ

取かゝる景虎矢倉に上り寄手を遠見して今宵寄手ハ引とるべきものいろなり其退口へ突て出んと申されし宇佐美駿河守申すにハ長途を寄來る敵いかで空く引とるべき哉突出ん所いかゞと罷見する景虎の白畫より寄手を見るに軍兵計にて小荷駄なし長陣の敵にてなしと思ふなり突て出よとて夜半に切て出る景虎の積のごとく政景退口へ切て掛りしに政景勢惣敗軍よなり景虎勝にのりて追打にして國中へ討て出る宇佐美本條も押續て打て出柿崎の下濱に陣を取是により兄上杉六郎八千にて米山を越て出向ひ景虎一戰をとり組しとき坂織部後号鬼小島度々介吉江織部をはじめさんゞに戰かふ所へ宇佐美駿河守麾をとり横入にかゝり本條美作守ハ備なりに靜々とかゝりしとき六郎打負敗軍仕米山へかゝり府内へ退申す景虎しづ〳〵眞先に追討ゝ進み申さる米山東坂本にて景虎申されたるにハ何といたしたらんやとの外ぬむくなりたりしべらく休打立べくと小家へ入てねふり申され駿河守これを見てこれハいかなる御とや今敵を追立るとハ竹を破がごとく其勢失べからずと米山を追越なべ頸城郡へ打出府内の城をのりとるべく早打立んと催けれども景虎ハ眠しとて高鼾かいて臥申され候駿河守樣々異見すれども不聞臥し申す故了簡もおし運の極のと云扨景虎ハ上杉六郎人數米山峠を三分二はど越たると思ふ時分早貝を吹せ景虎打立米山へ追上る

如レ案六郎ハ下り坂に趣所追付六郎八數龜破坂より破追落死そるもの數を不知後に宇佐美諸人に向て今日景虎米山坂にて逃を不追して眠しを各合点致されやと尋皆々合点仕らぎと云宇佐美が曰府内勢米山へ逃上るとき是を追て若敵に返られしときハ上手に敵を受て進せば返事必定なり景虎その段を積り眠る眞似して登坂を敵に登せ濟し下りに趣くとき追打給ふ我若年より數十度のこに逢しかども其積なきに景虎十八歳にてこの智恵ハ軍神の化身かと存し申す景虎ハ府内城をせめおとし六郎に腹切らせ其のち申されしハ主君の跡をつぎたる兄をころせし上ハ國を取望なしとて府内を出高野山へ趣申され闘の山迄出たるとき上杉家老その談合して曰景虎なくべ越後に重りなく我儘になり他人の手へ越後を取らるべくとて追かけ引留る景虎居給ハぎハ越後ハたれか治むべぎや上杉代々の骨折水になりなんものと達て異見する景虎さらば以來とも我ら下知を背まじくと起請文を宿老中いたされなべ皈べしと云其ときさ上杉家臣廿六人已來とも御意次弟に仕べくと起請文を書そこよて立皈春日山の城に入上杉宣實の上條ょ居給ふと申合越後を治られ長尾越前守政景を引付上劔平井の城に管領上杉憲政へ隨ひ申さるに付扨年頃不義ある者野心多き頭を上るもの大身共十六人林泉寺ょて切服申付る然れぞも前の起請文あるゆへに餘人とかく言とならぎ景虎

越をふみ鄙めこれ皆宇佐美駿河守に相談して如ハ此謙信ハ上杉を繼たる兄を殺し子孫を立ると天道ょ背くとて十八歳に出家して不識菴心光謙信と号す廿二歳にて上杉憲政の讓りを請上杉政虎と号そ永錄三年五月上洛して公方光源院義輝公より一字拜領し輝虎と改む菊桐澤瀉瓜の紋の幕綱代の興文の裏書御免にて關東管領に成越後佐渡東上野越中能登飛驒加賀迄手とかけられしと凡人にてハ有べからぎと云々

○朝鮮の役に黑田長政後藤又兵衛尉基次を物見につかはさる基次やがて馳向ふ處に其道に一ッの河ありその河を打わたり敵陣の近所まで行んとせしが日本の馬の沓川上より流れ來るを見て早川上の味方の勢の川をそたりしと推量し川邊より直に引返し長政の前に皈り味方の人々の内早川をこへ給ふと存ぎるなりそれゆへ敵陣近く參りて物見仕るにも及はぎ立かへりしいそぎ打立せ給ふべしと進めしかば長政大に喜び給ひ後藤基次が武勇の功者なると今に始めざるとなぐめら心早き物見の仕樣かな出かしたりはや打立と云給ひけり基次是より前にも朝鮮にて長政の先手山の端を廻りけるが敵と出合せ戰ひしぞそのときのこへを揚るを後藤聞て先手のたゝかひ味方打負たりといふ長政さゝ給ひ山のたゝかひを汝爰に有ながら味方の負しとハ何を以て知ぞと尋ねらる基次承りすにハ味方のときごへ次第に近

く聞ゆるゝ一定負けて引と覺へゝ勝軍ならば向へ進て関を上るも遠くなるものにと申もあへゝ味方敗軍の兵ども朱になりて追々きたれば又兵衛がさつそる處神の如しと感せらる

○讃州源英公の家士西尾右兵衛牢人のとき有馬の役に寺澤家の備をかる猩々緋の羽織に朱熊の頭刺物をさす此士の喉に鉛子あたりたるに頬當を掛ざるゆへ柔にして弱くあたりたるゆへゝ喉の皮に玉留り死脱るその鉛子後まで留りたるゝして有しとなり其鉛子年々に下へ下りたるとなり右のゆへに一生頬當を用ひぎとなり

○朝鮮之役滑正家來矢木八右衛門と云者晋州の城攻のとき具足の綿噛に矢を射付られ取て抜けれども矢柄計抜て根ゝ止りけれどもその場急なるゆへに其まゝ城へのり込さてその夜陣屋へ歸り矢の根を抜けれども肉に喰しめて抜ざるゆへ手負を足に蹈付けて矢の根を鉄鋏を以て漸々抜たりとなり或老功の者云しゝ矢根を當坐に抜ざるときゝ肉に食しめ不抜物といへり

○慶長五庚子年關原御一戦九月十五日其前日豊前に大御所ゝ赤坂へ御着陣被遊豊時分に石田三成方より島左近滿生備中大將にて杭瀬川をこへ刈田誘引をかけ其口中村一學陣取の際なり竹田五郎兵衛二千石取三間計の鳥毛の棒のさしものにて陣所の塀をはねこへ治部が勢

へかけ合三人鎗付くるを鉄炮にて打倒す竹田が討れしと見て中村が兵ども柵を蹈破り爭て掛出す野一色頼母金の三幣さしもの敗内匠推つゞきかゝるなり治部方にゝ水野庄次郎後号淺香左馬介林治部が使番伊前頼母などかれこれ五百余進みて備前勢にゝ明石掃部宇喜田家老一万石領す本多對馬守半助前頼母両大將ゝ稲葉助の丞不破内匠等八百餘出けり石田が物頭島左近滿生備中伏兵を木戸一色村の敗に伏置てひさしにより中村が勢是をしらぎ進み申さる處を打立射立たりと両方こたへ中村が内成合平左衛門一番やり仕りて討死仕りたり首ゝ猪尾甚太夫とり中村勢敗軍仕家老野一色頼母鳥毛二の圍子の馬印をとりて川の東におし立一足も引まじさて〳〵何も敗軍見苦しくと罵りける敗内匠六千石取その脇を引て通り内匠に何とて返し不申やと頼母言をかけ内匠ふり歸手負しゆへ返し不申と斷川を西へのり渡り服部小膳高屋九兵衛いづれも弓鉄砲のもの頭ともにて覺の兵にてあれども押立られて崩れ申す野一色頼母ゝ金の三幣のさしものにて馬をひき返し數度たゝかひしを治部少輔が内海北市郎右衛門鉄砲にて打申す頼母にあたり馬より落則討死その組子松村清助頼母が死體の綿噛をとりて引ぎり退きたりとも治部人數付立つるゆへ頼母表帶を切刀脇差ばかりとりて退申しあとにて頼母首ゝ富村と申兵とり申す治部方多勢追重るゆへ中村家八中村新介河毛新八同次郎原田梅津天野堀

口等二十八人討死仕り甘利左兵衛ハ川中にて立合防たゝかひ鎗手二ヶ所負退きかねしを石田が兵ども追付吉田左太夫返ゝ合追拂て甘利をしりぞけ中村並の陣ハ有馬玄蕃頭豐氏にて此合戰を見て有馬が兵ども、數十人柵をこへて進申稻次右近鳥毛半月さしもの岡本五郎右衛門具先に進て川をのり渡し治部方の勢中村敗軍を追來出合頭にいたし稻次右近馬を岸へのり上たりと金の制札の頭上立物の兜着て横山監物と名のりかゝり右近と互に馬上にてわたり合その、ち馬より下立組打になり右近下になり申を右近郎等岸又左衛門監物が鎧の綿噛とりて引かへせバ右近上になりあり監物若黨かけ付右近が兜の鍬にとり付引仰候を右近ふり放さんと頭とふる處へ右近が若黨かけ付監物郎等を切れバ右近が兜を放し援合防合申すしかる所へ堀尾信濃守忠氏の母衣の衆一人かけきたり敵味方をも辨へず右近が若黨を味方討にいたし首を取引返せりその内に右近ハ監物が首をとり立上り監物が若黨をも切ふせその首をとり二ッまで高名し若黨が首をバ鞍の鹽手に付監物首を奪付て手に提馬を靜々と歩せ中村が陣中を通りけるに見る人參ぬものハなし其場過て備前秀家の家老明石掃部三百余にて池尻より福田繩手へ廻りかゝり中村一學人數亂れを矢野助之進金の團の只一騎にて取て返し大勢の敵へ立向ふ林文太夫赤母衣金の桔梗笠の返し合傍輩の梅田大藏が深手負て退かねしを助退申す助の進屹と見付て梅田を助退けんより此大勢の敵を防べやと言葉をかけられ文太夫ハ梅田をすて、馬に聲をかけのり出し助の進も馬を蹈立二騎連て掛入と明石掃部蒲生備中が人數崩申なり両人勝に乘て追打す赤坂御本陣より大御所御遠見なされ大事の合戰を明日にかゝへ無益の軍いたし人數を損じ申す早々引揚げ連て戻れとと〳〵しく御腹立あり渡邊忠右衛門重綱金手桶さを遣されたれども敵味方くひとめわかれかぬ大御所殊の外御怒りなされ井伊直政兵部少輔猛々緋羽織金の蠅取の馬印本多内記忠朝雲守後に出を御さしそへなされ遣さる直政忠朝ハ中村の陣へ駈入早々引上申べき旨申渡すとき矢の助の進林文太夫敵を追立〳〵戰ふ直政のり付早々引上可しと下知いたされぬ助之進文太夫ふり返りこの所をバ此両人に御任せあれ兵部殿内記殿にハ有馬玄蕃手へ御下知あれと申し捨切かゝり遂に大垣方をきり崩し夫より敵味方入交りせり合たりこのとき治部少輔が兵水野庄次郎鼠の皮の羽織銀の大釣の立物の兜にてのり來り中村母衣のもの梅田大藏が手負て引兼しを首をとり大柿へのりかへり三成隅矢倉に居下へ參り水野庄次郎にて高名仕たるに付御勘當御免下されと呼る治部少輔いかにも心得たり高名も見屆たるに付先手を賴早々參引取くれよと申し又庄次郎ハ先手へ參るこの有馬玄蕃頭も田中兵部も中村一學を助て多勢にてかゝるゆへ秀家内稻葉助

之丞金切ささ治部が使番林半助乗り下り〳〵殿仕り明石掃部も堤を傳乗上馬に輪をかけ颯
さしもの仕り一旦村の敗の下にて中村勢有馬勢ひしと付處にて牧野傳藏が兵ども又備前勢少々蹈留
り丹羽道監と石黒藤兵衛立こたへたりかくて日も暮かゝり井伊直政幣をとりて中村有馬が
勢を引上て皈られ候

○上杉浪人門田造酒之丞ハ淺野采女正弾正次男左京大夫弟正則に奉公かの門田がものがたりに日本
條越前守重長ハ越後本條城主大剛一の大將上杉にてハ一二を論ぜる程の武勇なり永錄十一
年本條越前守逆心するにより輝虎直に出馬なり飼付川を阻て本條も出向ひ一戰あり輝虎先
手ハ上杉彌五郎義春二の先ハ直江山城守兼續三番ハ景勝十四歳鉄上野介栗林肥前守介ぞ
へあり四番は謙信旗本なり上杉彌五郎自身川へのり入られ故毛氈與十郎のり込一備一度に
のり入る本條重長人數も川へ打入れ川中にて鎗を合數刻たゝかひし所へ三の備景勝手脇へ
押込鎗を錫杖持して勝た〳〵と聲をかけ二千計兵黒ゝなりて川上に打入本條が前へ押廻
せしに付本條重長敗軍なり重長乘下り〳〵殿して退所へ上彌五郎乘付重長に組んと志
し申さる重長小高き所へ馬と乘上扇をひらさ彌五郎殿さすがにて見ごとなりけり去乍ら最
早御引とりあれ深入めされべ越度をとり給ふべしと云彌五郎本條ゝ組とならぜして引返す、

此本條ハ大力にて大勇度々の軍功數をしらぜ國境なるゆへ最上義光と取あひ庄内をすぎ半
切とり天正六年謙信逝去のとき景勝へ使を立上杉御家譜代の者にて輝虎公ひごろこそ御意
に違ひ弓矢にまかり成上杉御家恨無之故歸參仕度とて景勝へしたがひ上杉三郎方を攻
したがへ夫より今に恙なく奉公するなり

○丹羽五郎左衛門長重の咄に鴨野口にて我等も仕寄を付る景勝出て我らも仕寄を付申べし
先是なる流に橋を丈夫に懸より申付引込直江をはじめ手ぬるき人かなと思ふ氣色にて橋も
かけず景勝また出何とて橋ハかけぬぞと被申西條治部申ハ只今にても橋ハかけ申べしとて
即時にかけ申す景勝見て本の仕寄場をべさし置脇に土俵をおき鉄砲をかけて貝次第に土俵
をべ持参れと下知せられ大坂方始ハ用心しけるがこの体を見て上杉ハ軍のすべをしらぬか
はか〳〵敷ハあらじとて引入景勝衆も主の下知を受ぬ顔に景勝ハ敵の油斷を見すまし貝を
吹立と即時に本仕寄場へ土俵をひた〳〵と持寄仕寄を即時に付る前の土俵置たるハ仕寄道
になり明日大防方仕寄防出是を見て肝を消し興をさましける由

○櫛原の家人黒田彦左衛門と云兵なり大坂落城のとき五月七日赤母衣かけたる敵を突ふせ
のりかゝり首をとらんとせしを傍輩の三枝勘兵衛のり付て彦左衛門その首ハ相討ぞと云彦

左衛門ハうれを聞て首をも不取打捨てその身ハ鎗提先へゆく三枝これを見て又言葉をかけ彦左衛門相討ぞ〳〵と呼ハれども彌聞ぬふりに先へ通りまた敵を突倒能首とり初捨たるを〻三枝打とり偖遠劫ハ病死ゆへ餘林へ久世三四郎坂部三十郎を遣され今度手柄高名の御吟味あり三枝勘兵衛申すハ我ら取し首ハ黒田彦左衛門鎗付たる首にて相討ぞと呼かけたれ共其まゝ捨て通りしゆへひたと相打ぞと呼たれども聞付ぞ先へまいりしゆへあとにて此首を取しといふ三四郎三十郎かの黒田をよび是を聞〻中々不覺と答三枝ハ黒田に向ふてその方敵を鎗付しを見て相討と言葉をかくるにその方ハ其突伏たる敵をすて先へ通るよ付跡より相討ぞと四五度呼かけたれども見がへりもせぞ參るに付是非なく彼敵の首を取たりといふ彦左衛門ハ猶覺へぬと坐を立さりぬこの時両御所様上聞に達し御感淺からざりき

○淺野左衛門家人永田治兵衛ハ病者にてかけはしるを自由ならぞ若者ども内々ハあの病者にてハ何の役にも立べからぞとわらふ永田是を傳聞人足ハかと達者次第侍ハ剛の者のみ役に立無病又病者によるべからぞといふ樫井にて大坂方淡輪六郎兵衛を討取其首をもぎ付にして持參し病者に劣たる息災人と日來嘲たる人をわらひかへしたりといふ

○信玄豆州韮山へとりつめ燒働のとき韮山城の押へ山縣三郎兵衛をさしふさ給ふに城中より備を出し迫合ありその節山縣同心辻彌兵衛鎗下の高名して膝の口をのぶかに射られ其矢を不抜してとりたる首をもち來り大將の山縣前ゑ畏り居る山縣大に叱て味方の引とらざる前に戻りたるとて場を追立たり

○池田勝入公攝州花熊城を攻らるゝとき森寺清右衛門池田刑部先鋒なり八田八三右衛門豐後守父なり城の屏際に付て居たるに城兵突て出て寄手崩ける八田氏跡にのこり伏て敵引入んとそを付んと思ひ居るに先の方に森寺氏城屏の腕木にとり付ぶらさがりて鎗を持居たり古老の兵のするとなるゆへ能とならんと思ひ森寺氏より五六間もあとの方に同じく腕木にぶらさがり居るゑ城兵敵を追はらひ城に入るとき腕木にあるを不知して引入るを森寺氏腕木より飛下て鎗を取て敵を追かけ鎗を合せ一番の功となれり八田氏も同じく飛下り鎗取て敵を追廻二番の功となれりとなり

○輝政公武將の重寶とすべきハ領分の百姓と譜代の士と鷄と三品なりそれを加何と云ふに百姓ハ田畑を作りて我上下の諸卒をやしなふ是れ一ッの重寶なり譜代の士たとへ氣に不應して扶持を放すといへども敵國にて彼者を實に扶持放たると不思して間にも入るゝかと思ふて疑ふゆへに敵國に逗留するとあたハもして終にハ我國へ飯て我兵となるゆへこれ二

ッの寶なり又目に見ゆる相圖耳に聞ゆる相圖ハ敵の耳目にかゝることゝへにたやすく敵國にてなしがたし鷄鳴ハ誰もその相圖ぞと知らざるゆへに卽ち敵國の鷄鳴にて一番鳥にて人衆を起し二番鳥にて食し三番鳥にて打立など、相圖を究て敵もその相圖を知らざるの德ありこの三ッの重寶なり是を三の重寶と立しと宣ふなり

○小牧山御本陣に御旗御馬じるし或ハ張立或ハ隱し給ふ上方の勢旗に心つかゞ味方の人氣を敵に見せゞして長久手表へ悉く敵を釣出し敵に先手を捨させ旗本を討破る御備なり此合戰ハ公後々まで御自讚なり

○福島正則關が原の役のとき出陣の日往亡日なり或人諫に曰占之趣出て再無歸事と云へべ他の日に定められよといふ正則聞て實吉日なり我此度の戰功名第一と被言働を遂大國に被封て行か運尽なバ討死と思極たりしかれば何そ再びこの地に歸らんや日を替ると有べからゞとて出陣せられしが果して勳功拔群なるが故に勢備両刄五十二万石に被封たり

○同役正則尾越の渡を越て秀信の兵を追とき城兵一騎後れて引行所を正則の士吉村亦右衛門馬を馳て追之己に追付んとせしが幅二尺斗の溝にのりかゝりたり吉村が馬曲あり此所にいたり狂刎尻込して不進長尾平右衛門ハ遙あとより馳來りけるがかの溝を躍こしかの武者を討とれり戰場にてハ曲馬ハ專撰むべきさとなるを吉村心を用ると疎かゆへあたら高名を失へり

○同役岐阜落城のとき黑田肥前守長政藤堂和泉守高虎田中兵部大輔長胤生駒雅樂頭吉正幸山伊賀守等ハ城早く落ちし故手ゑ不合とを憤りさらべ大垣の城を責んとて進み行このとき石田三成浮田秀家島津義弘小西行長その勢二万計岐阜の落城せしとを不聞後援のため軍を發す呂久郷戶の邊にて行合ふ田中先登して三成が兵を討三成が先鋒敗したり義弘このとき三成へ軍使を遣して先陣少敗したれども後陣猶戰にあまりあり敵ハ勝を貪て部曲亂たり此虛にのりて横さまに突バ大利あらん疾く兵を進められよといへども三成不聽して岐阜已に陷りけれバ是を責たる勢續き可來今少し利有とも畢竟の勝にあらゞ巢穴をかたくして變を見ばやとて軍をかへすこのとき西黨大に敗して郷戶赤坂迄二里の間追討に逢者おびたゝし義弘の言に從て横につかば東黨の敗走必然たらん惜き圖を失へり

○同役長胤郷戶を渡らんとするとき中間の中ゑ水練をよくする者あり是をして瀨踏せしむ大雨の後水增りて淺瀨をしらゞ諸人渡り兼ける所へかの中間川へ飛入り或ハ浮或ハ沈て甚深しとみへけるが歸て淺かりしといふ長胤先に汝がわたりし体ハ深かりし体なるが今淺じ

と云へ加何と被尋けれバかの者答て淺き体を見ヘ他の備より先を爭ひ渡りなんわざと深き体を仕るといふ長胤則淺き通りを渡りて先登の功ありかの中間へ此功によりて郷戸三郎左衛門と号し士の列に入られけるが後に細川家につかへて病死せり

○同役源君赤坂に御着陣有浮田秀家勢劫より大垣の城にきたり三成に對し今日東國より上りたる諸軍の陣營を見るに營法不嚴軍令不整淺間おる体なりかれが敗隙に乘じ今夜軍を發し營を破らゞ必利あらんこれ彼が鋭氣を奪ひ味方の勇を益の謀ならんと勸けれども三成不果して止ぬ能圖をはづし利を見て不取數度也

○同役十五日の未明赤坂の惣勢關ケ原へ打出辰上刻内府公野上村西海道の南桃栗原と云山に御旗を立らる御旗本組段々の御備關ケ原町東の端まで十二町程あり御先へ則福島左衛門大夫同刑部少輔京極侍從藤堂佐渡守有馬玄番頭山内對馬守田中兵部少輔二番備黑田甲斐守竹中丹後守三番備下野守忠吉卿井伊兵部少輔本多中務太輔酒井左衛門公御馬先へ御小姓組段々の備五の字の御使番五色の御母衣組御馬じるし金銀の半月切さき金の扇子へ大久保彦左衛門御馬の先に進たり今日未明小雨降霧ふかく物色見へがたし漸巳の刻初に天明たり時に御旗本より武者二騎のり出し敵みかた備の虚實考へのり戻るこれ則曾部江

法齋森勘解由なり異本澤井左衛門奥平藤兵筑前中納言陣松尾山と内府公御旗本その間三十町に足らぬ石田三成陣と公の御旗本との間三十五町に敵方東軍の旗先を見かけて則藤小川を打こし小關村の西巽に向て段々に備しむ備前中納言大谷刑部少輔平塚因幡守戸田武藏守同内記等へ山中峠に人數を立しが引下し谷川を打こへ關ケ原の北の方へ押出し西の山を後にして足輕をかけ鉄砲を打立矢を發すこの手にあたる東方福島左衛門大夫同刑部少輔藤堂佐渡守黑田甲斐守京極侍從北の山より押下し靜にかゝり合戰敵身方ひしと、りむそび地煙を立攻たゝかふさる程に宇喜田秀家無二の西方太閤の御ときより五大老のその一人今日の長將なれへ八千の人數五千先手三千旗本よして福島先手へ平かゝりにかゝり面をふらぬ突立追くづし二の手より秀家麾配をふり正則とも又討とり天下の面目に備よと息をもつがぬ突かゝるときに正則下り立芝居におりしき鎗を持かへせものども敵へ前後一ッに成たりみかた勝べき圖こゝなり正則こゝにありと下知し給へバ福島勢守かへすと見る内に惣返しとかへし勇かゝる宇喜田勢を旗本ともに追くづすこのとき秀家千の備なりとも二の味方に用ひ玉へゞ勝軍なるべしと云りこの戰ひ半に名島秀秋そなへより大谷刑部備へつきかゝる則吉隆馬上に自害毛利秀元戰場にて東方へ返此色を見て諸手の敵崩色付しと云へり

○同役家康公牧方表に御旗を立られ今度討とり來る敵の首御實檢あり公甲冑を召援身の御長刀を持せられ牧方前野御牀几に御腰をかけられ御張肘にて大坂の方に向ハせられ御前に御旗七本金の扇子の御馬じるし御鉄炮百丁火なわに火付御弓百張矢をはげ御槍百本援身御右に井伊本多大久保酒井榊原御譜代の諸將伺公少し上りて秀忠公初奉り御一門方御左ハ池田三左衛門福島左衛門大夫その外今度忠節の大小名毛氈をしき張肘にて伺公す外様の大名ハ馬じるし立し所に具足櫃を引付々々伺公す扨諸の首曲物に入上を絹にて包みその絹べかり取て曲物の蓋を明て首を出さゆその次に桶に入たる首六ッ七ッおく其外誰々の手へ討とると鼻をかき並たり然るときに公さて首實檢あるべきやと池田福島両將へ上意御受にわ、御時宜く御座あさせられたく旨申上る其時立上り玉ひ長刀を御杖に御つきにて御張肘にて左の御脇を御眼じりにて上覽その時前後左右大小名一同に頭を地に付玉ふ各頭を上て張肘にて伺公御足拍子を左より御ふみさて右を御ふみ又左にて御蹈納なさせらる鯨波を曳々〳〵と長く御あげ諸軍一同におゝと聲を上げ奉るさて御長刀を御脇よりそと受取奉り秀忠公へ渡進上仕る秀忠公謹で御頂戴ありその、ち御長刀持人に御渡しさて御盃ありしとぞ

○瀧川左近將監一益武藏野合戰に擊負て退口に極暑の頃なれべ馬甚疲て遍身汗にひたれり川を乘渡すとき水を飼ものあり水を不飼ものあり水を飼ものゝ馬ハ十町斗りにて胄行仆れたれども不飼ものゝ馬ハ別條なかりしと也

○信州高遠の城に保科彈正廿七騎にて籠城のとき小笠原一万の人數を以て攻之このとき彈正鄕民を大勢かりて見せ勢となしそれよ旗を多くもたせて見せ旗とあし又山上に相圖の旗を置き敵の押來るとき半途よして相圖の旗を振て石弓をおとし敵の人數を去きりて終に廿七騎を以て勝利を得たり

○上杉景勝最上義元と合戰直江兼繼長谷堂口を引拂溝口左馬助勝路直江に向て曰く夜に入て人數引取なば大敗軍に成べく今夜わ堅固の地に陣取明朝引取玉へと申けれべ直江も尤と同じ一里計引取て小高き所の野山左り半道計り行く先ハ大山爰こそ能所なれとて陣を取夜の明るを待謙信家の軍法懸り引といふてだてにて引取しかば上杉の諸軍無恙米澤へぞ引取けるこの時の陣取直江下知にて山より半道前に陣取つゝ山へかゝらざるとを家康公後々まで御稱美ありけるとかや

○美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄砲迫合有けるに輝政公と西國方との迫合の間に數ありてそれへたよりて敵より鉄砲を放しかくるゆへに此數の敵を追はらひ此方へ取

て竹を切拂ひさいりなきやうにすると可なりとて山脇源太夫竹村伊豆八田豐後この三人の番頭に仰付られ三人とも に組鉄砲を連て出張し敵を追拂ひ敗を切はらひて三備とも に引退んとするとき敵陰留たるとき八田氏殿後にて追かくる敵を追拂ん と足輕に鉄砲を打そるゑ急なる場ゆへしか〳〵打がたしこのとき豐後長臣柏原李右衛門足輕の中にたしかなるもの三人をまねき鉄砲ゑ玉薬をつかせ追ひ來り敵中へ李右衛門とりかへ〳〵十四五程鉛子を放し馬上の敵三人程よあてそれまて辟易して敵引退たるとなり柏原も引退ときに右の玉薬を込たる足輕の居處を見るに砂の中をほりてその中に居て玉薬を込たるとなり穴をほりたる體を柏原い不見急なるときによく堀てはいりて玉薬を込たるとと笑たるとあり

○甲州家山形同心の士長坂重左衛門後に井伊家に仕へたるとき上泉義郷と武話ありしに重左衛門が曰惣じて戰場にてたがひに鋭將先に進て利ある戰地を取んと欲るとき我方に其地利の場をとりたるときい其場をとるや否や鋭卒に一放づゝきはひをとりて鉛子を放さそべし不然ときいたとへ能場をとりて勝を得たりといへども鋭將の功を先賞するとなし其場をとりたるまで也その場をとりたるまでなりその場をこの方へ取る也いなや鋭子を放するときい鋭將の功いちじるし此德を可考知となり

○輝政公關原合戰の前岐阜の城攻のとき合渡の川向に岐阜勢出て此方よりわたるを待かけたるに池田の御人數敵を見て進みかゝり切崩さんといさみけるを輝政公兵機をたくましくせんために押へてかゝらせたまいそ見つくろいせたまふに御貝吹貝吹右衛門武功ありたる者にて最早進み貝を吹可然と申上げ合渡の川へ三里だけふみこみ貝を水にて通しかゝり貝を大貝にて吹立ると池田の諸軍一同に川をわたりて其勢にて御勝利なり貝吹右衛門い武藤伊勢右衛門先祖なり貝吹右衛門中村勘齋門先祖なり中村源右衛など高祿の貝役あり輝政公右御合戰以後毎年元朝に表へ御出ありて始て御言をかけらるゝい貝吹右衛門なり表へ御出ふくゑもん目出度と吹右衛門へ御言をかけらるゝとき吹右衛門五百八十年御目出度ございまするとと御返答申上ると御吉例也右の合渡の合戰のときに吹たる大貝い大概長さ一尺五六寸計もありて息よわきもの吹るゝ貝にあらぜ一はいを吹たる福田市太夫若盛のときまでなり右の御合戰御勝利以後關が原御一戰東照君御利運にて輝政公段々數國を封せられ播磨備前淡路三ヶ國の大守となり百万石の俸祿を得玉ふゆへにこの大貝を指て三ヶ國百万石を吹出したる御貝とて寶器となりたるものなり

○朝鮮陣のとき甲冑兵器損壞軍難儀なりしに後々い銘々漆を以て背補せしとなり漆よて塗

て も風呂なきゆへに乾きとなりがたく難儀せしに作意なる人おりて塗物を置たる廻りに馬糞を集め置たれば一夜宛よ干たると也

○行軍のとき大將諸軍を巡り見玉ふと古法あり關が原合戰の行軍のとき池田輝政公諸卒の左の方をいたゝと乘出し先手まで乘行て先手の先にて馬を右の方へ折り諸卒の右の方を地道に乘て後陣まで順見ありたるとなり戻りに地道をのりたまふとい先手までのり行き給ふときい諸卒前へゆくゆへに早道にのらざるときい乘ぬけがたし先手の先までのりぬけ右の方へ折て押行く諸卒の右の方へ乘て戻り給ふときい地道にて靜かにのり戻りたまふといへども諸卒い先へゆくゆへに後陣まで地道にても間をとらぎして悉順見ありやすきを以ており

○大河をわたるときい馬武者を川上を渡させ川をきらせて川下を歩卒わたるときい大勢のいきはひにて馬筏にてわたるゆへに危きとなし武藏守利隆公諸卒天滿川をわたすとき右の如く川上を馬武者を一同にどつと川へ乘込でわたしその川下を歩卒わたりしに何の苦惱もなく悉渡せりとなり大勢の中只一騎しづみてさし物上へ浮てひら〳〵せしかども急なる場へ引上る人なく水に沒し死たり右の一騎溺れ死せしより外に末々まで一人も水に沒したるものなしとなり

○大坂夏陣五月七日天王寺口へ秀頼のひやうたんの御馬驗出かゝりたるとき關東方に秀頼の御馬出真田左衛門佐先手にて切かゝるといふ風説あるといあや關東方の惣軍なるのわかちもなく崩たち諸手悉く崩たるが追ふともなく大敗軍となり井伊家士小笠原傳兵衛三百嫡子と若黨と以上三人にて直孝の赤根の四半に金の井の字の馬印を捨て北たるを取て押立たるを見て總軍ともにやれ掃部頭殿の人勢が返したるいと言て銘々にとりて返し志づまりて終よ御勝利となりたるとなり小笠原後に加增にて取立られたるとなり右の敗軍のとき銘々にやれ返せ〳〵と云ながら北たるとなり何のわかちもなく北たるに何ともすべきやうなきものなりと義鄕の咄なり右の馬印を立るを見て惣軍かへしたるを見て破軍星の尾返が合たると云たるとなり

○信玄嫡子義信と不和のおこり川中島合戰のとき義信い旗本組の右備なり然るに夜中に諌信犀川をこへて近々と備へ無二の合戰を持てかゝられたるを見て旗本備へ義信をやり信玄いい義信の備へ處旗本組の右備に居られたるに諌信信玄の旗本備義信を切崩し義信も數ヶ所手を負れこゝに信玄居られざるゆへ信玄の居られたる右備へ切てかゝり信玄の床机居られ

たるを太刀にて切られたるを信玄團にて受られ側より中間頭原大隅鎗にてつきたるにつきはづし諏信の馬の三頭を招き馬走り出て退れたるゆへ討はづしたるとなり此合戰以後義信ハ强敵の諏信無二の戰を持れたるゆへ旗本備居てハその身の危きを以て常々不和なるを以て義信を旗本備へ床机をかへ捨殺しにせんとの工なると思ハれ父信玄をうらみ終に飯富兵部がそゝめによって反逆有て信玄怒り義信を切腹せしめられたりと上泉義鄉の咄なりとなり其證據にハ甲陽軍鑑にこの合戰に信玄の旗本備崩れ信玄ハ何所に御座なさるやら不知混亂したる所へ諏信太刀をぬき持て信玄の床机に居られたるを切られ信玄團をもつて受られたるとあるハ信玄と義信と床机をかへられたる證據みへたり法令嚴なる信玄旗本の備におゐて御座所しれざると云程のとハあるまじきなり

○大坂にて日本の諸士入交りて戰れたれども組打ハまれなり井伊家の士石川宗左衛門江坂清次郎兩人組打せり其首尾ハ城兵突て出たるとき城兵と石川と鎗を合せたるに相手の敵兵もやりにて仕合たるにいかゝしたりけんたがひに入くみ鎗をすて、太刀打になり敵石川が太刀を持たる掌をきり付け無名指小指を切おとせりゆへに太刀を捨て手と手ととり合組合たるに敵ハ痩弱の男石川ハ大兵にて腕先もありけるゆへに敵組伏たれども初に太刀にて右

の無名指と小指を切られたるゆへよ首を取べきやうなし我が方をみれば味方の兵江坂清次郎つゞきてひかへたるゆへ言かけて是首とれよといへば江坂ハ十七歳の若武者なるが他人の組伏たる敵の首を我等ハ取るときらひなりと答へたるとき石川右の手を見せて如此指を切られたるゆへ首を揚がたしと云たるを聞て其ま、敵の首を揚たるとなり井伊氏の本陣へ右の首を持參したるに江坂ハ元來石川が組伏たる首を揚たるゆへに中々我功にあらぞと有のま、云たるゆへに兩人とも御感にて同列に加增ありたるとなり

○大阪冬陣のとき井伊家の諸士眞田出丸の塀下につきたるとき堀際の柵をくゝりて堀際へ付たるに柵をくゝるとき刺物邪广になりたるゆへこれをぬき鎗に持そへて柵を通りしに上泉義鄉ハ指物をかつたりまで紫革よて結び付たるにとけかねてよほどためらひたるとき日頃心易出入して目をかけたる足輕の小頭何某義鄉のあとにつゞひて柵にのぞみたるに義鄉のさしもの留めのくゝりとけかけたるを見て義鄉の傍により治部左衛門樣此塀へさしつゞきたるぞと云て件の指もの留の緒をときてたれたるゆへ指ものをぬきて鎗に持そへ柵をくゝりて塀下へ着たるとなり是れ義鄉指もの留をせられたる證據なりその餘の諸士ハさしもの留をせざるにや早速にぬきて柵をくゝりたるとなり右の足輕小頭右の塀所へ出て

義郷のさしもの留の解ざるをときたるゝ其塊へつきたる證據として大阪の役終り治平になりたるとき加州へ三百石にて身上濟たるとなり

○大阪の役に木村長門守を井伊家へ擊とる首尾ゝ木村若江の村屋へ入て割合の飯を食し居るを井伊家の斥候般若内膳見て歸り先手の將庵原助右衛門へ告ぐ庵原鎗を取てかゝると木村も走出て鎗を合せ二間一尺五寸の直鎗その頃北國流と云てはやりたるに木村も免許を得たる功手なるゆへこの鎗を以て庵原が内胃を二三ヶ所も突たれども鎗の穂みじかく切突にてちよつ〳〵と突たるゆへ頬の邊にかそり手なるゆへ突ぬひて突たをすとあたゝを庵原ゝ一間半はどに身の七八寸程ある鎗をべつたりとはりのけて木村を鎗付て突仆したるにあとより井伊家の若士安藤長三郎來てこの首を揚んかといふ庵原揚よといふて安藤に首を揚させ木村が腰に指たる白熊の旄を引ちぎりて庵原が腰につけて引とりたるとなり此首議が首とも其とさゝ知ざれども白旄ゆへに大將分と見へたるゆへに後證のために庵原とりて腰に付たるとなり後に木村の首と知れたるゆへ安藤も元來庵原氏鎗付たれば首を揚たるまでと斷たれども庵原ゝ井伊家の老臣年七十有餘にて常に肱に珠數をかけて念佛のみ唱へたるに向來る敵ゆへにやむとを得ず念佛を唱なから敵の鎗をはねて鎗付たるゆへ己が功とせず若輩の士ゝ箇樣に名だかき士の首を取たるゝ功名も顯すゆへは强て安藤にゆづりたり故に首帳にゝ安藤が姓名を記し出して安藤が武功とし今に至て木村をば安藤が討とりたると天下に稱するゝ庵原武功にてをとあしき仕形ゆへとなり右上泉義郷の直談なり

○松平讃岐守殿の具足屋南都岩井孫四郎咄に曰南都知足院に塙の圖右衛門甥植村藤左衛門と云もの、所持せし頬當あり是則ち塙圖右衛門所用の頬當なりその製面頬に涎掛を不仕付惣地を薄赤く人の面の色の如くにぬり頤に鬚をはやしたるなり是甲冑を着し喉輪をかけ只行軍の行裝に喉輪の上に此面頬をかけんが爲に如此製したるおらんかとなり右の面頬ゝねり物に紀州雜賀孫一の作の由なり圖右衛門と舊友にて造與へしとなり其ころ孫一ゝ武功の士にて慶長五年伏見の城にて鳥井彦右衛門殿を打とりたる名士なり細工の名人にて殊に頬當の製形無類にて兩人の家にて名作と稱するとなり右の植村藤左衛門ゝ極貧の浪士にて南都知足院に緣有て知足院の住持二三代にもかゝり居て則知足院ゝて病死せしと也死後屍を沐浴せしむるとて裸體になして見るに右の方腰に下帶に金子十両付てあり此金子數年付置たりと見へて腰に此金子のあたりたる處くちて居たるとなり右の藤左衛門至極貧窮なりといへども具足一領鎗一本を放さずして所持せりとなり則右の具足の中に件の頬

雷も具し置けるとなり

○氏康公松山を攻るとき信玄に救を乞このとき甲劔の士米倉丹後が子彦十郎炮玉に中て死なんとす甘利左衛門が組なれば甘利米倉か陣屋に至て傷て見る手負の血胴より落て死なんとするに芋毛馬の糞を水に立て用べ必功有といふものあり米倉が僕おれを調じてすゝむ米倉不飲して曰これを飲で必可レ生か可レ死未知らぞ果て死せば不レ飲とも有らんたとへ生たりとも畜類の糞を飲で其恥を如何せんとて服せぞ甘利色を正して御邊の言曾て理なし命を保て忠をなし孝を行ふハ道の重きにあらぞや獸糞をのみたる恥ハ輕きにあらぞや小辱を不忍して大道捨るハ狂するに似たり是勇のみ有て智を不尽の失なりこの藥のみにくきともわらん我先へ試むべしとて二口三口呑て舌打して甚飲よしとて米倉にあたふ米倉理に伏し則服して快復することを得たり信玄聞て甘利を譽らるゝと甚し或人曰米倉終に糞汁をのまぞして死せば勇よのみ僻するもの是潔事よ思ひこの類の藥を忌嫌風俗となり後來幾人か横死せしも計べからぞ且陣中にてハ專ら如斯手輕き藥を以て珍とすべし

○佐野修理亮宗綱ハ下總唐澤に有足利の長尾但馬守顯長と郡邑を爭ふ或とき宗綱ハ岡崎山に陣し顯長ハ唯木山に屯す両山の間に小川ありこれを隔て日々足輕攻合のみよて未勝敗をわかたぞ時に顯長兵をかへす其体嚴肅なり宗綱も同師を引返んとす密に兵を分つて山間の樵路より兵をすゝめ大沼田といふ所に廻り顯長が前路に今出顯長これをしらぞ宗綱も陣拠して段々よ引行今ハ漸く遙に隔りまた後卷の恐なしと思用心の備稍怠諸勢の足を亂して引行宗綱ハ廻備の出合程を量り俄に旗を還し顯長追廻備の勢横合に出て顯長刀備を突ば顯長大に敗して追討に逢もの甚多し宗綱思まゝに利を得て唐澤にかへる

○畠山修理大夫義隆能登を領す毒害にあひ卒して後家臣遊佐彈正相井備中長對馬を始十一人その勢二千計七尾の城に籠り信長に從ふ上杉彌五郎義春ハ義隆の伯父也越後に有て此由を聞謙信に乞て七尾を攻おとし城兵を誅せり謙信義春が先登の功有を以て能登ハ代々畠山の領なり義春に預んとの内意あり能登の兵士これを聞て義春出生有らバ我々も同く世に出んと追々馳來ると夥し謙信柴山といふ所に陣し惣人數の押前を見んとて謙信ハ床几に腰をかけ義春ハ側に畏り居り能登先鋒の人數美々しき物具にて出來る謙信人を遣してこれを問彼勢上杉彌五郎が勢なりと答次に通るもその次に通るもみな彌五郎が勢なりと名乘夥しき多勢なり謙信氣色變じ暫して彌五郎にむかひ三好宋三ハ五畿内にて弓矢功者の名將なり宋三常に人數ハ難遣ものなり三百騎より上の勢ハ遣ハれぬものなりと度々云しと聞

けりと言てふたゝび詞なし謙信死去までも彌五郎をにらまれ斟當同前にて能登も興へぞして止みぬ彌五郎後昌山入道と号ぞ

○佐久間河内守實政物がたりに大坂御陣のとき鳴野合戰のとき小栗亦市吉忠と我と兩人撿使に仰付らる但し十一月廿五日に兩人鳴野へまいり明日今福口の柵をいたすべく旨佐竹義宣仰付られ屋代越中守伊東右馬允安藤治右衛門遣さる景勝も明日鳴野口の柵をとり申さるべく旨仰出さる直江山城守兼續申すにゝ一昨日奥州より到着仕るゆへ人馬の足を休め其上のことに仕度と申佐久間小栗申すゝ謙信以來着陣そのまゝにも御一戰と承り及ぶ山城いなとを申されたると斷りけれゞ直江上意重く明日とりつめ申べく旨御請申上げ廿六日早天より景勝人數を出されたり城方の柵ゝ井上五郎右衛門渡邊内藏介幷大野修理亮治長手のもの加り山市左衛門尉吉正小早川左衛門岡村椿之助竹田兵庫其子大助二千余にて柵三重をり持固め前の夜景勝ゝ直江山城を呼備組をとわる直江申すゝ老功なるゆへ安田上総介を先手に申付二の先ゝ須田大炊に申付られよとこたふ景勝それゝあしき配立なり二の目功者にてなけれゞ軍勝はなし須田を先手に安田を二の先に立べしと宥に付直江備をくりかへ申すれにより須田備ゝ競て二の先の安田手より手柄して見せんと勇みけり安田備ゝ先手を二の先にくりかへられ口惜存先手崩よかし二の手にてもり返し一手柄せんとはげむ〻へ兩備の士卒中々勇氣十倍よなる景勝勇才凡人の及ぶ所にあらすと感狀ありさて廿六日曙に大坂方へ取かゝり山市左兵衛大將にて鉄砲大將井上五郎右衛門等柵の外へ出て防戰ひ須田大炊先手にて景勝勢真先にかゝり勝負數度有り上杉方多功豐後守手柄高名なり北條清右衛門上泉主水櫻田嶽大股八左衛門同彦六郎手柄をふるひ討死す須田大炊下知して遂に打勝大坂方井上五郎右衛門を討りと柵二重をとり押込申す大坂方山市左兵衛渡邊内藏介敗軍その場をとり敷り景勝ゝ鳴野の横堤に旗本を立直江山城守に申付鉄孫左衛門に鉄砲三百挺遣し物場よりはる〻〻南大和川の堤をはりきり蘆谷に足輕を立取固む上杉衆申すゝ小口といはる〻脇をとり固めると不合点なる手配とつぶやき申すその日午刻に大坂七組寺木民部少輔一之伊真丹後守長實速水甲斐守守之中島式部少輔氏種野々村伊豫守雅春真野豐後守頼包堀田圖書助勝嘉その時ゝ天滿口普請場にありしが鳴野今福兩口破れし由承り天滿より鳴野へかけ付たり城よりゝ大野修理亮治長木村主計頭宗重渡邊内藏助紀竹田永翁等かけ出上杉先手須田大炊介長義ゝ石坂新左衛門百人鉄炮にて備一の木戸口をかためを打立半時ばかりせり合たれども大阪方大軍ゆへ真黒にかゝり上杉方鉄炮大將石坂新左衛門場をさらぞ討死組勢

廿餘人討れ須田大炊頭立ちければ二の先安田上総介兼て備を脇へ押出すゆへ須田備ハ景勝旗本前へくづれ此とき上杉方島津玄蕃ハ敵大勢にもたり合沼の中へ突落され起上り鎗を合せ入防方をつきちらし手柄仕り高名松本助兵衛北村茂助もさんぐにたゝかひ両人ともに高名仕り候市川左衛門針生市之助原庄兵衛駒澤與五郎をはじめ上杉家究竟の兵枕をならべ討死仕る須田大炊備はくれかゝりしに景勝旗本前備ハ相原常陸介親憲鉄炮三段に立金の鎌の馬印をとりて御意にて須田人數両方へわかれ退かれよと呼馬印をふりたれば須田備両方へ引とり杉原下知して追ひきたる敵を引うけ鉄炮をうち立候所を二の鼎にて脇へ扣へ安田上総介さいをとりて横合にやりを入れしゆへ大阪方物敗軍になりたり安田が手柄中々耳目を驚かし候大阪方杉森市兵衛湯川次兵衛山邊八左衛門幡枝湖解由米村加々右衛門平山藤藏茨木五左衛門安宅源八等返し合へども安田上総急よ繰出すゆへ大阪方くづれ安田勝に乗て小早川左兵衛岡村椿之助竹田兵庫同大助を初め追討にうちとるその内穴澤主殿介ハ長刀の名師にて秀頼公の師匠にて高所に返し合穴澤主殿介盛秀と名のりしを上杉方坂田采女組打に仕り穴澤が首をとり穴澤長刀を直江家へ折下外記分取に仕りて上杉先手の大將須田大炊見へ申さぬ行衛不知ゆへ討死と存ぜる所に敵中に交り大炊手柄なる太刀打直取の高名三つ手疵一ヶ所蒙り若黨五人ながら高名して出來るゆへ扨柵際にて大阪方と上杉方鉄炮軍時をうつす此とき今福口へも木村長門守重成後藤又兵衛年房堀田圖書介勝嘉出て一戰佐竹義宣先手澁江内膳討死梅津半右衛門戸村十太夫鎗を合手負引退く加勢を乞し故杉原常陸百五十挺の種ヶ島を添てさし遣川の中洲より打立木村長門守後藤又兵衛引退く佐竹その場をとり返すそれより杉原も須田安田に加ハり鉄砲軍數刻に及び御旗本より五の字御使番追々に參り堀尾山城守忠晴を御入替有べく問景勝ハ元の陣へ引とり申べき旨頻に仰遣され堀尾山城守へも早々景勝に可入替旨仰付らる忠晴畏て堀尾河内同修理前田丹後二百余遣したれども城方より大筒を打ち出すゆへ堀尾八數進まぬ忠晴より重て伊賀衆手負八十人遣しける御使番重々堀尾に場を渡すべしと仰遣され景勝不興して場をわたし引取べしとハ誰の差圖にて更に承り屈ぬ上の御意にても罷りならぬ軍の習先陣を爭ふ時ハ一寸増と承り今朝より粉骨してとり敗場を人にわたし引取法や有べき少も引取と罷ならぬ由景勝が申と上へ仰上られよと云て少も不退候朝より景勝ハ鎧も不着床几に腰をかけ城に向て脇目もふらぬ馬廻り三百余鎗立頭を傾け畏れ居て先手の合戰見物なり景勝ハ側にハ紺地日の丸大四半と毘の字の大四半只二本に淺黄の扇の馬印押立その武者立行義の正しさと中々言語同斷な

り士卒景勝を恐るゝと敵よりも甚し下知の聞こと武者拵へ比類なきとどもなり此とき丹羽五郎左衛門長重い上杉後にて陣とり先手の戰を見て景勝旗本へ参られたりとも上杉家作法にて備の中へ不入先手へ馳加り申され大坂方次第にかさみしとき直江下知して大和川堤芦谷の柵塲より鉄孫左衛門鉄炮を横合より迂替々々うたせたるに付大坂方柵を持て不叶遂に敗軍してその塲をとりしき景勝の勝になりたり堀尾人數も柵を廻り大和川洲崎より鉄炮をうち込み遂に大坂方敗軍景勝の勝になり申ゆへ諸人景勝の勇智淺からざるを感じて名將なりと舌をふるひつる

○關が原御陣前々福島正則池田輝政外大名十二頭にて岐阜の城を攻る黒田長政田中兵部少輔藤堂高虎桑山伊賀守戸川肥後守い大山押に居る岐阜を攻る最中に大山の城明のきたるゑ付長政高虎何も岐阜へ推つめし内岐阜落城に長政高虎等殘念に思る所へ岐阜後詰として大垣より石田三成島津義弘小西行長二万餘にて江土川迄押來長政吉政高虎桑山土川等幸と悦江戸川へ馳向ひ大垣勢漫々と川向に備へたるに八月雨の洪水增て瀬枕打て流れ早く水事々出る何れも香が島村の札の辻に集り五人の大將い床几に腰をかけ居る家老功者どもを集て談合をする川をこへて合戰利あるべきか又てさすにして利有べきか勝負の所談合にとさを移

をされども一決せざるときに後藤又兵衛政次頭形の甲ゑ孔雀の引廻しに五尺づゝ出たる銀の天衛のつり立物し黒母衣かけたるが遠々に畏居る高虎申されけるいあれに罷ある銀の天衛い黒田殿御内後藤又兵衛とみへたり呼寄かれが了簡を尋聞んとゆり長政の日皆歴々寄て埒あかざる談合を何とて又兵衛了簡仕べきやと謙退なり高虎左樣にてこれなく又兵衛いこびたるとを申者にい無之とて扇にて召れしかば又兵衛黒母衣ゆりかけ參る藤堂申されけるいいかに又兵衛此川を渡して利有べきか川を前に當渡らぎして利あるべきか先程より相談極まらぎ汝が了簡を尋る所なり川を渡しはたさぎ勝負いかんと有又兵衛につこと笑ひ先程よんあれにて承り申す憚ながら各樣こゝい御相談所とい不存その子細い今畫おそくて岐阜の手い御あひ不被成何を以て内府へ仰立られに成されんや爰にて御一戰なされぎべ恐なから各樣男と成申まじく勝にも負にもかまいぎのりこへ一戰遊され此川を墓所になさるべくと眼に角を立申せば諸大將手を打てさて〳〵尤至極なりとかくいふにおよばぎとて江土川をこへ大利を得られたるとなり大坂表今禍合戰にも又兵衛鉄砲にあたり疵をさぐり見て大坂も御運もまだ強さぞ我手淺しと云たりとぞ

○關が原御陣のはじめ慶長五年七月家康公秀忠公數万にて會津へ御發向なさたりこれい

景勝上洛いたされ仙香椎原に新城をとり立諸浪人を集め道橋を修理し籠城の用意と聞し召御退治のため此の如し景勝大に驚き香椎が原新城へ直江山城守上意得て公儀濟たる上なり又在國へ秀吉公御在世の砌り五年在國の御いとま濟たる所なり然ども押付て御征伐も有れば弓矢とる身のならひ一矢仕るべしとて百三十万石の諸侍のこらず呼集め洞菩提所雲洞院と謙信御影堂毘沙門堂に於て一紙の起請文を書せ妻子を會津の城へ籠口々に燒草を迄をき景勝へ家老物頭をあつめ會津へ七口あり殊に背炙南山口へ會津を見下し中々籠城ある所にてなし家康公御父子白川口に着陣あれば逆寄に仕かけ野合の一戰をとげて勝あとを追て江戸へ扨おき都迄切て登るべし負候へゞ士卒もろとも白川を枕にして討死仕るべく下野と奥州の境白坂より白川まで二里の間草籠が原と云所ありよき戰場なれば竹木を切かけ地形をきり平げ白石城を大手の一の木戸とし一番合戰へ安田上總介一万三千余二番合戰へ島津月下齋二万七千余白川の城に籠り家康公御父子御着陣あれば草籠村へ押出し一戰し若勝ぞべ白川の城へ引こもり四方の人數同枕に討死を可遂とさだめ家康公を待うけたり景勝只一騎背炙南山口の嶺にのぼり長沼の地形を見て夫より樵夫を案内者にして山中を通り白川口境の明神にいたり人數押の道を見積り密に了簡を定め家康公白川の城を攻られしを長沼より

兼て見置山中を人數を引つれ境の明神にいたり家康公陣取の後へ出旗本へ切てかゝり手詰の勝負を可決とつもり置く然るに上杉家中にたれも知ものなし近日家康公御着陣御先手柳原式部大輔康政すでに大田原に着大田原は白川より一日路なり景勝これを聞て八千余を召つれひそかに會津を出南山背炙をこへ此山を背に當て長沼陣取家康公白川表へ御着御一戰あれば山中を推着思ひもよらぬ後へ廻り家康公御旗本へ切てかゝり申べき覺悟にて陣どり八千はあまり小勢ありと家老ども異見仕りたれども謙信已來の吉例とて承引無之直江齋藤千坂等申すにハ謙信公御代の古兵ども過半死失なれども人數八千ハいかゞなやと申す景勝へ勝利を得ば八千に不過されども皆々申所余義なしとて許容有是により千坂齋藤新津三室寺等三万にて長沼へゆきたれども景勝さしづにて三里あとに陣をとり若し家康公白川へ御着陣あれば御大事に罷なるべく所に上方にて治部少輔をハじめ五畿内西國一圓に亂れ伏見へとりかゝる由家康公小山より江戸へ御歸城なされたるゆへ景勝手立相違仕り若白川城御攻なされたりなば景勝八千にて後より不意に押かけはとんぞ御一代乃御大事たるべきにとかく御運つよき御大將とその以後とり沙汰仕り候右の通りゆへ景勝も會津へ引入申されけり

○秀吉尾張に發して信雄源君を征せんとす先泉州岸和田の城中村式部少輔一氏を籠置紀州の根來雜賀の一揆を押しむ信雄密に根來雜賀の一揆をすゝめて秀吉大坂を發せゞ必その跡を責て秀吉の巢穴を破れといはせられゞ一揆等同意して天正十二年三月十八日二万計海陸に分て堺の浦へ働出て大坂の空虛を襲んとす一氏下知して大敵なり容易に戰ハゞ尾張也の御戰に害あるべしとて一人も不出泉州の國侍に眞鍋五郎右衛門貞成此時号矢郎俊成号主馬大夫十七歳一氏從て城中に有しが一氏に乞て一揆船手を働と見へ某在所大津に家人の妻子を差置たれば糸て片付ゞやと申けれゞ一氏尤なりとて許之眞鍋手勢百卅餘にて大津にかへれゞ舟手の一揆大津を差て押來る大津の混亂不斜留守にのこりたるものども昔小城の有し跡も妻子を連行戸板疊などにてかこふ所へ眞鍋出來れゞ少は安心すといへども一揆ハ千余騎味方ハ百余對當すべきにあらざれゞ士卒危み恐れて敗走の機有眞鍋が與力に秋山亦之丞と号する大剛の勇士有其己前一日に鎗を七度合たる程の覺の者なり眞鍋に向てかやうなる時節が肝要なり大將の心うろたへる時ハ士卒役に不立ものなりよく〳〵合点ありて下知せられよと云眞鍋その仕形ハ如何秋山が曰今の仕形三ッ有第一ハ妻子を古城へとり籠め城に據て戰ふか第二は妻子を堺の津へ退けて我々ハ眞丸になり囲をつき破り岸和田へ駈入か第三ハ妻子を連て堺の津へ退くか此三ッより外なしと云眞鍋盃の緒をしながら三ッの謀上中下ハ如何秋山が曰その一ハ上其二ハ中第三ハ下なり眞鍋しからゞ妻子もろとも古城に據て戰ふ謀を用ひん秋山聞て左あらゞ一人ものこらず撃死すべし不苦や眞鍋が足をふみ刀を抜て金打し愛宕八幡こゝにて討死すべきぞと言て思切たる有さまなり士卒是に屬まされて必死を思定めたる体なり眞鍋海上を見やれゞ敵舟已に近付けり敵ハ十倍の勢なり取卷れてハ叶まじ迎戰てこそとて濱手に出て備を設く田賀井別齋秋山亦之丞下知して敵の舟より半上る所を鉄砲を打立さすれハ敵兵打挫がれてかゝりかねたる隙を眞鍋白旗を振て先隊八十余騎小松原より突かゝり眞鍋か兵田賀井左吉右衛門一番鎗合一揆を追立る惣軍亂討て一揆を海へ追浸て討取數多しやう〳〵返し來る敵をゞ眞鍋が兵波防の芝手に弓鉄砲を伏て打立々々防けれゞ敵舟さん〳〵に亂て遙の沖に引退きあへて可寄氣色もなし一氏ハ眞鍋が働如何と思ひ蜂須賀小六家政後阿波守蓬庵と稱す に二千餘騎差そへて迎に遣しけれゞ眞鍋ハ思ふまゝに勝利を得て妻子を引つれ蜂須賀と打つれて岸の和田にかくる

○豐臣秀吉ハ智謀のみにあらず天運に乘じたる人なり織田信孝岐阜の城に據て秀吉を拒むの之巢田勝家と約して秀吉岐阜を責ゞ我柳瀨より出て秀吉を挾討んと謀る處なり秀吉これを

しらぎ已に岐阜を囲んとそる前夜甚雨有て呂久江土の河水激浪沿々たれば渉々とあたいぎ川の此方に陣す勝家柳瀬に出づれば秀吉岐阜をすて、柳瀬に向ふ洪水の故に信孝尾撃すると不能勝家の謀い却て不意に遇ふ端となり又甚雨洪水い秀吉をすくへるにあらぎや後小田原の城を囲とき城南の海上い海賊九鬼大隅守をして兵船をのり廻し囲の手を合せしむ攻城の間五十余日一日も東風なし若東風あれべ舟を置と成がたき處なり其後小田原の海上東風なき日い上様日和と云ならいせり

○源君あるときの戦に久世三四郎坂部三十郎を遣し敵合の様子を被仰見両士御前を立ときに坂部い顔色勇進みたる体にて退出す久世い顔色不快その品悪し御前に居られたる小姓の中に久世の体を笑ふ人あり源君御扈従の方に向わせ玉ひ坂部い生得の剛者なり此故に敵を何とも不思して心に勞するとあし久世い生得坂部に不及然れども勤勵て武勇を働かんと思ふ故少も様子二方ならば生て有まじと覺悟するゆへ心に勞あり今見よ久世い坂部より二三町もふかく働能見届て可歸ぞと仰らる無程両人歸來坂部より久世四町計先達て能見届て敵のやうそを申上る源君その、ち右の両士を評して久世い心に剛なきを知て生得の剛有ものに不劣と賞むゆへその働一際躍しめたる處有て奥ふかし敵が武功いいつとても成易きものと覺たれべ怠意ありて不錬處ありと仰らる品替りたれども是に同しきもの有觀世左近い謡に名を得たるものにて剃髪して安休と号す人に語て謡に三病有聲の能と覺のよきと拍子の能きゝたると此三事備るもの多くい謡に不成して止むこれ器用をたのむものい自滅りとす此をもつて工風不積功勞を不重い諸藝の奥意を知らざるといへり

○秀吉黒田如水をして豊前國に封せらる日隈の城に一揆あり如水の嗣子甲斐守長政兵と發して攻亡しその外所々の戦に利を得て武威廣大なり然れども紀伊谷の紀伊彌三郎鉾房のみ不從その勇畧逞きと等倫する人なし長政是を攻んと望まれとも如水不許之長政本意なきとに思ひ如水に忍び密に紀伊谷へ取懸りて責之紀伊が兵勢盛んにして長政の士大に破れて討るゝもの數を不知長政馬を深田へ乗落して鞍爪まで泥に沈みてせんかたなし長政が馬い大竜寺と て九州一の名馬なり長政今この馬を捨べ敵に奪いるゝことを口惜く思ひ捨棄たる所へ菅和泉守政利見て我馬を長政に進めて行歩立ゝ成て引んとす長政菅が馬にのり大竜寺を敵に奪はれなべ甚恥辱なりと引上て來れとて退かる菅い跡にのこりてさまゝとすれども大尺なる馬の深泥に沒しぬれべ如何ともなしがたし菅今いせん方なく片々の鎧をはづし持かへり隨分と存秘術を尽したれども七八人の力ならでい難揚ゆへ鎧を片々取歸たりと

黒田長政が馬を深田へ踏み落したる菅和泉守引き揚げんとする圖

て出しければ長政能計ひぬとて感ぜらたり如此證おきときゝ敵にうばひ取られたること人の疑を得るものなればかく計ひて虚説の譏なからんが爲あり

○赤井悪右衛門ハ本小身の士たりしが武略を以て漸〳〵盛になりてのち丹波半國を領す但馬比賀美に一將有二万石ばかり驍勇にして然も要害の地を前に當て拒ければ赤井攻れども利あらぜ赤井方への兵書を讀に地を攻て人を攻ぜと云語あり是に心を得て彼勇將を要害の地よりおびき出し一戰に大勝して其首を斬その地を取る

○大坂夏御陣五月五日のあさ眞田左衛門佐幸村が物見馳歸りて旗三四十本人衆二三万計國府越より此方へ越來りたりと告是伊達陸奥守政宗の軍兵なり眞田が士卒すはや此陣を押出し玉ふかと勇む氣色なりされども障子に靠片膝を立て居たりしが靜に答て左あらんと斗にて外よ言ばを出さぜ午の刻計また物見馳來り今朝のときとハ旗色かハり人數二万斗松かげ故不分明なれ共竜田越を押下りたりと告是松平上總守忠輝なり幸村虚眠して居けるが目を開きよし〳〵如何程もこさせよ一所よ集て討とらべ心地よからんものをとて是に取合ぬ有さまなりければ皆早りたる心も稍靜りぬ是大敵を不令恐味方を驚がしめざるとのことなるべし夕炊終てのち此備所ハ戰に便なしいざ敵近く寄らんとて一万五千余正奇を不亂前後を

不混騎歩次第をと、のへ押出せば敵假令十倍なりとも恐るゝに不足と思ハれける其夜道明寺表に陣をとり明れば六日の早旦野村邊に至り渡邊内藏助紀ハ幸村よ先達て水野日向守勝成とた、かふ紀ハ勝成を切靡けると五六十歩勝成又守返て紀を衝退る互に刀鬪三度に及で紀ハ深手を蒙り脇に備を引取そなへを立直し幸村へ使を以て只今の迫合に疵を蒙し故御人數駈引の妨と存脇に引取り且横を討んとする勢を見せなば味方の一助たらんかと申遣す幸村御働目を驚せり是より我等受取申と答ふ備を進むれば政宗の多勢蒐りきたる野の地形前後ハ岡よて上平なり中間十丁ばかりひきくして道左右田疇に連れり幸村己に兵を前んとするとき令を下して胄た着せぜ鎗を取せぜ馬の傍にひき添せて下知せんときを待せたり敵合十町斗になりければ幸村使番を以て胄と着せよと云爰に於て皆持せ置たる胄を取て打着忍の緒をしめたりければ勇勢新に加り兵氣まそ〳〵盛なり敵合已に一町斗よならんと思ふとき幸村又使番を以て鎗を取れといふ諸士手々に鎗を取て穂先を敵方に差向たれば面々いかなる堅陣剛敵なりとも打崩かんと別に魂を入たるがごとし此とき幸村が先手半過岡の上に押上たる處に政宗の騎馬鉄炮八百挺を先手より一二町も前で一同に打立たるに鉛子の飛ハ加霰火藥光電に似あり煙ハ忽雲霞となりて丈尺の間も見へわかず幸

村先手の士混々と打倒れて死傷するもの多かりしかども一足も退心のなかしが冑を着鎗を取たる氣勢の壯なるが故なり幸村煙の中より先手に爰をこらへよ大事の場ぞ片足も引ば全く可沒と下知する聲耳に徹し鎗の柄をにぎり平伏になりてこたへたり幸村下知して炮聲の絶間に十四五間ほどづゝ走行居數炮聲の絶間にまた如斯すこのとき幸村が鎗さきより一尺進みたるものあらば今日第一の功とせんと言しに一人も此先に出るものあし政宗の騎馬鉄砲といふゝ伊達家の士の二男三男壯力のものを擇て本より仙臺ゝ馬所なり駿足を勝りのせ奥州にて所々の戰に馬上より鉄砲一放と定て打するに不中玉ゝ稀なり打立られて備亂るゝ處を煙の下より直に乘込で駈散すに馬蹄に蹂躙せられて敵敗潰せぞと云となく此ときも消滅くなれゞ幸村此しゑ合をや計けん大音上再拜を振て蒐れと言ふ言の下よりみな起立て直に突かゝり政宗の先手七八町追崩せり水野日向守勝成政宗をすゝんで復戰ゝしむ政宗我軍さ勞れたり戰今日に限るべからぞとて不從勝成また忠輝を勇れども不果勝成ゝ小勢なれゞ獨たゝかうと不能して止ぬ幸村未の刻迄合戰を待居たりしが夫より繰引に引とれり其体嘉然として追討と不能慕ゝ却て爲彼ゝ可被敗挫東軍の諸隊見るもの感賞せり

○同冬陣に越前黄門忠直の手の仕寄を付に夜に入て長竹を以て付寄るに城中より鉄砲高く打出して士卒一人も不傷是石川數馬がはかる處なり或老士これをきゝて城中の鉄砲ゝ豐能々ため込土俵を以て究之ときゝ闇夜といへども外るゝと不多ものなり城兵これを不知して石川が名をなせるものなりと云さ

○信玄の士小幡豐後何の戰にか敵地にて物見に出たりしが歸路を敵に取切られたり豐後猶部に敵合の樣子を見終り歸らんとするとき敵兵追之豐後初通たる道より逆脇に在し池へのり込馳歸て敵の虛在と申せゞ信玄則兵を前て利を得られたり伊達政宗の士茂庭周防或ときゝ物見に出て伏兵に圍まれて討死す不逃走ゝ茂庭が勇なりと譽るものあり或人聞て物見ゝ敵を見て引取とおそるゝにあらぞ斥候ゝ軍の勝敗の掛る重任也これを譽るゝその道を不解が故なりと云々

○松倉長門守勝家ゝ島原肥前の國則の賊のとに依て身上滅亡せり勝家の士飯村助兵衛と云もの涙々して藝州廣島松平安芸守光晟の城下に來る廣島の諸士島原のとを尋聞く或ときゝ天野半之助飯村さ城中より長州の手へ夜討ゝなかりしやと問飯村答てその儀なり松倉家ゝその備尤嚴にして雲火を投外聞を出し夜打などゝ思ひよらぞと云天野笑て長州の家も末

になりてとの意を解する人なかりしにや古老の士あらべ左ゝ在まじ夜討のかゝるやうにしてこそ大利ゝ有べけれと云へり天野ゝ始源君の御扈從なり中根左源太と号そ傍輩の士と口論して出奔し後大坂の役道明寺口にて松倉豐後守重正に属し働功有けれべ御褒氣を許され浅野但馬守長盛に仕祿二千石光盛の代迄奉仕せり

○同陣二月廿一日夜城中より黒田右衛門佐忠之鍋島信茂寺澤兵庫頭の三手へ夜討す寄手數翌討死し鍋島の手を竹束井樓をやき拂ひ賊の勢甚強しと注進有ければ江戸御城へ尾州紀州水戸の三家其外在府の諸將を召れけれべみなこれを聞て驚色あり紀伊亞相頼宣卿のみ近日落城すべし鍋島家の井樓に火をかけし樣子城中知畧のたけ去れたり心を勞そるゑ不足久からぢして吉左右あらんと仰られけるが程なく落城の告有しかべ人皆頼宣卿の明察を感しけり

○寛永十四年肥州島原の賊おこりしとき寺澤兵庫頭の士賊と河内浦にたゝかふ寺澤家の鉄炮の將足輕を下知し搏そるにたちながら合搏ゆへ悉く北走す偶搏放せども敵を恐れて面を上ぢ俯搏ゆへ鉛子ゝ虚空にとんで賊に不中並河九兵衛ゝ足輕を下敷せ膝架にて打せしゆへ一人も不得退隊不亂俯て放せども鉛子不高して他の足輕の搏しゝ異なりこれ定がたき法にして左のみ奇策といふにあらぢ大阪落城元和元年よりこのとき迄年月相去ること廿三年の間そら武事に疎かりしと如此況や泰平已に百有余年常ゑ是を論じ是を習とも或ゝ其傳亡其理を達へて未迷ひなきと不能必しもゆるかせにそべからぢ

○同賊有馬の城に據り諸將圍責るとき賊強して寄手利あらぢ上使板倉内膳正討死のゝち松平伊豆守信綱の下知として責を止め竹束を付寄圍と數重只かれが變を待て不戰伴助右衛門と号する浪士黒田右衛門佐忠之の備を借て居たりしか永陣の間諸人氣力つかれ勇氣も脱怠す伴ゝ晝夜物具を不脱冑を枕として臥ける程に相陣の者目悟しきとに唱へながら今此大軍に被圍竹束鹿垣の内に込られたる賊徒多く切たり共物具を着そる隙おき軍やあるべき余り心がけすぎて精根つきなば城中糧尽て死狂の軍にゝ何の用にも立べからぢと云合り翌年二月廿一日の夜賊黒田の手へ夜討す一揆の勢千百人芦塚忠兵衛布津村代右衛門大將分にて押寄たり何れの陣も思ひよらぢ周章不斜上を下へ混亂す伴ゝもとより甲冑を着し鎗を放さぢ有ければ一番ゑ走り出竹束を破り押入敵を突伏々々二人討とり此とき未だ味かた一人も來らぢ賊柵越に伴が右の腰車をつく其鎗を握て引取し所ゑ又一人伴が左の股を突く是をも奪ひとり鎗二本なぞら得たりしかども腰の疵痛手にて立揚ると叫ゝぢ既に討たるべき處ゑ

黒田家の老臣黒田監物が人數進み來て敵を追はらふ間に伴が僕屑にかけて小屋にかへる同廿八日落城に〻件の疵を痛て手に不合後平愈せしかば忠之伴に祿八百石與へらる

○攝津半國の主松山新介が勇將中村新兵衛度々の手柄を顯しけれべ時の人是を鎗中村と号して武者の棟梁とす服折〻猛々緋冑〻唐冠金纓なり敵これを見てすゝや例の猛々緋よ唐冠よとて未戰〻ざる先に敗して敢てむかひちかづくものなし或人强て所望して中村與之その後戰場にのぞみ敵中村が服折と盔とを不見故に競ひかゝりて切崩す中村戈を振て敵をころそと許多なれども中村を知されば敵恐れず中村つひに戰沒そ依之曰敵を殺の多を以て勝に非ず威を輝かして氣を奪勢を撓すの理を曉るべし

○大阪冬陣に松平武藏守利隆〻神崎に軍し弟左衛門督忠繼〻尼崎に軍す忠繼人乘推出し矢野兵庫佐分利九之亟を物見として蜆江の地形を覘しむ二士皈て両方沼にて前狹く末廣く身方の爲に〻利鮮く敵の爲に〻便ありと申をまた由井伊豆丸山豐後渡瀬淡路を差遣を三士〻却て味方の利あらんと云忠繼矢野佐分利が言と相齟齬するを以てその故を問るゝに三士君公人數を推出させ玉ふ〻合戰と望ませらるゝに非や身方大軍あるを見て敵地の利なきとき〻必怖て出べからぞ君公合戰を挑まるゝとも得べけんや敵地の利を賴みて出す處と身方

〻大軍なり長々と出させて後急に討之勝とあんの内に若人數を向られば早死を善とす利隆公の備へ續なべ敵見をなして未戰はざるさきに引返すらんと申せば忠繼汝等が云所尤なりとて遣作もあく敵を追拂はる利隆〻見之勇み進むといへども目付城和泉守永盛源君の命なりと云て强て制之利隆憤り抑て兵を收んや否やと思惟する處に阿部四郎五郎諸手を巡てこゝに來る利隆この由を告らるゝに阿部兄弟の身と云眼前の敵といふ忠繼若し不克べ是兄弟を棄たるなり忠繼又克之〻是自怯のそしりを取るなり兩ながら武家の恥辱なれべ只進に不加と云一言に力を得て永盛制すれども不用利隆の將利隆始より貳あらぞ何をか疑て沮止らるゝや敵を見ながら卻て兵を收〻師を起して此に來るもの何の爲とかそる源君決して加此の非理の命あるべからぞと云永盛齒をかみ小躍して汝等吾言を輕蔑すその罪重し必言上を遂て一々腹切せんぞと大に怒る利隆の將勿論のとなり士たるもの其君の爲に腹切んとわ本より所甘也とて中津川を渉りて横ぞぎかへに蒐る敵この兵勢を見て中途より引入て合戰に不及大坂沒落の後利隆懷携貳両陣の中に居て主客の勝負を料る是弱を叛て强を快せんとするものなりと讒言に遇て源君利隆を罷責せらるべきの沙汰あり利隆番大膳を以て毫厘も不忠の志非義のとなし皆永盛が所爲なるとを陳せらる番〻

厨養の卒より經のぼり騎士の將と爲て政を預聞程のものなり始終少も不跪辨舌審に子細をのべたり源吾はじめ簾を隔て利隆が何をか陳せんと怒らせ玉ひける番が言ふ所理明かに證正して疑ひとゞく解けれバ簾の外に出させ玉ひて段々聞し召屆けられぬ以後を慎めの上意なり番頭を壁に付て拜して不立本多佐渡守正信御前に在て罷立て忝上意なり飯て此旨申聞せよとありけれども番猶不立正信事濟で不起ハ故あるかと被尋其時少し頭を上正信の方を見て憚多き事なれども以後を慎めとの上意ハ利隆が誤なき段未聞食屆けられざる處有かと存候是より先にかつて過ち御座無候へバ以後よも亦只今の通に候別に可慎のとあらぬと申源君重て已利隆の誤なきとを知れり更に疑を不遣との仰なれバそのとき頓首再拜して飯る正信以下座にある人々大に番を嘆美せり

常山紀談附錄

雨夜燈

秋雨の夜半に寒燈を剪て古き物語を書集めぬれバ是なん雨夜の燈といふべき

〇權現樣駿府に御隱居遊され大御所樣と申奉る台德院樣江戸より駿府へ御出なされ二の丸に二ケ月餘御滯留なされし時權現樣阿茶の局を召て將軍にハ年若き人あり旅住居二ケ月になりぬ夜中徒然なるべし花を食にして菓子をもたせ裏道より忍びやかにやれもし慰にも成ぬべきなり我云たると聞れなバ隔心あるべし汝が心得に能はからへと仰られけれバ阿茶の局御心の付きたる上意なりと御請して花其比十八歳女中第一の美人なりしを殊に取繕はせ下女に菓子をもたせ初夜の比裏道より密に參らせけり內々阿茶の局よりかくと申しければ台德院樣御上下をめし待せ給處に花參りて御庭の戸をれとづれければ台德院樣御自身戸を明られ花を上座ゑ直し菓子を御取是ハ大御所樣より下されたるなるべしとて御いただきなされ花早々歸られよと仰られ先に御立なされ戸口まで御送りあされけれバ花乘てたくみしど遲ひていらへの詞もなく歸りてかやう〳〵なりと申ければ權現樣聞し召將軍ハ律義第一の人なり我はしでをかけても及がたしとぞ上意ありける

〇三河國寶形原の合戰に權現樣御負なされ潰松をさして御人數崩れし時甲州の士大將秋

山伯耆下知して黒鹿毛の馬に乗て鎗をべもたせ再拜を腰にさし度々取て返す武者振敵の大將ぞ櫂現様追つめて討取れとて急に追かけたり御馬廻り殘り少く討れければ櫂現様にも御討死の覺悟なされ御馬を引返されし時夏目長右衛門こゝに御討死の場にあらせ早御退なされよと申て御馬の口を濱松の方へ率向け鎗おつとり御馬のさんづをたゝみかけて叩きければ御馬かけ出て敵と違ざかりぬ長右衛門踏とゞまり敵の多勢に取まかれ鎗の柄のをるゝはど戰ひて討死しけり

大猷院様の御時御悦事ありしに諸大名出仕にて徳川の御家御繁昌の事さま〳〵物語ありし時新太郎様備前少將光政朝臣や、暫く何の御詞もなく御座なされしが夏目長右衛門冥形原にて櫂現様の御命に代り不申ハかやうに御繁榮ハ御座あるまじきよし仰られしを大猷院様聞し召徳川家の士の節義の心を今更引起したる詞なり智者の一言ハかゝる事なるべしと大方なら世御悦にてありけるとぞ

○松前伊豆守元祿年中京都町奉行勤られし時海保友竹といふ醫師參て紅梅のよく開たるを生置れしを見て御所司代并こなた様ならでハかやうの初花見申さぜと申けるに伊豆守とかゞの返答なく落涙せられけり友竹いかなる故にやと案し居たるにやゝあつて能こそいはれたれ誠に左様なるべし我等不肖の身にて斯る重き役義を仰蒙り威勢あるを知ぜうかと心付ざるハ大きなる油斷なり是に付ても大事の役ぞと思へバ氣遣ハしく落涙したるぞといはれしとなり假初の一言にもかく心を付られしハ古の君子の道なるべしされバ此人の仁德京都にて後世で申傳けるとぞ

○律義なる者ならでハ武邊ハせぬよし昔より云傳へたり加藤主計頭清正剛の者をはしく思ひ一生の間目利に心を尽し人相まで稽古致されしかども其術を得られぜ唯律義者に武邊者しといはれしと奇り又加藤左馬助嘉明も申されしにハ氣さきのけなげなる者ハ人の目を驚かすほどの働をするといへども踏つめたる武功ハ律義なる者にありたとへバ頼みもなく旦那の威衰へて人々二心を持つ中に獨義を守りて心がはりなき強みハ律義者ならでハあき事なり蹈ひ者ハたとへ万一に一旦の武邊ありても曾て頼にならぜ旦那の出頭を心掛知行を取て人に笑ハるゝをも恥とハ己も知れども其恥を恥かしとも思ハぬ者ハ旦那を殺しても身の爲のよき事ならバ爲べきなり偽と貪とハ品ハかはれども落着ハ同じ事なりと云れしとなり

○松平越後守光長子なをりしかば家督ハ實の弟永見大蔵なるべしと大藏も思ひ又家中も大か

た是ぞと思ひ追從しけり小栗美作あくまで邪智ある者にて御家督ハ大藏殿にてあるべしと云人あれば左樣にぞあらんと返答ぞ大藏聞傳へて悅べり偖江戸へ家督の事窺に美作行バ大藏も頼むとハなければぞ暇乞に事よせて念頃の体なり美作江戸へ行才覺を廻らして三河守を立べしとの讃定なり一伯配所にての子永見輔毋と云其子を三河守とハへり永見大藏ハ賴母が弟なり是も配所にて生れたりとなり是より大藏大に本意を失ひ家中日頃大藏へ取入たる面々もあきれたり然れども上意と披露ぞる上ハせん方なし美作ハ大藏を欺きたりと獨笑して三河守をもり立て權威を大に振はんとおもへり大藏たへかねて入魂の面々徒黨して美作を打果さんと荻田主馬なぞ張本たり美作空知らぬ振して取合ぞさて美作ハ越後守の妹婚なれば子大六は越後守の姪なり一門の如く家中の士敬ふべしと云せけりこれより家中騷動して終には江戸へ訟へ數年決定せざりしゑ常憲院樣御代始御自身双方の公事を御城殿中にて聞召御決斷ありて越後高田二十五万石召上られ美作死罪仰付られ子の大六は曹源寺樣へ御預天和元年六月廿二日御屋敷弓場の東作庭にて是も死罪に仰付らる永見大藏荻田主馬ハ八丈島へ流罪其外死罪流罪に仰付られたる士數多なり此取扱に付渡邊大隅守八丈島へ流罪松平大和守閉門仰付られ翌年二月閉門御免姫路十五万石召上られ豐後日出にて五万

石下され松平上野介廣澤三万石の内一万石召上られ酒井雅樂頭久世大和守御老中職召放されけり是皆越後守暗弱にて威を家老用人に奪はれ欺かれしゆゑなり常憲院樣の睿斷異國唐の玄宗を太平の天子と申しにくらぶべしと其節より諸國畏れ服し奉りけると也

○池田の御家ハ御家老土倉市正ハ四郎兵衛が養子にて實は龍川左近將監一益の先手の士大將岩田小左衛門なり新太郎樣御使番に誰か可然と御吟味遊ばされ未決定せぞ市正ゑ御尋なされしとき市正承り中村忠左衛門可然と忠左衛門事私共に對し毛頭も諂ふ心のなき男にてあの如くなる者に仰付られぞして誰か外に御座有べきと擧立ければ新太郎樣御機嫌大かたならぞ忠左衛門に使番を仰付られけり日頃市正と忠左衛門とハ大に不和なり御前にての樣子を忠左衛門ゑ語り聞せし人ありければ忠左衛門日頃の不和を少し後悔の氣色あり又此由を市正に語りける人ありければ市正御尋によりて能人を申上る事ハ御國の爲なり毛頭も私の慮なきことなり不和ハ本の通りの不和にてこそあれ忠左衛門ハ吾心を知ぞと云れしとなり此をぞ家老の職分を失はぬ人と申べし君々たり臣々たりといふ事誠なるかゑ

○大内義隆ハ周防長門豐前不殘領國にて安藝石見も領地なり大宰大貳を兼たる故筑前も下知に隨へり周防の山口に居城して其比並なき大名なりければ漸武備に怠り遊山を樂み茶

の會に日を暮し家中國中の難儀を露も知らぎ仕置ハ家老の陶尾張守晴賢に任せられしかば尾張守二心を持きざし有毛利元就是を察し或夜密に義隆の前に出て古より國を奪ひたる事皆其家の家老にてそれ故明君ハよく家來を引まハし威を家老に奪れぎ若し威を家老に奪ハれしときハ役儀を云付知行を賜ふとも其主君よりの下知と不存家老より取はからひ申すと必得て其主君ハあれども無がごとくす家老役人の勢次第に强くなつて後にハ其主君を殺し國をも奪ふ者也今の樣子危く有し御心を付られよと申給ひしかども義隆合點なく遂に尾張守殺され給ひけり案ぎるに是ハ亂國の世の事にて太平の時ハ君を殺し奉る事ハなけれども主君をだまして其威を奪ひ取ハ家老用人の常の事なりされバ熊澤助右衛門後に了介新太郎樣の御とき執政たりしが常に人ゑ語りてやがて今の大名ハ家老用人にだまされ我國ハ皆家老用人の物と成を知らぎ下の敬ふを能事としてだまそといふ事も少も知らぎ下の情露ばかりも心付なく何十万石の身上にても國を持たるにてハ有べからぎと語られしよし智者の詞何かハ違ふべき思ひ當れる世と成ぬるぞ悲しさ

○稻葉伊豫守一徹織田信長に從ひけれども信長心解ぎ數奇屋にて茶を賜ハり其席にて刺殺すべしとの巧なり一徹數奇屋に入る時相伴の三人挨拶に掛物の箱の讃を讀給へといふ是は韓退之の詩にて雲横秦嶺家何在雪擁藍關馬不前といふ句なり一徹少し學問ありて讀けるに相伴其心を問ふ一徹あらく子細を咄しけれバ信長壁越に是を聞つと走出て一徹にハ荒勝負ばかりする勇士と思ひしに今聞く處文字にも達せり奇特の事感ぎる餘に實を語るべし今日のもてなしハ茶の湯ゑ非ぎ其方を刺殺さんとせし巧みあり相伴の三人皆懷劍を差たり今日より永く我に從ひて謀を致されよゆめ〳〵害心を止たりと云れけれバ三人の相伴懷より小脇差を取出ぎ一徹平伏して死罪を御免下されし事忝し私も内々今日殺さるべきとハ察し申し詮方なく是非一人相手を取可申と存用意仕るとて是も懷劍を取出して信長に見せ申けれバ信長いよ〳〵其心がけを譽られけり

○青蓮院の宮にや幼き宮方に中院前内府通茂公御後見たりしに或時將棋盤のあるを見て家司坊官を呼て何迎がやうのはしたなき物を置けるぞはしたなき業ハ本よりわしければたとひ有ても御年もきての後ハ御心付て止事も有ものなり是等ハさして惡事にあらざれども其事になれ空しく月日を過し御學問の御志怠るものなれバあしきもの也と云れけり誠に内府公の詞尤至極たるべきなり又或時其宮へ出入する者尺八の名高きを御目にかけたり大事の器とて折紙など付たりかゝる處へ内府公御入有てこれハ誰がわざぞかやうのもの御目に

かくる事やあると云まゝに柱に打あて、碎かれけり其後尺八の主參りけるに其由を語り聞せ返す〳〵寶物打碎かれける事氣の毒なりと坊官など云しに尺八の主少も苦しからぬ唯私の持たると内府公の聞し召れん事恐しく御聞なさい私の仕合なりと申けるとぞ其子通躬卿も嚴なる人よておはしけり人の後見よいかゝる人をつけ度事なり

○新太郎様常々御意あり家中國中を能治んとならば威と恩との二つなるべし威なくして恩ばかりなれべあまやかしたる子の教訓を聞ぬごとくよて用に立べからぬ又威ばかりにて嚴しきを第一とせべ上向よ納得するとも眞實になつきたるに非れべ是又散々の事なり恩にて能なつけ法度の少しも崩れざる如くに賞罰を行ふを威といふべし恩信なけれべ威も無用の事なり威なけれべ恩信も用に立ぬ然れども畢竟の所い能下の情を知る事大事なり下の情を知ざれべ恩信も威も用に立まじきぞ兎にも角よも聖賢の教へを稽古なくてい此一事い知りがたしと仰ありしとなり

○前橋の城主酒井雅樂頭忠清佐藤五郎左衛門直方を殊の外崇敬にて客人のあしらひなりき或時五郎左衛門井伊掃部頭のもとに招請せられ未だ掃部頭對面し給いざるうち家老用人物語しける時五郎左衛門申けるい大事と申ものい勿論少しのわざにても傳授稽古と申とこれありて師匠に便りて習ひ受其上を工夫を尽してやう〳〵と合点參るものなるに日本にてい至極大切の事よ傳授もあく稽古もなく自己の分別にて埒を明ること有之各〳〵達いかゝ哉といふ家老どもいや皆々存し不申如何と問けれべ其時五郎左衛門されべ其事なり一國の仕置にて數万の士民の一命よかゝる大事にて安危の至極なりそれ故異國にてい聖人賢人の教へおかれし詞萬世の錢に成ぬる道を稽古いたし今の君臣ともに此稽古なく自己の分別にて埒を明られなべさても〳〵危き事の至極なりと語りけり

右雨夜燈一卷。備藩湯常山先生。所述也臣嘗借二諸松崎君脩氏一謄寫。以爲二家珍一焉。今命二筆工一寫取一本。以備二棲霞公子之覽一。仰希公子且夕誦レ之。有下以助中爲二人君一盡二天職一之志。云レ爾。

明和八年辛卯秋九月八日

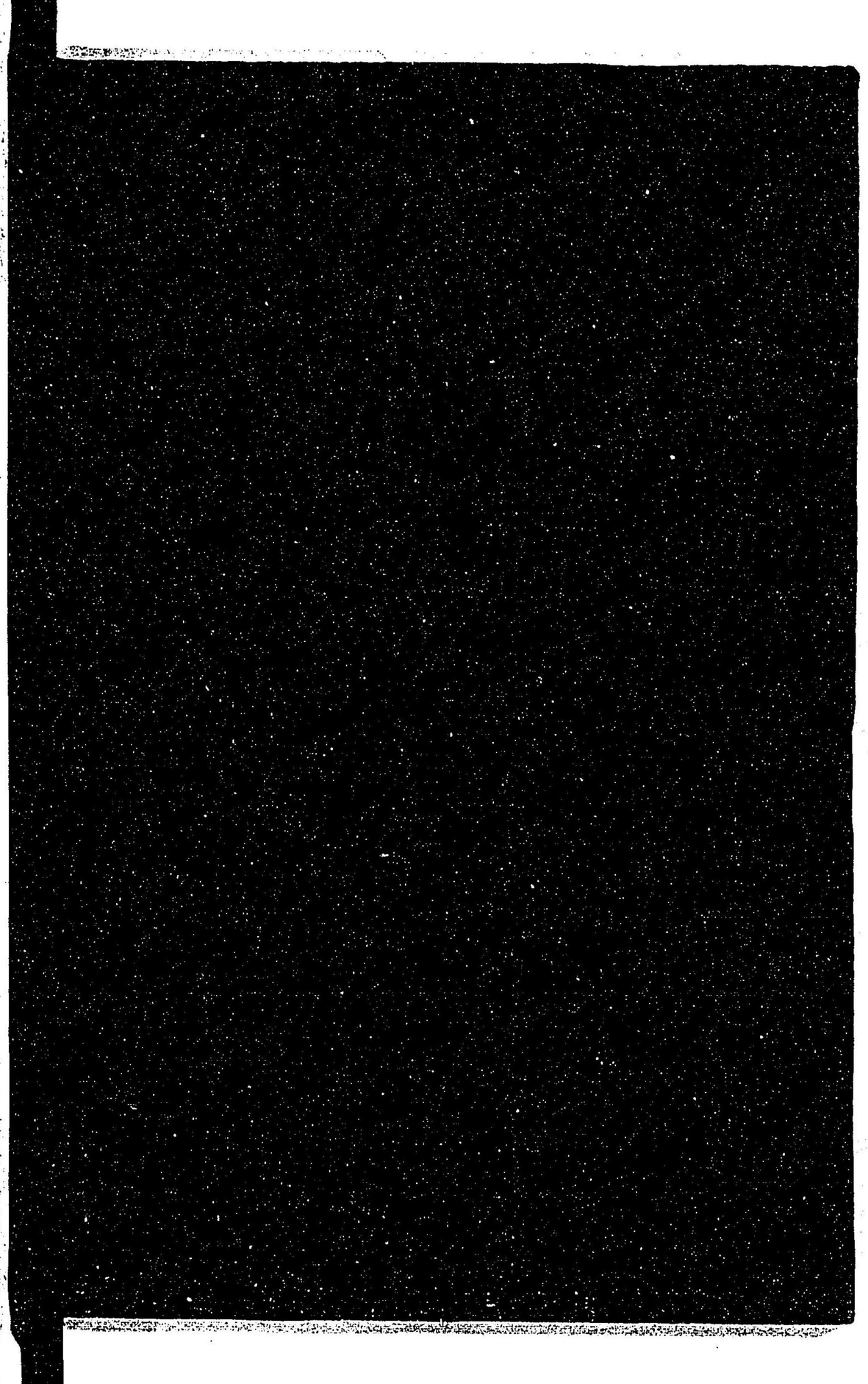
臣赤松勳恐惶謹跋

明治十九年十一月廿六日出版御屆
仝廿年四月日刊行

定價壹圓廿五錢

訂正兼出版人　大坂府士族　藤江卓藏
大坂府西成郡川崎村四百九番地

大坂東區本町四丁目　辻本秀五郎
仝　東區南本町四丁目　梶田喜藏
仝　東區南本町三丁目　大辻增五郎
西京三條柳馬場東へ入　辻本尚書堂元舗
東京日本橋區南傳馬町二丁目　辻本尚書堂支店



004555-000-1

特12-536

常山紀談

藤江　卓蔵／訂

M20

ACE-1153